

BRITISH MUSEUM

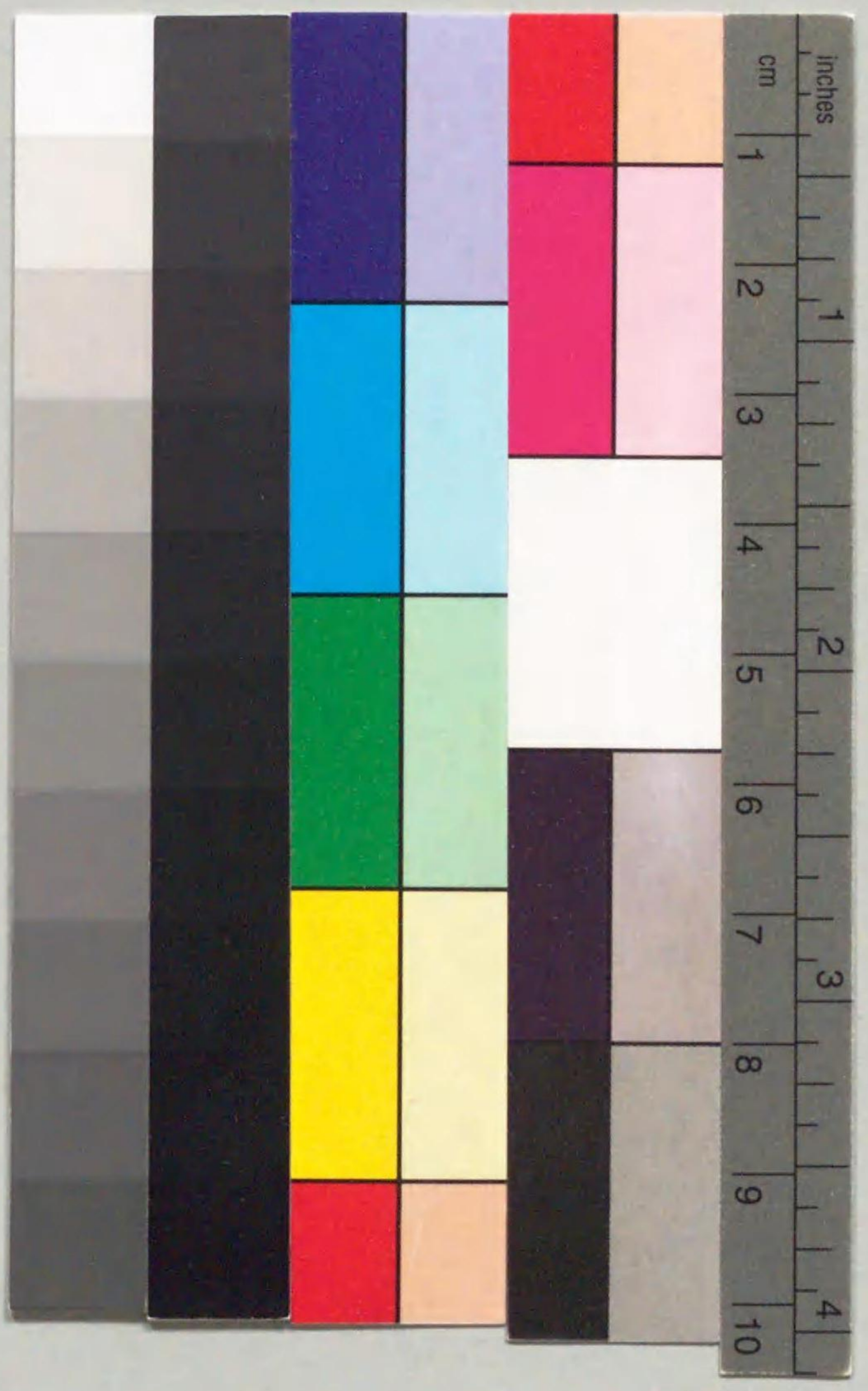
BRITISH MUSEUM

GB421

22



00738945



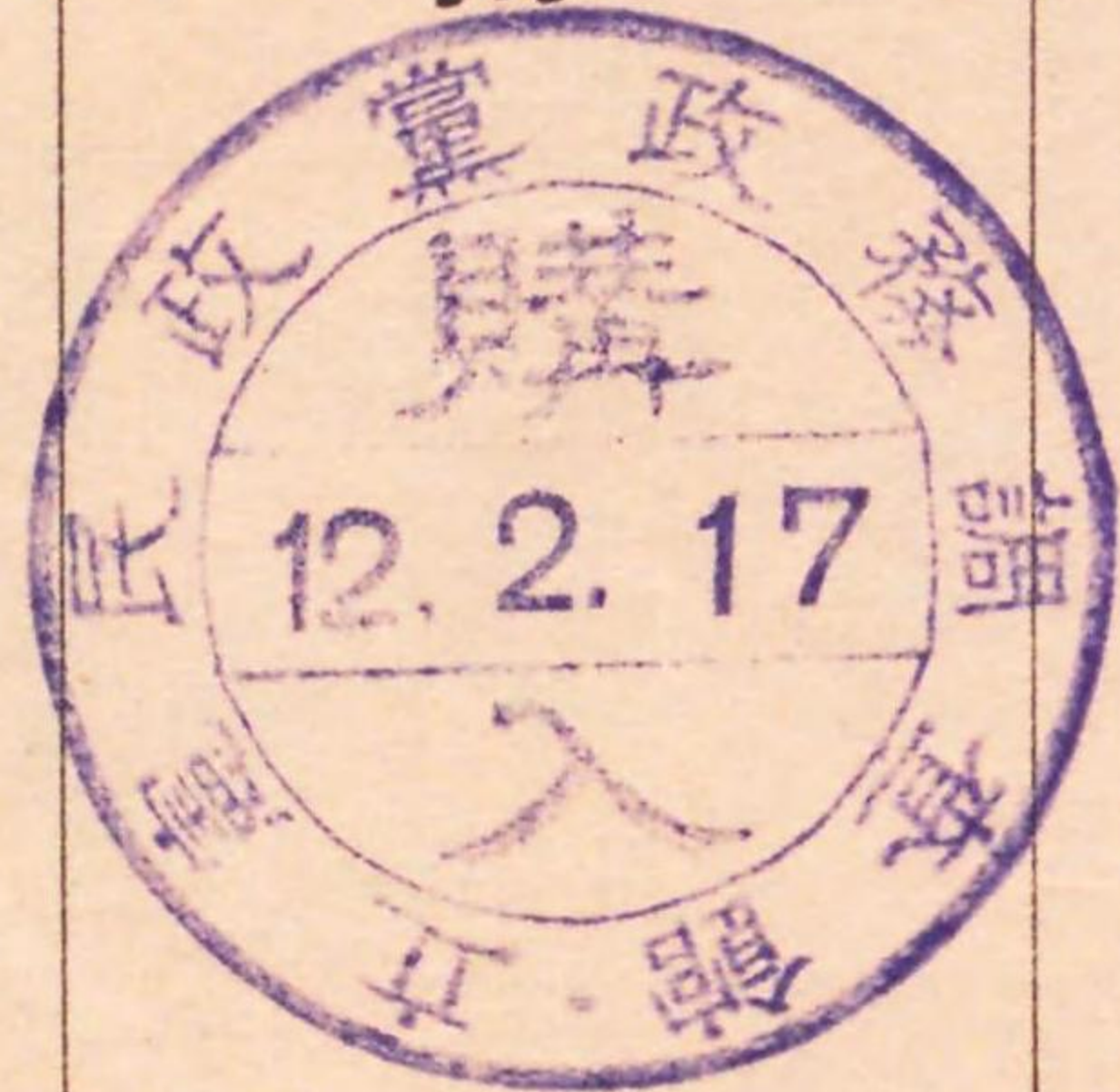


昭12  
A  
27



德富蘇峰序  
吉本襄撰著

海舟先生  
氷川清話



大文館書店發行





冰川邸之圖

GB421

22

吉  
本  
書  
刊

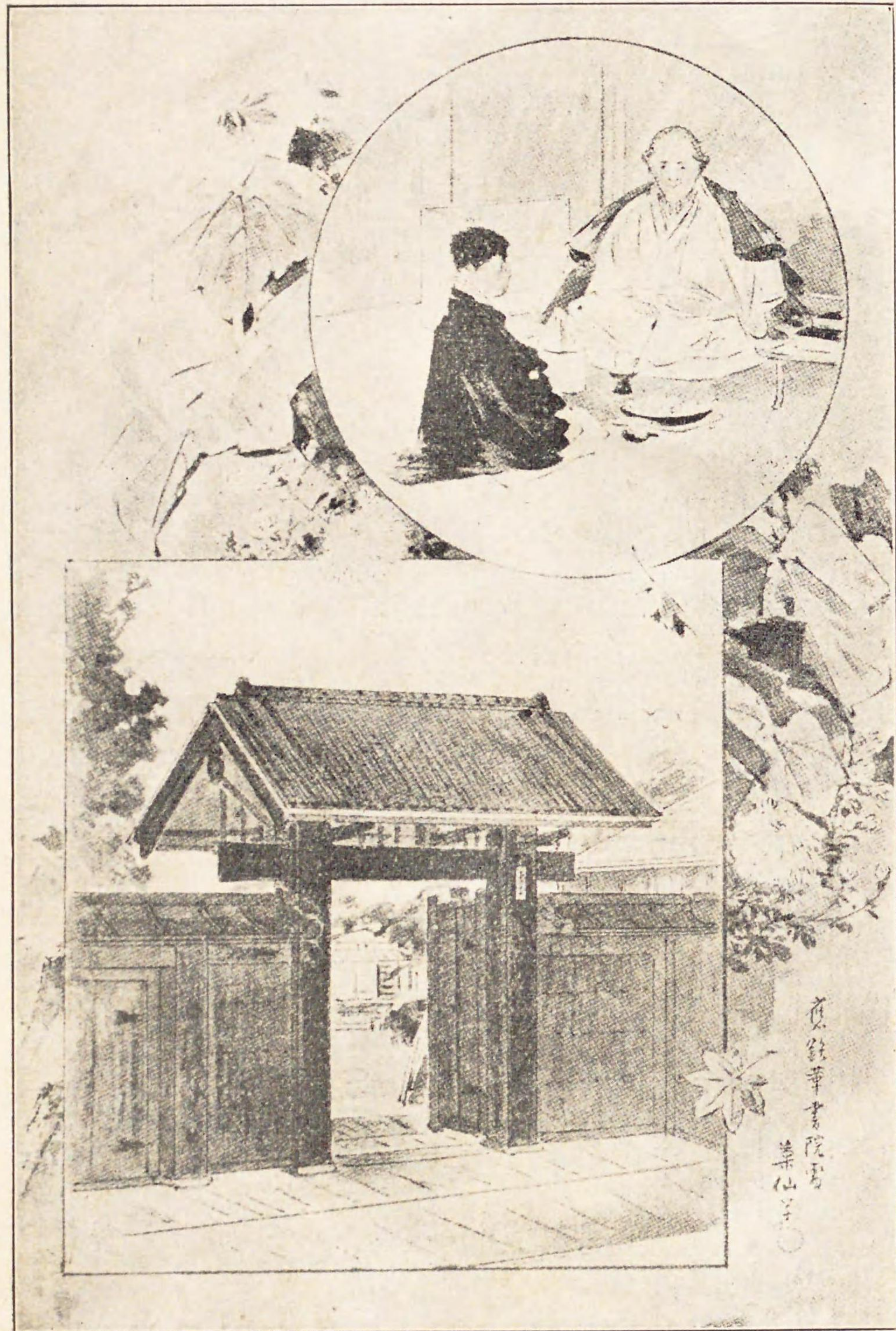


川  
書  
館

大文館藏

738945





水川邸之圖

GB421

22



... 738945



序

拜呈、今度氷川清話御出版に付、拙者にも一言海舟翁に  
關して、開陳可致旨、致敬承候。海舟翁は、小生に於て  
は二世の師に候。其の餘りに近接したりしが爲めに、今  
更ら白々敷、兎角評判も致し兼候。

但た海舟翁か、衆人封建的の天地に踟躕したる當時に於  
て、早くも舉國一致的の大經綸をなし、九死一生の衢に  
立て、從容自若、其の難局を理め、更らに三十餘年の殘  
生を剩しつゝ、後生の爲めに活ける教訓を惠まれ候事、



何人も感謝する所たる可く候。

善く言ふ者善く行はずと申し候得共、翁の如きは、善謀善斷、善言、善行、實に稀有の人物と存じ候。

先は右迄如此候。其の簡略に過ぎ候は、餘りに言ふ可きことのなきが爲めと思召相成度候。頓首。

徳富猪一郎

吉本襄殿

### 序

勝先生は、必ずしも哲學者にあらず、而も哲學者たるの頭腦あり。必ずしも經世家にあらず、而も經世家たるの事業あり。必ずしも君子にあらず、詩人にあらず、而も君子たり詩人たるの性格と襟懷とあり。舊幕府の名士たりしと同時に、明治の逸民たり。眼の人たりしと同時に、手の人たり。而して先生の世に在るや、必ずしも大政に參與せずして、政治家の爲めに其の方針を指示し、必ずしも實務に當らずして、實業家の爲めに、其の正路を示し、必ずしも文藝に長するにあらずして、文學家の爲めに説き必ずしも、宗教に通ずるにあらずして、宗教家の爲めに喩し、必ずしも教育に關せざる者の如くにして、青年子弟の爲めに訓誡し、國民は社會の本鐸として之を仰ぎ、知らず識らざるの間に、先生の感化を蒙りたりき。是れ實に先生が、一世の達人たる所以にして、國民が今日に至るまで、其の遺徳を追懷して止まざる所以なり。

先生は、氷の如き頭腦に、火の如き感情を有し、炬の如き眼光に、海の如き度量を有



したり。而して其の意志は堅實に、其の智慮は明達に、其の精神は正大に、大事に糊塗せず、小事も滲漏せず。其の言ふ所は行ふ所にして、行ふ所は其の言ふ所なり。故に先生の言、時ありて熱罵と爲り、冷嘲と爲り、危言と爲り、痛語と爲り、政治に、經濟に、軍事に、宗教に、文學に、社會に、一切の時事問題にして、先生胸底の琴線に觸るゝ時は、一種警醒的教訓と爲りて、社會の隅より隅に反響せざるは莫し、其の故何ぞや。先生の言論は、渾て是れ至誠惻怛熱血の迸る所にして、眞和を局外に求め禪機を手中に弄する者あれば也。予が茲に『氷川清話』を撰刊したるは、先生が社會的教訓を世に紹介せむが爲めなり。

顧ふに、予の始めて本書の刊行を先生に乞ひしや、先生懇ろに語りて曰く『損をしてはならぬから、止めた方が宜からう』と。又當時先生が、樞密院に於て、東久世伯、尾崎男に會せし時にも、予が爲めに心配する旨を洩されたりと云ふ。然るに、此の書一たび世に出するや、讀書社會の之を歓迎する、恰も大早の雲霓に於けるが如く、初版即日に盡き、再版三版も亦旬日を出でずして盡き、斯くて版を重ねること十有餘版

に達し、進んで、出版界に獨行濶歩したりし者は、人心渴望の機に由ると云ふと雖、先生の人物、性格、事業、社會の中心たり、一代の鐸木たるにあらざるよりは、安ぞ能く此に至らんや。而して先生が曾て予の爲めに心配せられしは、全く一片の婆心たるに過ぎざりし也。

先生逝きしより爰に十年、社會の風紀益々頹敗を告げ、人心茫洋として歸する所を知らず。是に於て乎、天下先生の風采徳容を追懷して、其の片言隻語を珍重し、本書を讀まむとする者、愈々多きを加ふるにあり。然るに、毎編原版漸く磨滅し、江湖の希望に應ずること能はず。因て今者、三編を合して、一部の書と爲し、更に全體に改訂を加へ、其の談話の如きは、性質に因て之を類別し且つ、原版外の清話數十則を増加し、以て先生に私淑せむに欲する有志の士に頒つことゝ爲しぬ。先生在天の靈にして知るあらば、果して贅擧と爲し給ふや否耶。

嗚呼、先生は大人也。哲人也。君子也。其の事業必ずしも大ならずと雖。其の徳は盛んに、其の教は長し。而も其の正氣凜然、天地の間に磅礴たるに至つては、千載朽ち



す。永く我國民の教訓と爲るや必せり。是れ予が本書を撰刊して之を世に公にせし所以なり。

吉 本 襄

緒 言

皇城の西、氷川河畔、幽邃絶塵のところの一邸あり。邸は、蒼然として古色を帯び、門前老松を垂れて地を掩ふ。門を入ること十數歩、玄關を上り、進みて突き當りの西洋室より左折し、廊下傳ひに一室に入れば、それを隔て、其の奥にまた一室あり。廣さ六疊、蒼蔚たる庭樹に對し、清麗淨潔、一點の塵氣を留めず。中に瀟洒たる鶴髮童顔の翁、淡然几に凭りて、白眼一世を睥睨し、來るものは大臣と書生とを問はず、華族と平民とを論ぜず、みなこの室に引きて高談清話、時の移るを覺えざらしむるもの、これを勝海舟先生とす。

勝先生は、物部氏なり。その先は、石上宅嗣に出で、太郎季時に至り、始めて勝氏と稱す。子孫、今川氏に屬するものありしが、中興の祖、市郎右衛門時直、天正三年徳川氏に岡崎に奉仕してより代々渝らず。先生に至て四ツ谷大箆笥組五十四人中の一家となり、祿、四十一石餘を食む。先生の父を左衛門太郎といひ、夢酔と號す。男谷氏



より入りて嗣となる。

男谷氏の出處につきて兩説あり。一は以て武藏川越とし、一は以て越後小千谷とす。後説蓋し信すべし。傳へいふ、所謂田沼時代に當りて、越後小千谷村の農家に盲兒あり。年僅に十七八、腰に青錢三百文を纏ひ、有爲の志を抱ひて、遙に江戸に來り、各處に彷徨す。一夜大雪あり、凍えて奥醫師石坂宗哲の門前に倒る。宗哲之れを憫れみ、數日其の供部屋に居らしむ。當時賭博盛に行はれ、石坂邸内、亦通宵奇偶の職を絶たず。盲兒傍にあり、輸者に青錢を貸して利息を收め、數日にして一兩二分の巨額を得たり、宗哲之を奇とし。別に一兩二分を與へ、去りて生業を求めしむ。盲兒これより刻苦勉勵、遂に巨萬の富を致して、江戸に十七ヶ所の地面を有し、水戸家のみへも十七萬兩を貸附するに致れり。盲兒は、即ち男谷檢校にして、實に先生の曾祖父に當る。

檢疫終身絹衣を用ひず、常に綿服を着く、而も一日着すれば、復た之を用ひず、貧民に與へて之を賑はせり。死するに臨みて、諸子を枕頭に招き、諸家の借金證書を

取りて、悉く火中に投じ、以て之を激勵せりといふ。

檢校の第九子を平藏といふ。平藏の第七子は、即ち先生の父、左衛門太郎これなり、先生、は字は義邦、遷稱麟太郎、また安房守と稱し、海舟と號す。然れども維新後、單に安房の名を用ふるを常とせり。六政六年正月まで、本所龜澤町の邸に生る。十六歳の時家督を續ぐ。

安政二年、先生、年三十三にして長崎表海軍傳習所用を命ぜらる。翌年、講武所砲術師範役に任ぜられ。同六年、海軍操練所教授方頭取と爲り、その年の秋、米國航海を命ぜらる。七年歸朝。文久元年。また講武所砲術師範役となり、二年、軍艦操練所頭取となり、尋いで軍艦奉行並となる。元治元年、更に軍艦奉行となり、塾舎を兵庫に開きて海軍を教授す。志士來り學ぶもの多し。今の伊東海軍大將の如きもその一人とす。十一月急御用あり、遽に江戸に歸りしが、慶應二年、また大坂に召されて、軍艦奉行となり、同四年、海軍奉行、軍事總裁等に歴進す。時に年四十六。

維新前に於ける先生の半生は、かくの如く殆ど海軍の爲めに費されたり。我國海軍の



創設つきては、先生の力實に與かりて多きに居る。

戊辰の役、官軍東征の途に上るや、幕臣或は邀へ戦はんと欲するものあり、江戸の人心恟々たり。然れども將軍固より同意なきを以て、先生に命じて之を處するの策を講ぜしむ。先生、命を奉じて、危難の際に處して動かさず。總督宮、駿府に至らせたまふに及び、上野の輪王寺宮駿府に至り、將軍恭順の狀を陳じて、寛典の處置を請ふ。總督宮、謝罪の實なきを以て、未だ之を許し給はず。先生また山岡鐵舟等を遣はして之を請ふ。既にして官軍の先鋒品川に至り、將に江戸城に入らむとす。是に於て、先生自から赴きて、參謀西郷隆盛に面し、將軍の旨を縷陳して、百方其の調停に盡力す。隆盛之を容れて、直ちに進撃中止の命を下し、狀を總督宮に啓す。之によりて官軍一刃を動かさずして、江戸城に入ることを得。王政復古の大業、平和の間に成就す。先生が絶倫の大手腕は、實にこの時を以て天下に顯はれたり。明治二年、外務大丞を命ぜられ、即日之を辭す。次いで兵部大丞を命ぜられしも、また直に之を辭せり。同五年、海軍大輔に任ぜられ、從四位に叙せらる。翌年、參議兼海軍卿に任ぜられ、七年

正四位に陞る。同八年、元老院議官に任ぜられ、また直に之を辭し、爾來閑居してまた劇務に執掌せず。二十年、華族に列せられ伯爵を賜ふ。蓋し維新の功によりてなり。尋いで從二位に陞叙せられ。翌二十一年、樞密顧問官となる。先生、年既に七十餘才の高齡に及ぶも、老體なほ頗る健にして、意氣雲霄を凌ぐものあり。

以上を先生が經歷の一斑とす。若し夫れ先生の人物に至りては、後進余の如き者の、能く品題し得べき所に、あらざるを以て敢て一言も之れに及ばざる也。

予、しばし先生に親炙して、諄々たる其の高教を聴き、啓發せしもの少からず。乃ち餘韻の耳底に残れるものを録して『氷川清話』と題し、附するに先生の逸事と詩歌とを以てし、世の先生を欽仰する人士に頒つと云爾。

### 選者誌





改増  
版補  
氷川清話

吉本襄撰

語  
一  
錄

1 錄 語

おれが海舟といふ號を付けたのは、象山の書いた『海舟書屋』といふ額がよく出来て居たから、それで思ひついたので。然し海舟は、元と誰の號だか知らないのだ。安房と云ふのは、安房守の安房三同音だから改めたのよ。實名は、義邦だ。詩は、壯年の時に、杉浦海潭に習ひ、歌は、松平上總守に習ひ、書は、叔父の小谷にならつたともあるが、手習などに、骨を折る馬鹿があるものか。

おれが子供の時には、非常に貧乏で、或る年の暮などには、何處にも松飾りの用意



などして居るのに、己の家では、餅を搗く錢がなかつた。處が本所の親族の許から、餅をやるから取りに来い、と云つてよこしたので、己はそれを貰ひに行つて、風呂敷に包んで脊負うて家に歸る途中で、丁度兩國橋の上であつたが、どうした機か、風呂敷が忽ち破れて、折角貰つた餅は、みんな地上に落ち散つてしまつた。處がその時は、最早日は暮れて居るのに、今のような街燈はなし、道が眞闇がりて、それを拾はうにも拾ふことが出来なかつた。尤も二ツ三ツは拾つたが、あまり忌々しかつたものだから、之れも橋の上から川の中へ投げ込んで、歸つて來たことがあつたつけ。妻を娶つた後も矢張り貧乏で、一兩二分出して日蔭町で買つた一筋の帯を、三年の間妻に締めさせたこともあつたけ。この頃は、己は寒中でも稽古着と袴ばかりで、寒いなどは決して云はなかつたよ。米も無論小買ひさ、それに親は、隠居して腰ぬけであつたから、實に困難したが、三十歳頃から少しは樂になつたよ。嘗て親父が、水野の爲めに罰せられて、同役のものへ御預けになつた時には、己の家は僅か四兩二分に賣拂つたよ。それでも道具屋は、御武家様だから是丈けに買ふの

だなどと、恩がましく云つたが、随分ひどいではないか、その同役の家といふのは、たつた二間だつたが、其の狭い所で同居したこともあつたよ。

其後立身して千石になつた時には善かつたが、それが間もなく御免になつた時などは妻か非常に困つたよ。元來己れの家には其頃から諸方の浪人が澤山が食客に居たのだから。それゆゑ妻は、始終人に向て、『宿では今度は長く務めて居ますやうに。』などと云つて居たよ。

これは維新前に書いたおれの日記帳だが、この野紙に澁田藏書といふ書が入つとるのを見なさい。これはおれの大切な記念物で、話せば長いが、今も言ふ通り、壯い時分におれは非常に貧乏で、書物を買ふ金がなかつたから、日本橋、江戸橋との間で、丁度今三菱の倉がある所へ、嘉七といふ男が小さい書物屋を開いて居たので、其處へおれは度々行つて、店先に立ちながら、並べてある色々の書物を讀むことにして居つた。すると向ふでもおれが貧乏で書物が買へないのだといふことを察して、いろいろ親切に言つて呉れた。



所がその頃、北海道の商人で澁田利右衛門といふ男も度々この店へ来るので、嘉七からおれの談を聞いて、それは感心なお方だ、自分も書物を大變に好きだ、兎も角も一度會つて見ようといふので、つい嘉七の店で會つた。所が澁田のいふには、同じ好みの道だから、この後御交際を願ひたい。私もお屋敷へ伺ひますから、あなたも何卒私の旅宿へ御出で下さいといつて、無理に引つ張つて行つた。旅宿といふのは舊の永代橋あたりだったが、そこでその日は緩り談しをした。この男は元來箱館の商人の子で、小供の時から本が非常に好きで始終本ばかり讀むので、親がひどく之を嫌つて書見は一切禁じたのを、なほ隠れくんに讀んで居た所が、或る時親から見附けられてむごい目に叱られた上、懲らしめの爲に兩手を縛つて二階へ押込められ、一日飯も食はないで居らせられた。やがて日暮れになると、親はもう懲りたであらうと、思つて二階に上つて見ると、懲りる所か、縛られながらもその邊に落ち散つて有た草双紙を、足で開いて讀んで居るので、親も到頭我を折つて、これからは家業さへ忘らねば書見は許すといふことになつた。そこで澁田は非常に喜んで、家業の餘暇にはいろく書物

を買つて讀み、江戸へ出た時などには大層な金をかけて澤山の珍本や有益の機械などを求めて歸つて、郷里の人に説き聞かせるのを、一番の楽しみにして居るこいふことであつた。その談しの中にはなかく面白事があつて、人物も高尚で一才見た所では色が白くて瘦せ形で、さながら婦人の様だけれど、何處となく毅然として動かない所があつて、確かに一種の人物らしかつた。

二三日する、と澁田は自分でおれの内へやつて來た。この頃おれの貧乏といふたら非常なもので、疊といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪に燃いてしまつて。板一枚も残つて居なかつたのだけれども澁田は別段氣にも掛けないで落付いて談をして、彼是する中に晝になつたからおれが蕎麥を奢つたら、それをも快く食つて、そしていよく歸りがけになつて、懷から二百兩の金を出していふには、これは僅かだが書物でも買つてくれといつた。

あまりの事に、おれは返辭もしないで見て居たら、澁田は、いやそんなに御遠慮なさるな、こればかりの金はあなたに差上げなくとも、ぢきに譯もなく消費つてしまふの



だから、それよりは、これであなたが珍しい書物を買つてお読みになり、その後を私へ送つて下されば、何より結構だといつて、強いて置いて歸つてしまつた。この罫紙も實はその時に澁田が呉れたので、面白い蘭書があつたら翻譯して此紙へ書かせて下され筆耕料などは今の二百兩の内から拂つて下されと頼んだのだけれど、實際はおれが貧乏で紙にも乏しからうと思つて、それで呉れたのだ。その後も度々罫紙を送つてくれたが、この日記帳もつまりその紙で綴ぢたのだ。

それからといふものは双方絶えず音信を通じて居たが、おれがいよいよ長崎へ修業に行くことになるに、澁田は非常に喜んで、これでこそ私の平生の望みも達したといふものだ、私も一度は外國の土地までも行つて見たいと思ふけれど、親の遺言もあるから自由な事は出来ない。が、今日あなたに斯様な御命令の下つたのは私に下つたのと同じ様に私は心得て居るから、どうぞ十分に御勉強なさいといつて、おれを勵ましてくれた。おれもこの男の知遇にはほとく感激して、何時かはこれに報ゆるだけの事はせうと思つて居たのに、惜しいことには、澁田はおれが長崎に居る間に死んでしま

つた。こんな残念な事は生れてからまだかゝつたよ。

長崎へ行く前におれが澁田と別れる時に、澁田は、萬一私が死んで貴下の頼りになる人がなくなつてはといつて、二三人の人を紹介してくれたが、その一人は嘉納治右衛門、これは治五郎の親に當るので、灘で酒屋をして居たのだ。後におれが神戸へ行た時には、機械の類はみんなこの人に買つてもらつたのだ、今一人は伊勢の竹川竹齋といふ醫者で、その地方では屈指の金持で、藏書も數萬卷あつた。それから今一人は日本橋の濱口、國會議員をして居る濱口の本家であつた。すべてこれ等の人はそれく一種の人物で、流石は澁田の眼識は高いものだ、おれは後で覺つた。御維新後におれは箱館奉行に談をして、澁田の遺書を一切奉行所で買ひ上げて、その子孫には帯刀を許すようにして遣つたが、後で奉行は珍本の澤山あつたのに驚いて居たよ。

箱館の人に聞いて見ると、澁田といふ男は稼業には勉強するが、あまり性急な爲に時々失敗したといふ位な事で、誰もそのえらかつた事を知らない様だ。

全體澁田は自分でも餘り高ぶらなかつたのだけれど、併し或る時おれに向つて、世間



でいふ所の大家先生にも餘り感服する人は居ないといふた位で、世の中の人を餘り恐れては居なかつたのだ。あの嘉七といふ本屋に聞いたら、澁田が毎年買ひ入れる書物の代は、どうしても六百兩以上であつたといふことだ。

おれは今日までに、都合二十回ほど敵の襲撃に遭つたが、現に足に一ヶ所、頭に一ヶ所、脇腹に二ヶ所の疵が残つて居るよ。

安政二年におれが始めて海軍へ出てから維新の頃までに、随分いろ／＼の危難に遭遇して、これが爲におれの膽も坐つたのだ。

これは安政三年のことだが、その秋ちやうど海軍傳習所の學年代りで、生徒も教師も大低代つたけれど、おれはなほ残つて居つたので、その際三日ばかり休日があつた。

そこでおれはゴツトル船に乗つて遠洋航海を遣らうと思つて、教師に願ひ出た所が、この二三日は天氣が危いから、今少し後に延ばせとの事であつたけれども、既に海軍へ出て居る以上は、難船して死ぬるのは固より覺悟だといつて、生徒柴弘吉外七八名と水兵六名を連れて、強ひて行掛けた。教師はくれ／＼も、強ひて危い所へは行くな

大低十五六里位を限りにして、それより遠方へは出るなと、親切に注意してくれたけれど、深くも耳に留めずに、五島あたりまでは何の事もなく進航した。すると西南の方から忽ち暴風が黒雲と共に吹き起つて、帆も何もすつかりきかなくなつて來た。さあ大變だといふもので、之を防ぐ方法を講ずるのだけれど、水兵どもは狼狽して、ちつとも指圖通りに働いてくれない、兎も角も肥前の海岸へ寄らうと思つて、總掛りであせるのだけれど、風はますます荒れるし、術はまだ拙ないと來て居るから、瞬間の間に沖の方へ吹き流されてしまふ。おれは早く錨を上せと命令したが、海が深くて三十尋の錨繩では底へ届かないといふ。彼是する中にとろ／＼暗礁へ乗り上げて、舵は毀れるし、船には孔があいて潮水がどん／＼はいりこむ。おれは其處で、もう駄目だと思つて、大聲で以て、自分が愚かで教師の命令を用ひなかつた爲に、諸君にまでこんな難儀をさせる。實に面目もない次第だ、自分の死ぬるのは、正に此時だと叫んだ所が、水兵どもはこの語に勵まされて、再び勇氣を回復して、これからは手足を動かすやうに萬事おれの指圖に従つてくれて、どうかかろ／＼か暗礁をも離れた。それにまた



幸な事には風雨もこの時分から次第に止んだので、一同全力を盡して海岸の方へ寄せ着けた、その夜は海上に浮びながら、兎も角も船を假りに修繕して、翌日晴天になるのを待つて、とうとう他人の助は少しも借らないで長崎まで歸つて来て、それから直ぐに教師の處へ行つて昨日からの顛末を談してその命令を用ひなかつたを謝した所が、教師、名前はカツテトラキといつたが、笑ひながらそれはよい修業をした、幾ら幾痛を知つて居ても、實地危い目にも遇つて見なければ船の事はわからない、危い目といつても十度が十度ながら各別なので、それに遭遇するほど航海の術は分つて来るのだと教へてくれた、この時におれは理窟と實際といふものは、別だといふことを、いよいよ明らかに悟つたよ。

これも矢張り安政三年の秋の末であつたが、咸臨丸に乗つて五島あたりへ航海し、それからづつと對馬の府中へはひり込んで、三日の間いろ／＼親切な待遇を受けて、更に釜山沖へ行つて朝鮮の陸地を眺望して歸つたところがあつたが、丁度この時おれは、教師のハントローエンと、ハルヂスト、この二人と共に對馬の西北を測量して居つた

ら、小川の海に注ぐのが餘り景色がよいので、三人して端艇を下して、その小川を一町溯つた、餘り深くはないが、水が非常に澄んで底の石さへ數へられるのに、暫しは餘念もなく見とれて居た、所が突然二人の教師があつと叫んだので、おれは驚いて四邊を見まはした。すると川の岸に稲束が掛けて干してあつて、その後ろに一軒の瓦家があつたが、その稲の蔭で二人の武士が、火繩銃を以てわれ／＼を覗つて、今や火蓋を切らうとする所であつた。おれも一時は驚いたが、直ぐ様艇から飛び出て、携へて居た馬の鞭でやにはにその火繩を打拂うた、所が二人の武士も、おれの勢に恐れ、後ろの瓦屋へ逃げ込んだのを、追かけて行つて散々に叱つてやつた。すると向ふも始めておれが日本人であるといふことを知つて、大に恐れ入つて申譯をしていふには、異船が碇泊して異人が上陸するのだと思ひ込んで、私共は番士の職を奉じて居る所から、只今のやうな振舞に及びましたといふから、おれは實際の話し聞かせてやつたら、役等はますます恐れ込んで、若しこの事が表沙汰になると、私共は重い非に處せられるから、何卒内輪で濟ませて下さいと頼むので、おれも田舎武士の無識なのを



哀れんで、それなりにしてやつたが、おれもこの時からは、随分膽がすはつて、冒険の心がむやみに起つて来た。

安政六年になつて、幕府で近日外國へ使節を派遣するといふ議が決したので、おれは少し考へがあつて断然江戸へ歸ることを願ひ出た。直ぐ聞届けられたから、正月五日に朝陽艦に乗つていよいよ長崎を出發して、一晝夜で下ノ關へ着き、それから讃岐の鹽飽島まで来てこゝで碇を下した。これは年來おれと共に船で働いてくれた水兵などが皆この島の人間だからだ。それで十日に出帆して、十一日の曉には紀州の大島あたりまで来た所が、雪が降り出して風も相當に強くなつたけれども、先を急ぐから物ともせずにとしく進航して、伊豆の大島へ今二十里といふあたりまで来た。すると風はますます荒れるし、雪はいよいよ降るし、波は屢々甲板の上を洗ふので、船員必死になつて働くけれど、船は少しも進まない、そこでおれも決心して、少しでも風を受けないやうに、端艇を悉く切り捨てしまつた、風が今一層烈しくなつたら櫓も三本ながら切り倒す積りだ。士官や水兵は、随分骨を折つてくれたのだけれど、何分

飯も食はないで、水の中を働いて居ることだから、力も何も抜けてしまつて、おれさへも後ろの櫓へ體を縛りつけて、漸く指圖をした位だ。後には體が氷のやうに冷えて、聲も出なくなつた。夜になると繩が自から断れて、おれは殆んど海の中へころげこむ所であつたけれど、辛うじて起き上つて再び體を結びつけて、それでもなほ指圖をした。一時はおれも目がまはつて殆ど人事不省に陥つたけれど、水兵などもそれを助けてくれることが出来なかつたのだ、かういふ風で波のまにまに漂つて居た所が、幸に風も次第に衰へて来たから、一晝夜もかゝつて漸く伊豆の下田まで歸つた。實は此の時是一同死を決して居たので、その助かつたのはまことに意外の事であつた。今日から回想して見ても、ほんに身の毛がよだつ様だ。

又萬延年間に、おれが咸臨丸に乗つて、外國人の手は少しも借らないで、亞米利加へ行たのは、日本の軍艦が、外國へ航海した初めだ、咸臨丸は、和蘭で製造した船だ。あの頃には、幕府も浪人も、口を揃へて海軍の必要を論じたけれども、併し軍艦は、何うして製造するのか、金はどれ位入用なのか、また乗組人はどんな事をするのか、



一向だれにも分らないのサ。併し、兎に角海軍は必要であるといふとだけは氣付いたから、それでおれなどを長崎へ遣つて、和蘭の海軍教師のヘルレーキといふ人に附けて、海軍術を研究をさせたのだ、其頃の海軍術も今日の海軍術も、原則においては少しも違はない。航海術、運用術、機關術、算術など六課目ほども毎日勉強させられたのだ。天文學なども無論勉強したよ。それに皆な横文字でやるのだから、おれのように前から蘭學をやつて居たものは都合がよかつたけれど、漢學ばかり遣つて居たものが多かつたから、なか／＼骨が折れたよ。併し兎に角二年で一まづ卒業する筈だつたが、おれは都合六年も居つて新入生を教授したりなどしたから、可なりに技倆を養ふとが出来たよ。その頃また長崎の外に築地でも海軍所を建て、列藩の子弟を教育して居つたが、これ等がまづ日本海軍の基礎となつたのサ。

儲、おれが咸臨丸に乗つて、いよく江戸を出帆せうといふ場合になるこ、幕府ではなか／＼やかましい議論があつて容易に承知しない。そこでおれも、勝麟太郎が自から教育した門生を率ゐて、亞米利加へ行くのは、日本海軍の名譽である、と主張し

て、たう／＼萬延元年の正月に、江戸を出帆するこになつたのだ、丁度その頃、おれは熱病を煩つて居たけれども、疊の上で犬死をするよりは、同じくなら軍艦の中で死ぬるがましだと思つたから、頭痛でうん／＼云つて居るをも構はず、豫ねて通知して置いた出帆期日も迫つたから、妻には一寸品川まで船を見に行くといひ残して、向ふ鉢巻で直ぐ咸臨丸へ乗りこんだよ。それから横濱へ行って石炭を積み、いよく東へ向つて日本の地を離れたのだ、この咸臨丸といふのは、長さが三十間ばかりの極めて小さい船だつたよ、噸數は今一寸忘れたが、乗組員は上下合せて百餘名もあつただらうよ。凡そこの頃遠洋航海をするには、石炭は焚かないで、帆ばかりでやるのだから、咸臨丸も幾たびか風雨の爲に難船しかつたけれども、乗組員何れもかねて覺悟の上の事ではあり、且つは血氣盛りのものばかりだつたから左程心配もしなかつた。おれの病氣もまた熱の爲に吐血したとも度々あつたけれど、一寸も氣に掛けないで置いたら、桑港へ着く頃には、自然に全快してしまつた。桑港へ着くと、日本人が獨りで軍艦に乗つてこゝへ來たのは之が初めだといつて、亞米



利加の貴紳等も大層賞めて船底の掃除や、ペンキの塗りかへなども悉皆世話してくれたよ。

それからおれどもは、南亞米利加へまはつて、日本へ歸らうとした所が、亞米利加の人たちは、ここまで来ればよいから、そんな無謀な事を止めて、早く日本へ歸れといつたけれども、船中書生氣質のものばかりだからそんなには耳を傾けない。そこでおれどもより先に亞米利加へ来て居た日本の使節は、この事を聞いて、おれどもを狂氣だこいつて、斷然南米廻航の事を禁じた。使節から禁止せられては、一言もないものだから、おれどもも鬱勃たる雄心を抑へて、すこく歸國の途に上つたが、行きがけに何處へも寄港しなかつたから、歸りには布哇に立寄つて、それから浦賀へ歸つた浦賀へ着いたから、おれは一同を入浴の爲めに、上陸させて遣らうとして居る所へ、浦賀奉行の命令だといつて、捕吏がどやどやと船中へ踏みこんで来た。おれも意外だから、無禮者め、何をするのだと一喝した所が、捕吏がいふには、數日前、井伊大老が櫻田で殺されたについては、水戸人は嚴重に取調べねばならぬといふから、おれも

穩やかに、亞米利加には水戸人は一人も居ないから直ぐに歸れと、冷やかして歸らしたよ、併し、おれはこの時、櫻田の變があつたを始めて知つて、これで幕府は迎も駄目だと思つたサ。さて、これから品川へ船を廻はして一同上陸したが、おれも久しぶりで家へ歸らうとする途中で、虎列刺病に取りつかれたのだ。

航海中水夫等には筒袖の襦袢に裁附けを穿かして居たが、おれは日本服も着たり、西洋服も着たりしたよ。この頃、桑港から便りがあつたが、あの時おれが泊つたホテルで掲げて居た歓迎の旗が今に保存してあつて、時々おれどもの噂も出るさうだ。文久三年の三月に家茂公が御京洛なさるについて、その頃京都は實に物騒で、苟くも多少議論のある人は悉くこゝへ集まつて居たのだから、將軍もなか／＼嚴重に警戒して居られた。この時おれも船で以て上京したけれど、宿屋が何處も彼處も塞つて居るので、致方なしにその夜は市中を歩いてゐたら、丁度寺町通りで三人の壯士がいきなりおれの前へ顯はれて、ものをも言はず切り附けた。驚いておれは後を避けた所が、おのれ側に居た土州の岡田井藏が忽ち長刀を引き抜いて、一人の壯士を眞つ二ツ



に斬つた。弱蟲どもが何をするか一喝したので、後の二人はその勢ひに避易して何處にもなく逃げて行つた。おれもやつとの事で虎の口を遁れたが、何分岡田の早業には感心したよ。後日おれは岡田に向つて、君は人を殺すことを嗜んではいけない、先日のやうな舉動は改めたがよからうと、忠告したら、先生それでもあの時私が居なかつたら、先生の首は既に飛んでしまつて居ませうといつたが、これにはおれも一言もなかつたよ。

長州の兵隊が宮闕を犯したのは、元治元年七月十八日であつたが、おれは例の如く神戸の海軍假局に居た所夜になると、京都の方の空が眞赤に見えた、これは何か變つた事があるに相違ないと思つて、觀光艦に出帆の準備をさせて置いたら、果して翌日大阪から飛脚が来て、長州藩が順逆を過つた爲めに、昨夜蛤御門や、竹田街道や伏見表で戦争があつたといふ事を知らせた。そこでおれはすぐに船に乗つて大阪へ行つたが、丁度この時、毛利家の嫡子長門守が上京の爲め、十三日に國元を立つて今夜か明日か兵庫へ着くといふことであつたから、兼ねておれの家へ隠れて居た長州の

竹田庸二郎と、外に今一人を神戸へ残して置いて若し長門守が着かれたら昨夜の事は、ただ無謀の徒が、一時の快を取る爲めに起こしたので、決して深い考へなどあるのではない、長州侯の御意見は固より彼等と共に事を爲さるといふのではあるまいと、勝が申したと傳へてくれよと頼んで置いた。さて、廿一日には大阪城で議論が沸騰して少しも決しない。そこで、おれが發議して、斥侯を放つて京都の形勢を覗はせなければ、みんな恐れて少しも深入りをしないから、容子は一切分らない。仕方がないから今度は、おれが自から斥侯になつて、櫻ノ宮からずつと淀川に傍うて進んで行くと、上の方から一艘の船が三人の壯士を乗せて下つて来て、おれの立つて居る前まで來ると、三人とも船を捨て、上陸した。おれはどうせうかと少し狼狽したけれど、兎も角も彼等の爲す所を見やうと思つて、ぢつと立つて居たら、その内の二人は、突然刺し違へて死ぬるし、今一人を喉を貫いて死んでしまつた。おれも一時は驚いたが、少し経つと動悸も靜まつて、は、あ、これでは長州は既に敗れたのだなと悟つた。これで一まづ安心だと思つて、三軒家まで歸つた所が、川の中に一人が船に乗つて居るのを、



對ひ岸から官軍の守兵がどん／＼鐵砲を放して居て、その丸がおれの頭の上を雨の如くに過ぎて通つて、一つはおれの笠を貫いたけれど幸に怪我もしなかつた。城へ歸つてから更に人を派出して、先に自殺した三人の姓名を調べさせたけれども、どうも分らなかつた。さて、その夜長州の敗兵が五十人ばかり大阪へ遁げて来て、藩の藏屋敷へ隠れたので、また城内では評議があつて、諸藩の武士に命じて焼討にさせるといふことであつたのを、これが爲めに大阪の町が灰になつてはならないと思つて、おれが確く反對したので、とう／＼屋敷を明け渡させるだけで済んだ。その時の長州のお留守役は、北條清右衛門といつたが、町奉行から呼び出されて、禮服を着て家來一人召し連れて出頭した、その禮儀作法が正しかつたには、後で皆々感心して居たよ、大阪はまあこれで一まつ鎮まつたのだが、どうもその頃の物騒な事といつたら、一寸途中で遇つても壯士がすぐに劍の柄に手をかけるといふ風で斬りあひなどは、日に幾度こなくなつた。その中には、おれも随分危い目に遭つたが、とう／＼殺されもせずに済んだのだ。

さて殺されなかつたのはよいけれどその年の十月廿二日になると、情ない事には大阪城代から、御用につき早々江戸へ歸れと命ぜられ、十一月九日になつてはとう／＼退職を仰付けられて家へ閉ぢ籠つた。この間には實にこみ入つた事情があるのだが、兎に角おれは及ばずながら國家の安危を一身に引き受けて、三年の間、種々の危険を冒して奔走したのに、一朝説は聽かれず謀は用ひられず、この通りに退職を命ぜられるとは、まことに情ない事だが、もう斯うなつては仕方がない、悠々自適、身を榮辱の外に置くばかりだ。併し、このまゝ朽ちては、累世の君恩に報いることも出来なだけでは、如何にも残念だなど考へて居た所へ、大久保一翁から書面が来て、讒人が居る爲めに裁判官中で君の評判は至つてわるいから、近日封書の御尋ねが出る筈だけれど、餘り過激なことを返答せぬがよからうと、密かに注意してくれた、この封書の御尋ねといふのは、當時幕府で若し役人に落度があると認めたら、一番に封書で以てその始末をお尋ねになりその次に親類同道で評定所に出頭してお尋ねを受け、三番目にまた嚴重なお尋ねがあつて、その時に切腹とか、終身預けとか、それ／＼罰が定



まるのだから、随分裁判の方では重い事なのだ。それで大久保が親切にこんな事を知らせてくれたから、おれも密かに喜んで、何分の御沙汰のあるのを待つて居た。然るに、生憎、いやおれの方からいへば幸ひに、その頃は長州再征の事もあり、將軍上洛の事もあり、實に國家多難の際であつたから、幕府の方でもおれの事などに構つて居る餘裕がないので、つい延引になつて、おれへは一寸も御沙汰がなかつた、おれの一身の爲めには、飛んだ僥倖とはいひながら、かういふ事情からして幕府もとう／＼減びる様になつたのは嘆かはしい事だ。

彼是するうちに慶應二年になつて、其年の五月二十七日に突然奉書が來た、何かと思ひながら披いて見たら、閣老水野和泉守から、明朝禮服で登城せよといふ達しだ。これは通例退職のものを再び用ふる時の式ではなくて、實に被格のことであつた。それでお達しの通り翌日登城した所が、軍艦奉行に任ぜられて直ぐに大阪へ出張を命ぜられた。おれも少し腑に落ちない所があつたから、どんな御用向があるかと老中に問うて見たけれど、此度の事は將軍から直接の御命令だから、われわれには分らないと

いふから、兎も角も兩三日經つておれは大阪へ出發した、大阪へ着いて板倉伊賀守に會つた所が、伊賀守のいふには、長州再征の事について、薩州から大久保市藏とか岩下佐次右衛門とか、内田仲之助とかいふ連中が來て、ひどく反對するから、お前京都へ行って彼等を説き伏せて來いとこの事だ、そこで、おれは豫ねて意見を陳べて、長州征伐は決して國家の爲めに利ではない、大久保や岩下等のいふ所が、却つて道理にかなつて居るといふとを明瞭に辯じた。所が會津藩だけは、容易におれの説に従はなかつたけれど、いろ／＼諭へなど設けて説明して遣つたら、後にはとう／＼おれの意見が耳にはいつた。それで終に長州とは和睦する様になつたのだ。

この後もおれは時勢に應じていろ／＼建白したけれど、多くは役人の幾嫌を損ずるばかりで、讒言をする奴は居るし、後にも先にも據がなくなつたから、むしろ辭職せうと思つたけれど、それも許されなかつた、この頃は、おれも實に苦心したよ。

慶應二年といへば随分物騒の年だが、この時、幕府の兵隊は、凡そ八千人もあつて、それが機會さへあれば、何處かへ脱走して事を擧げやうとするので、おれもその説諭



にはなかく骨が折れたよ。何でも二月であつたが、三番町に兵隊が二大隊、凡そ千人ばかりあるのを、一大隊はどうかかうか説諭して鎮まらせたけれど、今一大隊の方はまだその暇がない内に、二百人ばかりは、五日に脱走するし、残り三百人ばかりは、七日の夜忽ち塀を越して大路へ出て、無暗に鐵砲を放つて亂暴をするので、士官も手の付け様がないのに困つて居た。そこで、おれは先に説諭した一大隊をも土手際へ整列させて、もうかうなつては致し方がないから、貴様たちの中にもおれの説諭が分らないものがあるなら、この際勝手に逃げろと命令した。その間に彼の塀を越えた三百人はどんく九段坂を下りて逃げるものだから、こちらの奴もどつとして居られないと見えて、五十人ばかり暗に乗じて後ろの方からおれに向つて發砲した。すると、彼の脱走兵の中にも踏み止つて、おれの提燈を目がけて一緒に射撃するので、おれの前立つて居た從卒二人は、忽ち胸を貫かれて仆れた。この二人は、何づれも勇氣のある男だから、始終おれの側に置いたものだ。それで從卒は倒れる、提燈は消える、四邊は眞暗になつたものだから、おれは幸に少とも怪我はしなかつたが、兵隊は悉く遁

げてしまつた。今の土手際へ整列して居た一千人も勢ひ止まる譯にはいかないから、これも千住の方へ遁げてしまつた。この時の騒ぎに死んだものは兵卒が僅かに四人で傷を負つたものは六七人に過ぎなかつた。

その二日前(五日)の夜には、小川町傳習隊の兵卒が二大隊、これも亂暴をしながら逃げたのだが逃げ路の高田馬場へ整列して居ると聞いたものだから、おれは直ぐに一人で馬に騎つて追つかけて行つた。所が大勢の者は、既に何處かへ行つてしまつて、暗闇の中へ七八人止まつて追手をでも防ぐ用意をして居るらしい。おれが近づくと、いきなり提燈を目がけて發砲しかけたけれど、この時、雨は降り出すし、またおれの方々が僅か一人だから、追手のものではあるまいと思つたと見えて、この連中も板橋の方へ走つて行つた。おれは後からそれを追うて行つて、板橋へ着いた時には既に夜も明けた。こゝには未だ随分兵卒が留まつて居たから、おれは色々説諭して、漸く三十六人だけ連れて歸つた。

また、この月の十五日には、赤坂屯所の兵隊が甲州に逃げかけたのを、八王子で追つ



いて、新宿の宿屋まで率ゐて歸つて、そこで説諭を加へて居る間に、脱走の張本たる伍長の某は、とても志を達せられぬと覺悟をしたと見えて、突然反對派の伍長某を刺して、直ぐその場で自殺してしまつた。これが爲めに、おれは殺されもしないで済んだのだ。

全體この頃の人氣は、老人でも子供でも、たゞ戦争とか、自殺とかいふことを、無暗によい事に思つて、壯士に酒を飲ませたり、飯を食はせたりなどして勵ますものだから、脱走などいふとも所謂騎虎の勢ひで、容易に止めることが出来なかつたのだ。西南戦争だつてこれと同じ理窟であるから、おれは西郷の意裏はよく察して居るよ。

慶應四年四月の末に、最早日の暮ではあるし、官軍はこの時既に江戸城へはひつて居つた頃だから、人通りも餘りない時に、おれが半藏門外を馬に乗つて靜かに行き過ぎて居つた所が、忽ち後ろから官兵三四人が小銃を以ておれを狙撃した。併し、幸ひに體には中らないで、頭の上を通り過ぎたけれど、その響きに馬が驚いて、後足で立ち上つたものだから、おれはたまらず、仰向様に落馬して、路上の石に後腦を強く打

たれたので、一時氣絶した。けれども暫くすると、自然に生き返へつて、あたりを見廻はしたら、誰も人は居らず、馬は平氣で路ばたの草を食つて居た。官兵はおれが落馬してそれなり氣絶したのを見て、銃丸が中つたものと心得て立ち去つたのであらう。いや、あの時は實に危いことであつたよ。

その五月には、丁度彰義隊の戦争の日だつたが、官軍二百人ばかりで、おれの家を取り圍んで、武器などは一切奪ひ去つてしまつた。併し、この時、おれが幸に他行して居た爲めに、殺されることだけはまづ免れた。こんな風に九死の中から一生を得た事は、これまで随分たび／＼あつたよ。思へばあれも僥倖者さ。

話が少し後戻りするやうだが、おれが長州へ談判に行つた時の始末を書いた『奉使始末』といふものがあつた。然し今は何處へか紛失してしまつて、その時の事も大抵は忘れてしまつたが、何でもあの頃は丁度おれも内外面白くないことばかりで、大坂に居て密かに決心する所があつた。すると突然京都から早打ちが遣つて来て、すぐおれに來いこの事だ。おれも思々しかつたから、病氣だといつて行くまいと思つて、あ



る老中にも談した所が、その人は正直な男だから、お前が今日そんな事をいひ出しては、國家がどうなるかも知れないなどと心配するので、おれもいや／＼ながら、その夜道ぐに早駕籠で以て京都へ上つた。

この頃慶喜公は後見職であつたから、おれが京都へ着いた時は丁度参内中で、原市之進が出て来て、やれ實に御苦勞だの、今度の御用は我々には何だか知れないが、何でも貴下でなくては辯じられないといふ事で、わざ／＼お召しになつたのだが、何分貴下の爲には御名譽だなどと、平生にも似ない挨拶をするので、おれもそこは人がわるいから、此奴おれに油を掛けやがると思つてよい加減な返答をして居る内に、慶喜公も御歸館になつて、御直で長州への使者を仰せ付けられたのだ。それも初めは思ふ仔細があつて、おれも固く御辭退申したが、是非にとの事だから、それではとて斷然御受けを致したのだ。

それでかく／＼の次第で長州と談判致す積りであるといふことを、慶喜公へ言上するに、公は何分頼むとの事だから、おれも、宜しうございます、一ヶ月中には必ず始末

を附けて歸ります。若しさもなくば私の首はなくなつた事と思召されよと申上げて出發した。

おれは少し考へがあつて、一人の供をも召連れず、小倉袴に木綿羽織で單身藝州まで行つた。こゝには辻嬭曹が居つて萬事親切に世話をしてくれ、長州との往復もいろいろ周旋してくれて、到頭宮島に於て双方會談するこゝになつた。それでおれは例の通り獨りで宮島へ行かうとすると、辻は、如何に何んでも一人では餘りだといつて、わざ／＼二人の役人を附てくれ、また舟まで周旋して向ふへ渡してくれた。宮島へ渡つて見ると、長州の兵隊が此處其處に出沒して殺氣が充ちて居たが、固よりこんな事だらうと覺悟して居たから、平氣で旅館に宿り込んで、長州の使者の來るのを待つて居た。彼等も國論を纏めた上で船に乗つて來るといふのだから、隨分手間が入つたが、その間今の長州の兵隊や探偵は、始終おれの旅館の周圍を徘徊してまたには遠方から旅館へ向つて發砲するものなどもあつた。

併しおれはちつともこんな事を頓着しないで、旅館の廣間に平然と坐り込んで、日夜



使者の來るのを待つて居つたが、この頃このあたりの婦人などは皆何處へか逃げて行つてしまつて、おれの旅館にも老婦が唯一人残つて居つたばかりなので、これに頼んで襦袢を澤山拵へさせて代るく着替へ、また毎日髪を結ひなほさせた、すると婆さんがその譯を尋ねるから、おれの首は何時斬られるかも知れないによつて死耻をかゝない爲めにかうするのだといつたら、婆さんは譯を知らないものだから只怖がつてばかり居つた。

彼是する内に長州から廣澤兵助等八人のものが使者として遣つて來た。井上多聞（今の井上馨侯）その頃は春木強太郎といつて居たが、それから長松幹などもこの中に加はつて居た。長州の方からはこの通り大勢で堂々とやつて來たのに、此方では木綿羽織に小倉袴の小男の軍艦奉行が、たつた一人控へて居るばかりだ。

いよく今日會合といふ日になると、おれはまづ大慈院、これが會合の場所だが、この寺の大廣間に端坐して居ると、後から廣澤などが遣つて來た。併し流石は廣澤だけあつて、少しも傲慢の風がなく、一同椽側に坐つて恭しく一禮した。

そこでおれは、いや其處ではお談が出来ませんから何卒こちらへお通りなさいと挨拶すると、廣澤、頭を擡げて、御同席は如何にも恐れ入ると辭退するので、おれは全體慄輕者だから、かように隔つて居てはお談が出来ぬ、貴下がお否とあれば拙者が其處へ参りませうと言つて、いきなり向ふが坐つて居る間へ割り込んで行つた所が、一同大笑ひとなつて、それでは御免を蒙りますと云ふことで、一同廣間にはいつていよいよ談判を始めることになつた。

談判といつても、譯もなく咄嗟の間に濟んだのだ。まづおれは能くこちらの赤心を披いて、自分の始めからの意見はかくくであつた。貴藩においても、今日の場合、兄弟喧嘩をして居るべきでないといふことは御承知であらう、といふ旨趣を述べた。するに、廣澤もよく合點して、尊慮のある所はかねてより承知して居ましたなぞいつた。そこでおれは斷然、私が歸京したら直ちに貴藩の國境にある幕兵は一人も残らず引上げる様にすから、貴藩に於ても、その機に乗じて、請願などと稱へて大勢で押し上げることなどは決してない様にせられよと云ひ放つたら、廣澤も承諾の旨を答へて、談



判もこれで結着した。

談判が済んで別れる時に、春木即ち井上が、後刻御旅館に罷出でも御差支へはないかといふから、ちつとも差支はござらぬから、どうぞ御出下されといつて置いて旅館へ歸つたら、すぐに春木は遣つて来て、いろ／＼な話をした。この頃春木は歸朝早暗殺に遭ひかゝつて間もないので顔にはまだ創膏藥を貼つて居た。

おれは廣澤が歸國するのを見届けて、すぐに歸京の途に上る用意をしたが、この度の使命もまづ／＼首尾よく果して一安心したから、記念の爲にもと、差して居つた短刀を嚴島神社へ奉納した。これは護良親王の御品であつたといひ傳へるのだが、おれの體も今後どうなるか分らないから、かた／＼寶物を安全に保存する策だと思つて奉納したのだ。併しこの時は神官もおれを何處の馬の骨だかと思つたと見えて、容易には納めてくれなかつたが、十兩の金子を添へて漸く納めて貰つた。所が今日ではなかく／＼大切に居るとかいふ事だ。

さて歸りにはまた辻の周旋で、撰り抜き船頭を備つて出帆したが、高砂の沖で向ふ

から來る船と衝突して殆んど沈没せうとしたのを、やつとの事で明石の濱邊へ乗り上げて、そこから陸を通つて京都へ歸つたが、出發した日から丁度二十八日か九日目であつた。

歸つて見ると、留守の中に一體の様子はがら／＼一變して居つて、わざ／＼宮島まで談判に行つたおれの苦心も、何の役にも立たなかつた。併し若しこの時の始末がおれの口から世間へ漏れ様ものなら、それこそ幕府の威信は全くなくなつてしまふと思つて、おれは謹んで秘密を守つて辭職を願ひ出た。するとある老中が中へはいつて周旋してくれた爲に、軍艦練專務の役で以て、とう／＼江戸へ歸ることになつた。併しこれが爲に幕府の命脈も丁度一年延びた勘定だ。

こんな風で、表面は長州の人を賣つた姿になつただけけれど、幾ら怨まれても仕方がない。後から彼は云ひ譯などをするのはおれの流儀でないからサ。

何に、善後策はどうする積りであつたかと、それは譯もない事だ。おれが京都へ歸ると直に、長州へ向けて、「其藩事今般朝廷に向つて不穩の舉動甚不届に付閑門十日申



「付ける」この一通の書付けで事は足るのサ。おれの流儀は何時いつもこんな手輕てがるなものだ。それから双方さうほう覺書おぼえがきでも取り交かはしたかと。なに、そんなものはありはしない、併しかしこれはおれが一生しゅうじゆの失策しつさくで、これが爲ためにおれは幕府ばくふから嫌疑けんぎを受けたのだ。けれども西郷さとうと品川しんがはで談判だんぱんした時にはおれの流儀りうぎは甘まく成功せいこうしたよ。其そのの始末しまつは追々おひくじゆん順たを立て、話はなことゝしやう。

戊辰ぼしんの變へんは、おれは町奉行まちぶぎやうの知しらせによつて、幕閣ばくかくよりも一日いちにち早く承知しやうちしたけれど、おれは當時たうじ閑居かんきよの身みだつたから、意見いけんを進すすめる機會きかいを得えなかつた。翌日よくじつになつて、いよく幕閣ばくかくに知しれ渡わたると城中じやうちゆうは鼎なべを沸わかすやうだつた。それは祭まつりにさへ騒さわぐ江戸えどッ兒えの事ことだから、江戸えどの騒さわぎも大抵たいてい察さつせらるゝだらう。この時幕議じゆまくぎでは、事ことの起おこりが少々せうしやうの行違ゆきちがひだから、大たいした事ことにもなるまいとの説せつだつたけれども、おれは獨ひとりりで、西郷さいかうめがこの機きに乗のりじて、天兵てんべいを差さし向むけはしないかと心配しんぱいして居ゐた處ところが、果はたしてやつて來たワイ。西郷さいかうは實じつに多おほらい奴やつだ。

當時たうじ人心じんしん恟々しやうしやうとして、おれは常つねに一身しんを死生しせい一髮いつぱつといふ際きはに置おいて居ゐた。おれの眞しん意いが官軍くわんぐんにわからなくつて、官兵くわんべいがおれの家うちを取り圍かこんだとも有あつた。また、幕臣ばくしん中ちゆうでも慄悍りうかんなもの、動うごもすると、おれを徳川とくがは氏しを賣うるものを見做みなして、おれを殺ころさうとしたものも一人ひとりや二人ふたりではなかつた。おれが品川しんがはの先鋒せんぽう總督府そうとくふと談判だんぱんして歸かへりがけにも、薄暮はくぼ、赤羽根橋あかばねはしを通とほつて居ゐたら、鐵砲丸てつぱうだまがおれの鬚ひげを掠かすめていつたから、おれは馬うまを下くだり、轡つむをとりにて、徐しゆうかにそこを過すぎ、四辻よつじから再び馬うまに乗のりつて歸かへつたツケ。おれの家うちには、護衛ごゑいも壯士さうしも居ゐなかつた。護衛ごゑいや壯士さうしば、實じつに恃たむに足たらず、また恃たむ可べきものではないよ。壯士さうしの代かりに二三人にさんの女中おんなぢゆうを置おいて、來客らいきやくの應接おうせつ、その他たの用ようを辨べんじて居ゐたが、これは、どんな亂暴者らんぼうものでも、婦人ふじんには手てを出だすまいと思おもつたからサ。今いまもその例れいに依よつて、おれの家うちにはこの通りとほ(傍かたはらに侍さむらいする婢ひを顧かへり)女おんなばかりを使つかつて居ゐるよ。アハ、ハ、ハ、

この時分じぶんは、八釜やつかましやが隨分ずぶん諸國しよこくから遣やつて來たよ。併しかし勝かつに行いても駄目だめだとおもつたか知らぬがおれの處ところへは誰たれも來こずに、大久保おほくぼ一翁いっそうや、山岡鐵舟やまおかてつしゆうの處ところへ皆みなな押し掛かけて行いて、幕府ばくふの意氣地いきぢがないことを劇まじしく論ろんじた様子やうすサ。大久保おほくぼも山岡やまおかも頗すなはる閉口へいこう



した様だつたから、そんな奴に取り合ふな、打ちやつて置け、といつてやつたら、後で何だかぶつぐいつたさうだ。

自分の手柄を陳べる様で可笑しいが、おれが政權を奉還して、江戸城を引拂ふように主張したのは、所謂國家主義から割り出したものサ。三百年來の根柢があるからといつた所が、時勢が許さなかつたら何うなるものか、且つ又都府といふものは、天下の共有物であつて、決して一個人の私有物ではない江戸城引拂ひの事については、おれにこの論據があるものだから、誰が何と云つたつて少しも構はなかつたのサ。各藩の佐幕論者も、始めは一向時勢も何も考へずに、無暗に騒ぎまはつたが、後には追々おれの精神を呑み込んで、おれに同意を表するものも出來、また江戸城引渡しに骨を析るものをも現はれて來たよ。併し此佐幕論者とても、その精神は實に犯すべからざる武士道から出たのであるから、申し分もない立派のものサ、何でも時勢を洞察して、機先を制することも必要だが、それよりも、人は精神が第一だよ。

江戸城受渡しの時、官軍の方からは、豫想通り西郷が來るといふものだから、おれ

は安心して寝て居たよ。さうするに皆の者は、この國事多難の際に、勝の氣樂には困るといつて、呟いて居た様子だつたが、なに對手が西郷だから、無茶な事をする氣遣ひはないと思つて、談判の時にも、おれは慾は云はなかつた。ただ幕臣が餓ゑるものも氣の毒だから、それだけは、頼むぜといつたばかりだつた。それに西郷は、七十萬石呉れると向ふから云つたよ。

先年李鴻章が來る時にも、おれは前からいつたよ。あれなら、談はどうにも出來る人物だから、こちらからは、餘り進んで慾をいはないがよい。出す時には、見切がはやく附く男だから、其の積りで談判しろと政府の人にも忠告して置いたよ。それを、なに老爺がまだ古風な考を持ち出す、外交の掛引はそんな人好沙汰では行けないといはぬばかりで聞いて居たが、果して李に一層上を越されたツケ。幾ら支那人との談判だからといつたつて、對手の人物を見てやらないと、すべてこの通りさ。

維新の頃には、妻子までもおれに不平だつたヨ。廣い天下におれに賛成するものは一人もなかつたけれども(山岡や一翁には、後から少し分つた様であつたが)おれは常



に世の中には道といふものがあると思つて、楽しんで居た。また一事を断行して居る中途で、おれが死んだら、たれかおれに代るものがあるかといふとも、随分心配ではあつたけれど、そんな事は一切構はず、おれはたゞ行ふべきことを行はうと大決心をして、自分で自分を殺すやうな事さへなければ、それでよいと確信して居たのサ。

おれなどは、生來人がわるいから、ちやんこ世間の相場を踏んで居るよ。上つた相場も、何時か下る時があるし、下つた相場も、何時かは上る時があるものサ。その上り下りの時間も、長くて十年はかからないよ。それだから、自分の相場が下落したと見たら、ちつと屈んで居れば、暫くすると、また上つて来るものだ。大奸物大逆人の勝麟太郎も、今では伯爵勝安房様だからノー。併し、今はこの通り威張つて居ても、又、暫くすると朦朧してしまつて、唾の一つもはきかけて呉れる人もないやうになるだらうよ。世間の相場は、まあこんなものサ。その上り下り十年間の辛棒が出来る人は、即ち大豪傑だ。おれなども現にその一人だよ。

おれはするい奴だらう。横着だらう。併しさう急いでも仕方がないから、樂ころん

二

で待つが第一サ。西洋人などの辛棒強くて氣長いには感心するよ。

全體大きな人物といふものは、そんなに早く現はれるものではないよ。通例は百年の後だ。今一層大きな人物になると、二百年か三百年の後だ。それも現れるといつた所で、今の様に自叙傳の力や、何かによつて現はれるのではない。二三百年も経つと、ちやうどその位大きい人物が再び出るのちや。其奴が後先の事を考へて見て居る内に、二三百年も前に、丁度自分の意見と同じ意見を持つて居た人を見出すのちや。そこで其奴が驚いて、成る程ゑらい人間が居たな。二三百年も前に、今、自分が抱いて居る意見と、同じ意見を抱いて居たな、これは感心な人物だと、騒ぎ出す様になつて、それで世に知れて来るのだよ。知己を千載の下に待つと云ふのは、此の事サ。今の人間はどうだ、そんな奴は、一人も居るまいが。今の事は今知れて、今の人に賞められなくて、承知しないといふ尻の孔の小さい奴ばかりだらう。大勳位とか、何爵三かい



ふ肩書を貰つて、俗物からわい／＼騒ぎ立られるのを以て、自分には日本一の英雄豪傑だと思つて居るではないか。君等はマアよく考へて見たまへ、維新以後、未だ三十年を経たばかりではないか、僅か三十年の間に、人物が現はれうといつても、現はれやうがないサ。今日自分から騒ぎ出して、それが爲め、幾分か俗物共に知られて居る奴等は、さうサ、今から三十年も経たない内に、すぐ忘れてしまふだらうよ。おれはちかい内に死ぬるけれども、君等はまだ若いから、三十年や五十年は、生きて居るだらうが、おれのいつた事が、嘘になるか、眞になるか、試して見るとよい。維新の時でもそうだったよ。水戸の烈公は、えらいよいふので、非常の評判だったよ。實にその頃は、公の片言隻語も、取つて以て即とする位の勢ひサ。然るに、今どうだ、日本國中、烈公を知つて居るものが、何人あるか。成る程、水戸の近邊へ行つたら、匹夫匹婦も皆その名を記憶して居るだらうが、その外の土地では、誰も知らないよ。その通りだ。天下の安危に關する仕事を遣つた人でなくては、そんなに後世に知らるるものではない、一寸芝居を遣つた位では、天下に名は擧らないサ。

おれは、今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小桶と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやつた位だが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、又ばぬと思つた事が屢々あつたよ。おれは窃に思つたのサ。横井は、自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思つたのサ。その後、西郷と面會したら、その意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だったけれど、所謂天下の大事を負擔するものは、果して西郷ではあるまいかと、また窃に恐れたよ。

そこで、おれは幕府の閣老に向つて、天下にこの二人があるから、その行末に注意なされと進言して置いた所ろが、その後、閣老はおれに、その方の眼鏡も大分間違つた、横井は何かの申分で塾居を申付けられ、また西郷は、漸く御用人の職であつた。家老などいふ重き身分でないから、於ても何事も出来まいといつた。けれどもおれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、最早それ迄だと心配して居たに、果して西郷



は出て来たワイ。

おれが初めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられる爲めに、おれが召されて京都に入る途中に、大坂の旅宿であつた。その時、西郷は御留守居格だつたが、轡の紋の附いた黒縮緬の羽織を着て、中々立派な風采だつたよ。

西郷は、兵庫開港延期のことを、餘程重大の問題だと思つて、随分心配して居た様だつたが、頻りにおれにその所置法を聞かせよといふワイ。そこで、おれがいふには、まだ確には知れぬが、この度の御召しは、多分談判委員を仰付けられる爲めだらう。併し小生は、別段この談判を難件とは思はない。小生がもし談判委員となつたら、まづ外國の全權に、君等は、山城なる、天皇を知つて居るかと思ねる、するに彼等は、必ず知つて居ると答へるだらう、そこで、然らば、その、天皇の叡慮を安んじ奉る爲めに、暫く延期してくれと頼むサ。そして一方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後その他の大名を集め、その意見を採つて、陛下に奏聞し、更に國論を決するばかりサ。と、斯ういつた。それから彼れの問ふに任せて、おれは幕府今日の事情を一切談じて

聞かせた。彼がいふには、兎角幕府は薩摩を悪んで、漫りに猜疑の眼を以て、禍心を包藏するやうに思ふには困るといふから、おれは、それは幕府のつまらない小役人どもの事だ、幕府にも人物があらふから、そんな事は打ちやつて措きたまへ。かやうの事に掛念したり、憤激したりするのは、貴藩の爲めに決してよくないといつたら、彼も承知したいといつたツケ。

坂本龍馬が、曾ておれに、先生屢々西郷の人物を賞せられるから、拙者も行て會つて来るにより添書をくれといつたから、早速書いてやつたが、その後、坂本が薩摩からかへつて来て云ふには成程西郷といふ奴は、わからぬ奴だ、少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も中々鑑識のある奴だよ、西郷に及ぶその出来ないのは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で、江戸城に乗込む。おれだつて事に處して、多少の權謀を用ひないともないが、たゞこの西郷の至誠は、おれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して、小籌淺略を事とするのは却てこの



人の爲めに、臆を見すかされるばかりだ思つて、おれも至誠を以て之に應じたから、江戸城受渡しも、あの通り立談の間に済んだのサ。

西郷は、今云ふ通り實に漠然たる男だつたが、大久保は、之に反して實に毅然として居たよ。官軍が江戸城にいはつてから、市中の取締りが甚だ面倒になつて来た。これは幕府に倒れたが、新政が未だ布かれないから、恰度無政府の姿になつたのサ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局をおれの肩に役掛けておいて、行つてしまつた。どうか宜しく頼み申します、後の處置は、勝さんが何とかなさるだらうといつて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる『だらう』にはおれも閉口して、實に閉口したよ。これが若し大久保なら、これはかく、あれはかく、こそそれ／＼談判して置くだらうに、さりとは餘り漠然ではないか。併し考へて見ると、西郷と大久保との優劣は、ここにあるのだよ、西郷の天分が極めて高い所以は、實にこゝにあるのだよ。

西郷は、どうも人にわからない所があつたよ。大きな人間ほどそんなもので……小さい奴なら、何んなにしたつて直ぐ腹の底まで見えてしまつたが、大きい奴になるとさうでないノ。例の豚姫の話があるだらう。豚姫といふのは京都の祇園で名高い……尤も始めから名高かつたではない、西郷と關係が出来てから名高くなつたのだが……豚の如く肥えて居たから、豚姫と稱せられた茶屋の仲居だ。この仲居が、酷く西郷にほれて、西郷も亦この仲居を愛して居たのよ。併し今の奴等が、茶屋女と、くつ付くとは譯が違つて居るよ。どうもいふにはれぬ善い所があつたのだ。これは固より一の私事に過ぎないけれど、大體が先づこんな風に常人と違つて、餘程大きく出来て居たのサ。

西郷の大量洪量に就て、維新當時の模様を、多少し細かにいふと、官軍が品川まで押し寄せて来て、今にも江戸城へ攻め入らうといふ際に、西郷は、おれが出した僅か一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷まで、のそ／＼談判に遣つてくるとは、なか／＼今の人では出来ない事だ。あの時の談判は、實に骨だつたヨ。官軍に西郷が居なければ、談はとても纏まらな



つただらうよ。その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが来る、板橋からは伊知地などが来る。また江戸の市中では、今にも官軍が乗込むといつて大騒ぎサ。併しおれは外の官軍には頓着せず、ただ西郷一人を眼においた。そこで、今談した通り、極短い手紙を一通遣つて、双方何處にか出會ひたる上、談判致したいとの旨を申送り、また、其の場所は、即ち田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から撰定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をおこして、いよいよ何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになつた。當日おれは、羽織袴で馬に騎つて、従者を一人つれたばかりで、薩摩屋敷に出掛けたまづ一室へ案内せられて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、これは實に遅刻しまして失禮、と挨拶しながら庭敷に通つた。其の様子は、少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。さて、愈々談判になると、西郷は、おれのいふ事を一々信用してくれ、其間一點の疑

念も挟まなかつた。『色々六かしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします。』西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つとが出来、また徳川氏もその滅亡を免れたのだ。若し之が他人であつたら、いや貴様のいふ事は、自家撞着だとか、言行不一致だとか、澤山の兇徒があつた通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何所にあるかとか、いろ／＼喧しく責め立てるに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達観して、而かも果斷に富んで居たには、おれも感心した。この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などいふ豪傑連中が、大勢で次の間へ来て、窺かに様子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし／＼と詰めて居る、其の有様は實に殺氣陰々として、物凄い程だつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないものやうに、談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つて、おれが門を出ると近傍の街々に屯集して居た兵隊は、どつと一時に押し寄せて来たが、おれが西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく棒銃の敬礼



を行つた。おれは自分の胸を指して兵隊に向ひ、何れ今明日中には何とか決着致すべし、決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬるともあらうから、よくよくこの胸を見覚えておかれよと、云ひ捨て、西郷に暇乞ひをして歸つた。

此時、おれが殊に感心したのは、西郷がおれに對して、幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終坐を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光で以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつた事だ。その膽量の大きいことは、所謂天空海淵で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。あの人見寧といふ男が若い時分に、おれの處へやつて来て、『西郷に會たいから紹介狀を書いてくれ。』といつたことがあつた。所が段々様子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。そこでおれは、人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、中には『この男は足下を刺す筈だが、兎も角も會つて遣つて呉れ。』と認めておいた。それから人見は、ぢきに隣州へ下つて、まづ桐野へ面會した。桐野も流石に眼がある。人見を見ると、その舉動が如何にも尋常でないから、私かに彼の西郷への紹介狀を開封して見たら果し

て今の始末だ。流石に不敵の桐野も、これには少しく驚いて、直ぐ様委細を西郷へ通知してやつた。所が西郷は一向平氣なもので、『勝からの紹介なら會つて見やう。』といふとだ、そこで人見は、翌日西郷の屋敷を尋ねて行つて、『人見寧がお談を承りにまゐりました』といふと、西郷はちやうど玄關へ横臥して居たが、その聲を聞くと悠々と起き直つて、『私が吉之助だが、私は天下の大勢など、いふ様な六ヶしいことは知らぬから十六文で芋を買つて喰つたが、多寡が十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形勢などいふものが、分る筈がないではないか』といつて大口を開けて笑つた。所が血氣の人見も、この出し抜けの談に氣を吞まれて、殺すどころの段ではなく、挨拶もろくく得せずに歸つて来て、『西郷さんは、實に豪傑だ』と感服して話したことがあつた。知識の點においては、外國の事情などは、却つておれが話して聞かせた位だが、その氣膽の大きいことは、この通りに實に絶倫で、議論も何もあつたものではなかつたよ。



今の世に西郷が生きて居たら、談し相手もあるに、

南洲の後家と話すや夢のあと

横井小桶の事は、尾張の或る人から聞いて居たが、長崎で始めて會つた時から、途方もない聰明な人だと、心中大に敬服して、屢々人を以て其の説を聞かしたが、その答へには、常に『今日はかう思ふけれども、明日になったら違ふかも知れない』と申添へてあつた。そこでおれは、いよいよ彼の人物に感心したよ。

大抵の人は小桶を取り留めの無い事を云ふ人だと思つたよ。維新の初め、大久保すら、小桶を招いたけれど思ひの外だ、といつて居た。併し小桶はとても尋常の物尺では分らない人物で、且つ一向物に凝滞せぬ人であつた。それ故に一個の定見と云ふものはなかつたけれど、機に臨み變に應じて物事を處置するだけの餘裕があつた、かうして何にでも失敗した者が來て、善後策を尋ねると、其の失敗を利用して、之を都合のよい方に遷らせるのが常であつた。

おれが米國から歸つた時に、彼れが米國の事情を聞くから、色々教へてやつたら、一

を聞いて十を知るといふ風で、忽ち彼の國の事情に情通してしまつたよ。

小桶は能辯で南洲は訥辯だつた。

小桶が春嶽公に用ひられた時、もちつと手腕を振ふとは出来なかつたかと云ふ人もあるが、あの時は、實際出来なかつたのだよ。又、緑新の時に、西郷は、何故小桶に説き勧めなかつたかといふ人もあるが、之れは必要がなかつたからサ。

小桶は、毎日藝者や幫間を相手に遊興して、人に面會するのも、一日に一人二人會ふと、もはや疲勞したと云つて斷るなど、平生我儘一邊に暮して居た。だから春嶽公に用ゐられても、また内閣へ出ても、一々政治を議するなどは、うるさかつたらうよ。かういふ風だから、小桶の善い弟子といつたら、安場保和一人位のものだらう。つまり小桶は、覺られ難い人物サ。

佐久間象山は、物識りだつたよ。學問も博し、見識も多少持つて居たよ。併し、どうも法螺吹きで困るよ。あんな男を實際の局に當らしたらどうだらうか……。何とも保證は出来ないノ一。



横井と佐久間との人物は何うだと云ふのかね……、どうのかうのといつた所が、それは大變な違ひさ、全體横井といふ男は、一寸見た所では、何の變つた節も無く、其の服装なども、黒縮緬の袷羽織に、平袴をはいて、まだ大名のお留守居役とでもいふやうな風で、人柄も至極老成圓熟して居て、人と議論などするやうな野暴は決してやらなかつたが、佐久間の方は丸で反對で、顔附きからして既に一種奇妙なのに、平生緞子の羽織に古代模様の袴をはいて、如何にもおれは天下の師だと云ふやうに、嚴然と構へこんで、元來霸氣の強い男だから、漢學者が來ると洋學を以て威しつけ、洋學者が來ると漢學を以て威しつけ、一寸書生が尋ねて來ても、直きに叱り飛ばすといふ風でどふも始末にいけなかつたよ。

藤田東湖は、おれは大嫌ひだ。あれは學問もあるし、議論も強く、また劍術も達者で、一廉役に立ちさうな男だつたが、本當に國を思ふといふ赤心が無い、若しも東湖に赤心があつたら、あの頃水戸は、天下の御三家だ、直接に幕府へ意見を申出づればよい筈でないか。それに何ぞや。彼れ東湖は、書生を大勢集めて騒ぎまはるとは、實

に怪しからぬ男だ。おれはあんな流儀は大嫌ひだおれなぞは、一つの方法でいけないと思つたら、更に他の方法を求めるといふ風に、議論よりは兎に角實行で以て國家に盡すのだ。毎度いふ事だが、彼の大政奉還の計を立てたのも、つまりこの精神からだ。併しながら實際おれの精神を了解して、この間の消息に通じて居るのは、西郷一人だつたよ。榎本でも大島でも、昔はおれを殺さうとした連中だが、今になつては却つて、頭を下げておれの處へ來るのが可笑しい。併しおれも『皆さんえらくなつた』と云つて置くのさ。此間は二十年ぶりで慶喜公にお目にかゝつたが、その時おれは『よい事は皆御自分になさつた様にわるい事は皆勝が爲した様に、世間へは仰い。』と申しておいたよ。

木戸松菊は、西郷などに比べると、非常に小さい、併し綿密な男サ。使ひ所によつては、随分使へる奴だつた。あまり用心しすぎるので、とても大きな事には向かないがノー。會て京都で會つた時、彼れが直接におれに話して聞かせたことがある。元治元年の七



月に、蛤御門の變があつた後で、あの男は會津藩の選卒に捕へられて、大勢の兵卒に護衛せられながら、寺町通りまで来た時に、大便を催したから廁へ行かせてくれといつた。すると外の事とは違ふから、衛士も許さぬといふ譯にも行かず、止むなく二人の兵卒を随へて廁へ行かせた。所が菊松は廁の前まで来ると、地べたへ蹲踞つて袴を脱ぐやうな風をして居たが、いきなり脱鬼の勢でその場を逐電した。餘り意外な事だから、衛卒も暫く茫然として居た間に、松菊は早くも對州の藩邸へ逃げ込んで、一旦その踪跡をくらし、しばらくしてまたある他の屋敷へ潜伏して、到頭逃げおぼせたといふことだ。あの男が事に臨んで敏活であつたことは、まあかういふ風だつたよ。それからあの男が下の關で兵士を鎮撫して居た時分に、或る人へ、送つた清元がある。

きのふ二上り、けふ三下り、調子そろはぬ糸筋の、細い世渡り日渡りも、そこでなぶられ、ここではせかれ、主の心に誠があらば、つらひ勤めも厭やせぬ。かういふのだが、どうだ、寓意が分るかね。

齊彬公(順聖)は、えらい人だつたよ。西郷が見抜て、庭番に用ひた所などは、なかなかえらい、おれを西郷に紹介した者は、公だよ。それ故、二十年も以後に、初めて西郷に會つた時に、西郷は既におれを信じて居たよ。ある時におれは公と藩邸の園を散歩して居たら、公は二ツの事を教へて下さつたよ。それは、人を用ひるには、急ぐものでないといふ事と、一ツの事業は、十年経たねば取りこめの付かぬものだといふ事と、この二ツだつたツケ。

小栗上野介は、幕末の一人物だよ。あの人は、精力が人にすぐれて、計略に富み、世界の大事にも略ぼ通じて、而かも誠忠無一の徳川武士で、先祖の小栗又一によく似て居たよ。一口にいふと、あれは、三河武士の長所短所とを兩方具へて居つたのよ。然し度量の狭かつたのは、あゝ人のためには惜しかつた。小栗は、長州征伐を奇貨として、まづ長州を斃し、次に薩州を斃して、幕府の下に郡縣制度を立てやうと目論んで、佛蘭西公使レオン、ロセスの紹介で、佛國から銀六百萬兩と、年賦で軍艦數艘を借り受ける約束をしたが、これを知つて居たものは、慶喜



殿外閣老を始めて四五人た過ぎなかつた。

長州征伐が六ヶしくなつたから、幕府は、おれに休戦の談判をせよと命じた。そこで、おれが江戸を立つ一日前に、小栗が窃かにおれにいふには、君が今度西上するのは、必ず長州談判に間する用向だらう。若し然らば、實に我々に斯様の計畫があるが、君も定めて同感だらう。故に、敢へて此機密を話すのだといつた。おれも此處で争ふても益がないと思つたから、たゞさうかといつて置いて、大坂へ着いてから、閣老板倉に見えて、承れば斯々の御計畫がある由だが、至極御結構の事だ、然し天下の諸侯を廢して、徳川氏が獨り存するのは、これ天下に向つて私を示すのではないか。閣下等、若し左程の御英斷があるなら、寧ろ徳川氏まづ政權を返上して、天下に模範を示し、然る上にて、郡縣の一統をしては如何、といつた處が、閣老は愕くりしたよ。さうする内に、慶應三年の十二月に、佛國から破談の報せが來た。後で佛蘭西公使がおれに、小栗さん程の人物が、僅か六百萬兩位の金の破談で、腰を抜かすとは、扱でも驚き入つた事だといつたのを見ても、この時、小栗が何れ程失望したかは知れる

よ。小栗は、僅か六百萬兩の爲めに徳川の天下を賭け様としたのだ。越えて明治元年の正月には、早くも伏見鳥羽の戦が開けて、三百年の徳川幕府も瓦解した。小栗も今は仕方がないものだから、上州の領地へ退居した。それを豫て小栗を悪んで居た土地の博徒や、また小栗の財産を奪はうといふ考の者どもが、官軍へ讒訴したによつて、小栗は遂に無慘の最後を遂げた。然しあの男は、案外清貧であつたといふことだよ。山岡鐵舟も、大久保一翁も、共に熱性で、切迫の方だつたから、可哀さうに若死をしたよ。おれはたゞづるいから、こんなに長生しとるのサ。

大樂源太郎は、善ささうな男だつたよ。餘り度々會つた事になかつたが、話せる奴らしかつた。長州人には珍しい男サ。

二宮尊徳には、一度會つたが、至つて正直な人だつたよ。全體あんな時勢には、あんな人物が澤山出来るものだ。時勢が人を作る例は、おれは確かに見たよ。

肥前の鍋島閑叟侯は、名高い明君だが、頗る陽明派の學問に達して居られたといふことだ。文久三年の正月には、將軍家文武の補導を命ぜられて、時々江戸城におい



て將軍を訓導せられたのは、大名の中でも昔から例がないことだ。侯が一生國事に奔走せられたことは、今更いふまでもなく世間に知れ渡つて居る。

江川太郎左衛門も、また可なり的人物であつた。その嘉永安政の頃に、海防の爲に盡力したことは誰も知つて居るだらう。この男は、山の中で成長して、常に遊獵などをして筋骨を練り、明け暮れ武藝に餘念なかつた。が、併し、人の知らないうちに嗜んで居たと見えて、ある時水戸の屋敷に召されて、烈公から琴を一曲を所望せられたのを、再三辭したけれども、お許しがないから止むを得ず一曲奏でたが、その音悠揚として迫らず、平生武骨なものにも似ないで、如何にも巧妙であつたから、列座のものが手を拍つて感嘆したといふことだ。

高野長英は、有識の士だ。その自殺する一ヶ月ばかり前に、横谷宗與、(一に横井宗也に作る。)これはおれの知人だが、この宗與の紹介で、夜中におれの家へ尋ねて来て、大に時事を談論して、さて歸り際になつて、おれにいふには、拙者は只今潜匿の身だから別に進呈すべき物もないけれど、これはほんの志ばかりだといつて、自分が膽

寫した徂徠の『軍法不審』を出してくれた、その跋文は、長英自から認めたのだが。

(とて座右の手文庫より重襲したる一古書を出して示さる。その跋に曰く、)

徂徠先生の『軍法不審』を讀むの跋

右十條の兵道疑問は、頗る世の兵學者流の嘲語の醜に似たり。然れども、其要する所は、從來の通弊を矯めんと欲するなり。其戦法は定法なし、須く時代の變化に軍器の制作に原き、之を立つべしと云ひ、又、今の兵法は、大率祭後の肉に類し、實用に益なき等の語は、三百年來未だ世人の言はざる所にして、卓然たる高妙の確論なり。文勢凛々秋風の樹葉を掃ふが如く、又電雷の耳目を驚かすが如し。敬服の餘り黙止すること能はず、竟に一言を卷尾に題す云ふ。

八月望後二日

曉夢樓主人識

また長英が自訴する前に、頗る面白いことがあつたが、それはおれの『追賛一話』中へも載せて置いた。これだ。

天保十亥年五月半ばの事にやありけん、市ヶ谷鈴法寺へ年の頃三十五六計りに見



える僧一人來りて云ふ、拙者事不調法には候へ共、今より以後、御宗旨を信仰いたし終身堅く相守可申候間、何とぞ御聞届御かくまい被下候様、偏へに願ふ所なりと愛瞻面會して、そこもとは如何様なる御身分にて候や、得と承り候上にては、兎も角も致すべしと云へば、僧答へて、吾は遠國の生れにて、醫業をなし近年御當地麴町のほとりに住居いたし候が、此度風斗家業取續き難き仔細有之得と覺悟いたし候、御憐察を希ふ所なり。若し御承引被下るゝに於ては、委細に御語り可申といふ。愛瞻曰く、武士の族にて事の始末相分り候上にては、如何にも圍まい候はいと易きとなれども、町醫にては、宗門の御趣意に欠け候へば、氣の毒ながら成就しがたし。と。於是僧甚だ色を變じ、さては是非なき次第なり、と大いに力を落し、戰慄して氣閉ぢたる様子なれば、藥を施し、湯など與へ、小座敷に休息いたさせ置きしが、何者とも知らず、町人體の男來り、此方へ先刻より僧一人參り居り候由、何卒私し面會いたし度候間、鳥渡御蓬はせ被下候様仕度、と。愛瞻頓にさととり、いや左様の者は居らぬなり。して、夫は誰から

承り參り候や、其の方は何者にて、名は何と申すぞ、こあらゝかに申すを聞きて、渠れは、とても叶はじとや察しけん、すぐ走り去りぬ。其の内に彼の僧は、少しく開きたる様子にて歸らんとせしかは、愛瞻とどめていふ様、未だ日も落ちねば、爰にゆるく保護すべし、と懇ろに申す。其に内にはや夜に入りたれば、厚く謝して歸りける。稍々ありて、又、戸を敲くものあり、戸を開らき見れば、提燈數張騎馬の者ありて、同勢數十人あはたどしく手に十手を打ちかざし爰に醫師體の者來り居るならん、隠し置かず速に我に渡すべし、越前守殿の御差圖なり、若し否むに於ては、家探しせん、尋常に出すべし、愛瞻聞てあざ笑ひ、爰は武門の隠れ家にて、古來より御掟を堅固に相守り候、事のすべを語らずして、家探しせんとは思ひも寄らず、たとへ誰殿の御差圖にても相成難き事にて候、若し強ひて理不盡の振舞あらんには、愚僧御相手に罷りならん、何條探させ可申こ、色を替へて高らかに申しければ、其の取圍みし役人も、其の道理に屈伏して、しばししをれて見えにけり、夫れより言葉を和らげつゝ、一同に靜まりぬ。愛瞻か



ほどの御疑ひを候はゞ、内對談の上、如何にも取計ふべし、といへば役人もさらば一通り御見せ候へといふ。愛瞻心得て案内し、住居向きは勿論、すみぐの物置湯殿までも、悉く見せてけり。時に者共皆疑ひを晴らしける。其の御酒肴を設けつゝ差出したたり。人人不審に思ひて辭退すと雖、無理に一獻を進め、少しくつろぎければ、役人申す様、先刻越前守殿の御差圖と申せしは全くまちがひにて候間、其の積りに御心得被下ぐしと。扱てまた愛瞻は、其の席へ看主を直様呼出し、此の節年の頃三十五六歳なる町醫師體の者來り、若し身分をいつはり願ふとも、假令一日片時たりとて、決して圍ひ置く可からず。必ず心得違ひのなき様に心得べし、配下の寺院へ、急渡相觸れ申可しと申渡せり。扱て、大勢の者共そこくゝに盃差置き歸りけるに、翌日にいたりて、其の主人より齡法寺へ向け、昨日は家來の者彼是御世話になり、且つ又、越前守殿御差圖と申せしは、全く口様にて候間必ず御沙汰なしに頼み入る、と使者もて申越されしとなり。其町醫師と申すは、彼の長英にて、人數を差越されしは、寺程奉行松定伊賀守上田侯

にて候ひけるよし。

右の愛瞻といふのは、豪傑の士だつたよ。

土佐の山内容堂公は、天資豪宕、襟懷洒落、眞に英雄の資を具へて居られた。平生の議論も、人の意表に出でることが多かつたが、そののみならず、公は、文詩、書、畫などの餘技にさへ巧みであつて、老儒巨工もなかく及ばなかつたといふ事だ。岸倉具視公は、度量が大きくて、公卿の中でも珍らしい人物であつたよ。おれにさへ平氣で政治上の事をいろく諮問せられたが、明治二年に、おれに送られた手紙にはかういふ事が書いてある。

寒冷之砌先以御壯健欣然候然レバ近頃御苦勞之至ニ存候得共深ク御懇談申入度筋有之候ニ付今夕亦者明朝來臨不相成哉少々御所勞ニモ承リ候得共何卒押て御出頭有之候様致シ度候仍テ早々如此候也

十一月廿日

勝安房殿

具視



今から當時の事を追想すると、おれも感慨に堪へないよ。  
山階宮は、實に卓識な御方で、世間が攘夷誰で騒いで居た頃から、既に開國説を持つて居られた。當時開國の意味が本當に分つて居たのは、宮方では山階宮、公家では堤中納言のみであつた。

おれが京都に居た時分に、宮は一度あれに會つて、西洋の事情が聞きたいと仰せられるので、『薩州の高崎正風が、その御使者に來た。高崎は、當時、宮にお付き申して居たが、おれとは至つて懇意であつたのだ。併し、この頃は今と違つて、こんな事も随分やかましかつたのだから、おれも直ぐには御返答を申上げないで、一應その筋へ掛合つた所が、原市之進などが故障を言つた爲に、止むなくお断りを申上げた。

所が、宮は、それでは貴様の手で調べた。西洋の事情を書いたものがあるなら見せてくれと仰せられたから、清書もしないものを、草稿のまゝ差出して、それに軍艦の模型などを添へて御覽に入れたが、惜い事には蛤御門の變に、書類も模型もみんな兵燹にかゝつて亡びてしまつた。

その時、宮から下さつた御手蹟と、煙草盆とがあるが、こないだ測らずも、宮の御訃音に接して懷舊の情に堪へず、藏から取り出させた。御手蹟の方は深く納めてあると見えて、一寸分らなかつたが、煙草盆はこれだ。

之を見るに、鄭重に桐の箱に納めらる。箱の蓋に記あり。曰く『山階宮様御常用之煙草盆丙寅六月以特 恩 所 賜也安房守義邦』と、蓋し翁の手記にかゝる。煙草盆は、白木の桐に菊花の散しあり。頗る高雅の透品なり。

これは、宮が御常用の品を下さつたのだ。別に結構なものを下さるよりは、こんなものゝ方が、却つて難有味のあるものだ。これ、この通り抽斗の中に御用の香も煙草も下された儘で保存してあるのだ。

御手蹟は何でも、『高物並育不相害。道並行不相悖』の十三字であつたと覺えるが、これはおれが常に好んで誦する語だ。

その後、何時か一度お目にかゝつた事があるばかりで、一朝溘焉として御薨去になつたのは嘆かはしい事だ。



高島秋帆といふのは、日本で銃陣の鼻祖だ。通稱を四郎太夫といつて、代々長崎の町年寄であつたが、或時獨逸の一武官が長崎へ來たのに會つて、いろ／＼軍事上の事を聞き、始めて西洋に銃陣といふものがあるのを知つて、日本の武器は、とてもこれには及ばないことを覺つた。そこで秋帆は世間の人の誹るのを顧みず、自分の財産を擲つて、この銃陣といふものを習ひ、大に得る所があつた。ついでには、その成績を見分して下されい、と幕府へ願ひ出たので、幕府も之を許して、武州徳丸原に於て、實地演習をやらせて見た。所が舊來の兵術家は、勿論いろ／＼と非難したけれど、諸藩士の中で多少天下の形勢が分つて居る人は、何れも感服してその門にはひり、弟子の禮を執つた。幕府の方でも、勢ひ之を排斥することも出來ないから、竟に江川、下曾根の兩砲術家を同じく秋帆の門に入らせることになり、秋帆の名もおひ／＼廣まつて來た所が、これは改革時代の先輩には兎に角あり勝のことだが、秋帆もとう／＼保守家の讒言に遭つて、家財を沒收せられ、自分は縲紲の辱を受けるやうになつた。併しながら眞理の前に敵はない、秋帆の不幸も一時の事で、しばらく經つとまた用ゐられ

て、講武所の師範役になつた、兎に角あれは具眼の士さ。

向山 黄村は、詩人ではないよ。あれは學問の素養があるから、一寸餘興に作つても、あんな傑作が出来るのだ。あれはもと、一色仁右衛門といつて、これもなかく／＼學問もあり才氣もあつた幕臣の子で、幼名を英五郎といつたが、幾つかの時に聖堂へはいつて勉強して居た時にも、塾生の中で嶄然頭角を顯はしたのみならず、世間でも餘程の評判であつた。そこで、これも矢張り幕臣の向山源太夫といふものが、英五郎の才學を慕つて、親の仁右衛門に、英五郎どのを是非共拙者の養子にくれと懇望した。所がこの向山源太夫といふ男も随分學問も見識もある上に、頗る吏務に長じて居たので、この頃旗本中では至極評判のよい方であつたから、仁右衛門も一議に及ばず、その趣を承諾して、即ち英五郎に向山家を嗣がせることになつたのだ。

其の頃幕府は、北海道へ手を着けることになつて、向山源太夫は函館奉行を命ぜられて、彼の地へ派遣せられたが、その内に養子の英五郎を準備頭に取立て、遙々函館まで呼び寄せ、自分の手元で使つて見た所が、果して自分の眼識に違はず、大層役に



立つた。彼是する内に、源太夫は同僚のものと、北海道の各地を巡視して、樺太まで行くことになつたが、英五郎もまた一行の中へ加はつた。この時分の北海道といへば固より人跡の未だ到らん所が多かつたのだから、新に地名を附けるとか、又はいろいろの測量をするとかいふような仕事しごとが随分澤山あつたが、多くは英五郎が一人で引受けてやつてしまつたといふことだ。此の時の旅行は、云はゞ英五郎の爲めに初旅で、その上樺太へは露西亞人が来て居たから。これ等に對する交渉やなどで、あれも非常に有益な經驗を積んだのだ。

こんな事で、英五郎の評判はますますよくなつた所から、小栗や栗本などが佛蘭西へ制度視察の爲めに派遣せられる時には、出格の取扱を以て觀察使になつて、一緒に洋行することになつた。それで一行は佛蘭西から和蘭を経て歸朝して見ると、本國の形勢はますます迫つて、非常に人材を要する場合であつたから、英五郎はまたも出格の取扱を受けて、頗る重く用ゐられた。

此時朝廷から將軍家茂公に攘夷の御上意を下されたが、將軍は天下の大勢に鑑みて、

到底お受けは出来ないと思ひ、辭表を呈出して京都を立去られたが、この辭表は、數多き幕臣の中から、特に英五郎を選抜して書かせられたのだ。たゞに書かせられたのみではなく、英五郎は、また辭表を上るに就ての評議に與かつたのだから、當時英五郎といふものゝ勢力が小さくなかつたことが分かる。

すると重立つて幕府の執政者は、皆英五郎の重く用ゐられるのを妬んで、「何だ生意氣ものが新參の癖に」などと、種々毒言を放つて、とうとう英五郎を陥れて、謹慎を命ぜられるやうにさせた。こんな事は、何時の代にもよくあるとだが、舊幕時代では、殊更この弊害は甚だしかつたのだ。

彼是する内に、慶喜公が將軍になられたから、英五郎は再び登用せられて、參與になつて、又も樞機に與ることになつたが、あの大政奉還の上表文は、誰が書いたかよく覚えぬが、政權返上の後に將軍は謹慎の身となられた、それに就ての上表文は、慥かに英五郎が書いたのだ。その後ち將軍から出た上表の類も、大抵は英五郎の手に成つたといふことだ。



さていよく明治の世になつてからは、英五郎は、野心も、希望も、一切擲ち去つて沼津の里で専ら教育事業に従事して居つたが、世の變遷につれて長く沼津に居ることも出来ず、またもや東京へ出ては來たが、併しながら田安一ツ橋兩家の外へは、一切關係せぬと決心して、熱心にこの兩家の爲めに教育などの世話をし、その外へは一寸も俗累を拵へなかつた。そして傍ら文墨を樂んで、悠々殘年を送つたのだ。左様さ、おれよりも二歳ばかり若かつたらうよ。まあ兎も角も一世の人物サ。

岡本黄石は、大鹽中齊の高足宇津木矩之丞の兄だが、この宇津木といふのは、なか／＼剛直の男で、大鹽があゝの『救民天誅』の旗を立て、兵を擧げんとした時に、直ちにその前へ出で、『先生この度の御舉動は、平生の沈着にも似ず、暴虎馮河の輕舉である。大義は今更小生が申上ぐるまでもないが、如何に長らく先生の高恩を受けて居ればとて、聖賢の遺訓に背いた御舉動、反逆に類する御計畫には、小生斷じて御賛成致すことが出来ない。願はくは先生今一應の御熱慮を煩はしたい。』と切諫した男だ。それで、黄石も、世間からは、詩人に見られて居るけれども、あれも決して尋常彫蟲

の藝人ではない。もとは彦根藩の家老で、祿高千石も食んで居たから、家政の豊かなのに任せて、樂みに詩も稽古をしたのだが、それがあんなに上手になつたのだ。全體あの男は、佐幕家であつたから、その頃若い人の間では、随分評判が悪かつたが、併し井伊大老の殺された時の處置ぶりなどは、おれも感心したよ。何でもあの時井伊の家中で、血氣にはやる連中は、直ぐに水戸の屋敷へ暴れ込むといつて大騒ぎをしたのを、黄石はいろ／＼に宥めて、幕府へはたゞ、自分の主人が、登城の途中暴漢の爲に傷つけられたとを届け出て、事を穩便に済ませたが、もし、その時黄石が、思慮のない男で、一時の感情から壯士どもの尻推でもしたのなら、それそこ大變で、幕府も屹度これが爲に倒れるし、已に幕府が倒れれば、當時の形勢必ず日本全國の安危に關するのであつた。それを、まづあの通り穩かに済ませたのだから、若い人だちが何といつて誹らうが、兎も角えらい。凡そあんな場合に、一時の感情に制せられず、冷かな頭を以て國家の利害を考へ、群議を排して自分の信する所を行ふといふには、必ず胸中に餘裕がなくては出来ないものだ。その後、おれはあの男に會つた時に、國家の大



事を思つて、一身の毀譽を顧みず、至極穩當な處置をしたのは、感心だといつて、賞めてやつたら、知己を得たといつて、大層喜んで居たよ。

全體あの頃、諸侯の家老といふものは、多くは學問も見識もない、分らない奴等ばかりで、足輕などに搗ぎまはされて居たのだが、その中でこの岡本黄石も、廣島藩の辻將曹との二人は、まづ鷄軍中の一鶴であつたのだ。辻といふ人は、藝州の家老だから幕府と長州との間に立つて、うまくその折合を取つて居たのだが、朝廷でもその功勞を認められて、今では華族に取立てられて居る筈だ。この二人の外には、論ずるに足るやうな人物も居なかつた。

また、茲に一つをかしい話があるのは、長州征伐の時の事だが、あの時、彦根は固より旗本の旗頭だつたから、舊例によつて先鋒を命ぜられた。そしてその大將は、即ち黄石であつた、勿論この頃彦根あたりは、未だ太平三百年の夢が覺めない時であつたから、本當の戰爭といふものを知らない連中ばかりで、三百年も昔のやうに、矢張り赤具足を着込んで、旗物差を押し立て、笛や太鼓でヒュードン／＼と嘯し立て、進

んで行つた。所が長州の武士は、既に開化して居る、尻を端折つて身輕にいでたら、紙屑拾ひか何ぞの様な風で、旗鼓堂々たる幕軍と擦れ違ひに、傍の小路を通つて、此方へ進んで來た。併し風體が風體だから、幕軍の方では、それが敵兵であらうとは、少しも氣付かなかつた。長州兵は、その隙に乗じて、事もなく幕軍の先鋒をやり過ぎて置いて、さて不意に本陣の大將を目掛けて鐵砲を放つた。そこで、幕軍は大騒ぎをして居る内に、大將が討死をしたといふ風説が、先鋒く聞えて來た。是に於てか、流石の黄石も狼狽して後へ引返したといふことだ。これは、後で黄石が直接おれに話して聞かせた。

全體あの男は、根が正直一方であつたから、時勢の變遷推移といふことを知らずに、明治の代になつても、矢張昔しの家老のやうな考で居たから、一向志を伸べることも出來ず、始終若いものに向循だとか、舊弊だとか、誹られて居て、本當に氣の毒な人であつた。今年の春あれが死ぬる二三ヶ月前の事だつたが、こゝろいふ詩を贈つてよこし、



久矣人間幾變遷

長天四海大平年

殘骸九々又加一

順向春風誇瓦全

ほんに昨日の事のやうだが、思へば最早幽明處を異にして、又と再び會ふことは出来ない。一首の絶句もつまり涙の種さ。

澤太郎左衛門もおれの昔からの友達で、おれよりは未だ餘程若い筈であつたが、到頭死んでしまつた。あれは、昔しおれから歩兵の訓練を受けたものだが、其後おれは長崎へ行つて、いろく遣つて居る内に、あれも海軍の方へ廻はされて、同じく長崎へやつて来て、蘭學の稽古などを始めたがなかくの勉強家で、書生の間でも指折りの才子だといつて、教師も常に賞めて居た。さうかうする内に、幕府は海軍の學術研究生を和蘭へ派遣する事になつたので、澤も榎本、林、赤松、眞木などいふ連中と共に歐洲へ留學を命ぜられた。全體、此頃長崎で海軍の修業をして居つた書生は、隨分澤山あつて、中でわざく選拔せられて海外へ留學を命ぜられるのだからこの一組は兎に角優等生ばかりであつた。それで、これ等の連中は何れも四五年ぐらゐ和蘭で勉強して歸つたが、もう學問もほど成就して居たから、それく一廉の役目を勤め得た

ので、例の咸臨丸の如きも、外國人の手を借らないで、無事に太平洋を乗りまはして歸つて來た。そこで、この頃は、既に築地に海軍の練習所が建てあつたから、まづ差し當り、新歸朝者をこの方へまはして、兵學の教師をさせることになつた。併し兵學の教師などといつた所が、今から考へて見れば、教へる方も教へられる方もまるで夢中さ。

兎や角する内に、世の中は勤王論や佐幕論で、段々物騒になつて來たので、今の連中もそれく見る所によつて、方向を定めなければならぬ、さう斯うなつて來るとこの連中の間で戦争すると云ふものと、せぬと云ふものと、即ち主戰論と、非戰論との二派に分れた。それで澤は、榎本等と函箱の脱走組となつて、主戰論の原動力となつたが、函箱の戦に負けて、榎本大島等を始めとして、主立つた面々は、皆な捕縛せられて仕舞つた。それから姑くするうちに、天下は治まり、世は追々に歐羅巴の新文明を移植することとなつて來た。そこで、築地に文明流儀の海軍兵學校が出來たが、此の時の校長とも云ふべきのは、今の海軍中將中牟田倉之助で、其の時分には、之れを



學校の頭取と云つて居た、澤も其の時は、最早赦されて居たから、人材登庸の仲間入りをして、兵學の教官となつて、姑く育英の事業に一身を専じて居た、おれは、この時分海軍卿をしては居たけれども、おれの流儀として、大體の事はがりに眼を着けて細かい事には、一向無頓着であつたから、當時の事情は、餘りよくは知らなかつたが併し此の學校からは、随分澤山の人物を出したかと思ふ。其の後澤も今がよい時機だと云つて、學校を辭職したが、元來おれは財産があつたから、その後靜かに晩年を樂しんで居た。見なさい澤等の手で仕立て上げられた海軍兵學校の卒業生で、今は海軍の樞機に與かつて居るものも澤山あるが、皆ないやに豪傑ぶつた顔をして居るから可愛しくなるよ。

大迫貞清といふ男は、先年(廿九年)死んだが、一寸人物だつたよ。

全體、維新後の静岡縣は、舊幕のものが澤山移住して居た所だから、中々尋常の人では、治め難い、事情もあつたが、かういふ所の縣令には大迫が適任だと思つて、おれは彼を推薦したのサ。ところが、大久保に不承知の様だつたけれども、まあおれに見

所があるから、是非にと迫つて、強ひて赴任さす事になつたが、矢張り、おれの望み通りうまく遣つてのけたよ。

大迫は、極めて大量寛宏の男で、静岡では別段これといふ干渉壓制がましひ事はせず、一意たゞ公平至誠の考を以て、縣治を施して、敵も造らず、味方も造らず、

つと大様にやつたから、徳望は自然に歸し、縣下は無爲にして治まつたのサ。併し、初めは、大迫の腕で、あの難治の静岡に縣令となることが出来るかと危ぶんで居た人も、大久保の外にも多かつたが、九年の間、一度の浪風も起さず、至極穩やかに縣民の心を統一した手際を見ては、何人も今更のやうに感心したよ、縣令から一躍して、警視總監に任用せられたのも大方其の結果だらう。

三位様(徳川家達)は、原來人に巨愛がられる質で、學問も相應にあり、至極正直で勉強家だからお上にも始終お目を懸けて下さるよ。此頃はあんなに日増に肥滿せられるから、おれは十分に御運動なさいとお勧め申したが、その通り昨今は絶えず運動して居られるさうだ。流石に征夷大將軍 血脈を受けて居られるだけあつて、どことな



く人と違ふ所があるよ。

おれも既に三十年以上徳川家の爲に骨を折つたのだから、近來は成るべく關係しない様にして居るが、それでも時時は御相談があるよ。此間も市長の候補者を辭退したが何うだと仰つたから、それは至極よろしからうと申上げておいた事だ。一體あれは慶善公にでも家達公にでも、常々かういつて居るのだ。維新の際に大政を奉還したことは、つまり國家の安寧と、人民の幸福とを望んだので、その當時議論の沸騰したことは、さても今日政治家や新聞屋がわい／＼いふ比ではなかつた、それを能く仰へ付たて、何事もなく今日に至らしめたのは、實際徳川家の功勞である。朝廷に於ても其所を御覽なさつて、華族に取立てられ皇室の藩屏と定められたのだから、もう此の上はこせ／＼した事も苟も動いてはいけない。他日若し非常な場合が來て、徳川氏出でずんば奈蒼生何といふやうな折があるまでは、まづ／＼落ちついて居られるがよろしからうと、かういつて置くのだ。三位様が市長の候補者を辭退せられたのも、大力其處の所をお考へいになつたのであらう。

今北洪川は、會て其の名を聞いて居たから、一店訪問して見たが、あの人は、少し俗氣がある。近代の僧門では、どうしても行誡が一番だらうよ。

北條義時は、國家の爲めには、不忠の名を甘んじて受けた。即ち自分の身を犠牲にして、國家の爲めに盡したのだ、その苦心は、とても輕々たる少丈夫には分らない。頼山陽などは、未だ眼孔が小さいワイ。おれも幕府瓦解の時には、せめて義時に嗤はれないやうにと幾度も心を引き締めたことがあつたツケ。

足利義滿が、明の皇帝から、日本國王に封ぜられたのを、歴史家は、口を極めて攻撃する様だが、おれは何も義滿を辯護するではないけれど、彼が虚名の封冊を受けたのは、之によりて、實際の利益を採らうといふ考だつたのを忘れてはいけないよ。彼が明に頭を下げて、どし／＼永樂錢の惠與を請うた所を見ると、彼も中々喰へない男サ。

細川頼之は、日本の大經濟家だよ。海外貿易から、足利氏財政の制度まで、この人の創始に出たものが多い。



中江藤樹は、日本で陽明學の開祖だ。その人と爲りの如何は、今更にはなくつても近江聖人といふ稱號のあるので、よく分つて居る。何分この人は議論よりも實行を重んじたのだから、著書といつては、別に今日まで傳はつて居る様なものもないが、併しながら、その没後二百五十年も経つて明治の代にすら、なほ藤樹先生の遺徳を追慕するものが、世間に幾らもあるのは、その風流餘韻が、深く人心を浸潤して居るからだ。

藤樹のここを思ふにつけて、毎度ながち癩に障るのは、今日の漢學者だ。人を感化する道徳も、世を救済する經綸も丸で無い癖に、修身齋家だとか、治國平天下だとか、法螺を吸きまはつたり、それでなければ、益にも立たない詩賦文章をひねくつたり、止せばよいのに訓話考證にこそくしたり、それで居て、當人は天晴天下の儒者だといつて得意がるのが、おれには可笑しい。こんな奴等は畢竟社會の穀潰しだ。居候だ。全體滿學といふものは決してわるい學問ではない。やり様によつては隨分役に立つのだ。

だ。それが今日のやうに一向振はないといふのは、つまり漢學がわるいのではなくつて、漢學をやる人がわるいからだ。漢學者が漢學の頭腦を忘れて、聖賢の必法を活用することを爲得ないで、徒らに記誦詞草の末技に汲々として居るからだ。若い人たちは、今から其處をよく辨へて勉強するなら、なに、聖人の各は藤樹一人のものではないよ。

熊澤蕃山は、儒服を着けた英雄だ。彼は中江藤樹の門人で、學問は勿論王陽明を主としたのだが、その頃は非常な勢ひで以て四方を風靡した。備前の新太郎少將に召抱へられた時には、大に従前の弊政を改革して、荒地を拓いたり、堤防を築いたり、教育を奨勵したりなどしたものだから、備前の民は、今日に至るまで、蕃山の餘澤を蒙つて居ることが多いのだ。おれは今の政治家や、教育家のする仕事を見るにつけて、屢々蕃山を思ひ出すよ。

南光坊天海は、非凡な奴であつたらしい。あれが今暫く頭を圓くせなかつたなら、屹度家康公に向つて弓を彎いたであらう。あの男はもと、宗家の蘆名家が滅亡した爲に



流浪落魄して、とう／＼叡山の坊主になり、そこで非常に苦學したものが、一朝家康公の知遇に感激してからは、赤心を捧げて徳川氏の爲に、畫策經營の勞を執つたのだ、なか／＼今時の懶惰書生が、十分の學資がありながら、それで何事も仕出來さないうで、空しく一生を過ごしてしまふのとは、頭から較べものにならない。處で家康公が天海を何故用ゐられたかといふことについては、おれに一説がある、それは外でもないが、家康公は幼少の時に今川家の質となつて、駿河の臨濟寺で讀み書きの稽古をせられたが、その寺の住職は、餘程な高僧であつたと見えて始終今川家の樞機に參與して、今川家の爲には随分功勞があつたらしい、家康公は明け暮れそれを覽て居られたから、出家といふものは、政治上至極大切なものだといふお考が、深く脳髓にしみ込んで居たに相違ない。そこで彼の天海の非凡な坊主であることを見ぬかれて、あの通り重く用ゐられたのだ。三代將軍が、澤庵和尚を座右に置かれて、始終民間の事情や何かを聞いて居られたのも、つまり家康公が、天海におけるのと同じ筆法だ。それはさて置き、天海はあれ程の人物であつてそしてあれ程重く家康公に用ゐられた

とすれば、天海の事績といふものが、それ相應には傳はつて居なければならぬのにそれが一向歴史にも載つて居ないのは、何故だらうと疑ふものがあるかも知れない。が併しその傳はつて居ないのが即ち天海の天海たる所以なのだ。今日やつた事を直ぐに明日、而かも針ほどの事を棒の様に吸聽するのが今時の流行だが、天海などはそれと違つて、家康公の樞機に參與しても、どんな事を計畫したのか、世間へは少しも吹聴しない、この吹聴しない、少しも分らない底に、叩く／＼何だか大きく響くものがあるのだ。そこが即ちえらいこいふものよ。

澤庵和尚も、もこは一個の雲水僧で、六十餘州を遍歴して、各地の民情風俗に通じて居つた。そこで三代將軍にも用ゐられたのだが、その凡人でなかつたことは、和尚を推舉した人のえらかつたので分る。その人は誰かといふも、外でもない、有名な柳生但馬守だ。

柳生但馬守は、決して尋常一様の劍客ではない。名義こそ劍法の指南役で、極低い格であつたけれど、三代將軍に對しては非常な權力を以て居たらしい。全體誰でも表



立つて權勢の地位に坐ると、大勢の人が始終注意するやうになり、随つて種々な情實が出来て、とても本當の仕事の出来るものでない。柳生は、此の呼吸を呑み込んで居つたこ見えて、表向はたゞ一個の劍法指南役の格で君側に出入して、毎日お面お小手と一生懸命にやつて居たから、世間の人も餘り注意しなかつた。併しながら、實際この男に非常の権力があつたのは、島原の亂が起つた時の事で分る、島原の亂の時に、注進が幕府へ來ると、將軍は直ぐに板倉内膳正に命じて征討に向はしめられた。處が柳生は、此時ちやうどある大名に招かれて、御馳走になつて居たので、一寸もこの事を知らなかつたが、その席へ來た他の大名が、島原征討の役目を内膳正に仰せ付けるのは、人が餘り輕過ぎるこいつて、非難して居るのを聞いて、始めてそんな事のあつたのを知つて、大變に驚いて、その大名の馬を借りて、直ぐに内膳正を追懸けて六郷まで行つたが、とても及ばないと覺つて後返りして、すぐその足で將軍の御前へ出で征討の將がその人を得なかつた事を、ひどく諫言したといふことだ。全體將軍が已に嚴命を下して、江戸を發たせたものを、僅か劍道指南ぐらゐの身分で居りながら

獨斷で以てそれを引留めやうといふのなどは、とても尋常のものでは出来ないことだ。おれはこの一事で、柳生が將軍に對して、非常な権力を持つて居たことを見抜いたのだ。凡そ歴史を讀むには、こんな處に注意しなければ、事實の真相は分らない。所謂眼光紙背に徹するといふのは、つまりこんな事さ。

宮本武藏といふ人は、大層な人物であつたらしい。劍法に熟達して居つたことは、勿論の話だが、そのみならず、書畫にも堪能であつたと見えて、書いたものの中に神品ともいふべき物が澤山ある。この人は、仇があつたので、初めは決して膝から兩刀を雄さなかつたが、一旦豁然として大悟する所があつて、人間は、決して他人に殺されるものでない、といふ信念が出来、それからといふものは、まるで是迄の警戒を解いて、何時も丸腰で居たさうだ。處が或時、武藏が例の通り無腰で、庭前の涼臺に腰をかけて、團扇であふぎながら、餘念もなく夏の夜の景色に見とれて居たのを、一人の弟子が、先生を試さうと思つて、いきなり短刀を抜いて涼臺の上へ飛び上がった。武藏はアツといつて忽ち飛び退くこ同時に、涼臺に敷いてあつた筵の端をつかまへて



引張つた。すると、そのはずみに、弟子は涼臺から眞逆様に倒れ落ちたのを、見向きもせず平然として、「何をするか」と一言いつたばかりであつたさうだ。人間もこの極意に達したら、どんな場合に出會うても大丈夫なものさ。

北條早雲といふと、誰もたゞ炯眼な將戦だとばかり思ふけれども、あれは、また非凡の政治家だよ。もとの關東八州は、室町將軍の領地で、租税の苛煩なのは、日本一の處だつた。大方七公三民位に當つただらう。早雲は、これを察して法を三章に約し、大に租税を輕減したのだから、民のこれに従ふことは、水の低きに就くやうだつた。あれが羈旅の身を以て、手に唾きして關八州を収めたのは、獨り英雄の心を攬たためばかりでない、また民心を服し得たからだ。

西行法師は、古今第一等の人物だらう。試みにその歌を誦して見るに、彼が高潔の姿は彷彿として眼の前に顯はれるよ。一旦志を立て、超然として脱俗し、少しも世を怨む風がなく、一生を風雅に托したのは實に高士ではないか。

柳生但馬の、澤庵禪師におけるは、大方その跡を晦ましたものだらうよ。道を聞く

にかこつけて、四方の形勢を聞いたのだらう。あんな時代に、諸方に旅行するものは僧侶ばかりだから、政治家は、僧侶にでも聞かなければならなかつたのさ。

物徂徠は、豪傑儒だ。一體儒者が徳川幕府へ登用せられるのは、大抵林家の取り成しによるのだが、獨り林家の下風に立たなかつたのは、白石と徂徠とばかりだつたよ。徂徠が會つて布衣を以て將軍を謁見した時に、將軍は、朝鮮修好に關する機密の事を相談せられた。所が徂徠は多くの役人共が恐れ入つて、ぴり／＼震へて居る將軍の面前で、談論自若として、傍若無人の有様であつた。侍臣は、見かねて、餘り聲が大きいと咎めたら、徂徠は、平氣な顔で、如何に聲が大きくても、朝鮮までは聞えまい、といつたさうだ。その豪懷のほどが想ひやられるワイ。

王陽明は、孟子以來の大賢だ。致良知の説や、知行合一の論が、哲學界に一種の異彩の放つたのは勿論の事として、詩書などの末技に於ても、獨特の妙があるのみならず、其の文章は、唐宋八家以外におのづから一旗幟を翻して居る。西郷西洲などもひどくこの人の學識と德行とに感服して、平生大に私淑して居たらしい。全體陽明の



學風は、簡易直截であるから、我が國民の氣風に最もかなふて居るやうに思ふ。併し王陽明の事は、おれよりも、君の方が委しいから、詳しくは話やまい。

清の太祖は、千古の偉人だ。あんな傑物は、何れの世にもあるまいよ。

李鴻章は、なかく喰へない老爺だ。彼が先年小山六之助に狙撃せられた時も、痛いとも、痒いとも何とも感ぜぬ風で、自國の醫者が、ちやんと付いて居るにも拘はらず、いはゞ敵國の醫者の治療を受けて、少しも疑はなかつた所などは、流石は李鴻章だ、何處に底があるのやら、一寸分らないサ。

朴泳孝は、善人だ。何時かおれの所へ来て、某伯が金を千兩貸すといはれるけれども、否だといふから、そんならお前は金があるか問ふたら、金はありませんといふよ。おれも面白い男だと思つたから、どうだ、おれが金を遣らうかと云つたら大層悦んで、先生が下さるなら貰ひませうといつたから、月々少しづゝ呉れて遣つたよ。人間も生れが大事だ、小國でも、貴族は貴族だけ潔白な心を持つて居る。

あれも自國の外交の事には、餘程氣を揉んで居たと見えて、曾て金玉均と同道して來て種々の問を起すから、おれは露西亞には依りなさいといつたら、金玉均は、おれの語を誤解したものと見えて、ひどい事を仰せられるといつたが、その後は、丸で來なかつたよ。なに、おれも依りなさいといつた所で、屈服しろといふ考ではなく、ただ強大の隣國を敵にしては、不利益だといふ意味なのサ。

丁汝昌は、おれが海外の一知己だつた。が、日清戦争のときにとう／＼自殺してしまつた。當時、おれは今昔の感に堪へず、かういふ詩を作つた。併し平仄などは、無茶だよ。

二月十七日聞 舊知清國水師提督丁汝昌自殺之報。我深感君之心中果決無私。亦嘉從容不誤其死期。嗟歎數時 作 蕪詩。慰其幽魂。

憶昨訪我居。一劍表心裏。委命甚義烈。儒者爲君起。我將識量大。萬卒皆遁死。心

血濺渤海。雙美照青史。

また病氣を推して、こんな章をも書きかけた。

『廿八年二月十六日、丁汝昌その率うる所の軍艦を以て、降旗我に降ると。其可否得失



を論じて、我が意見を聴く、我黙識するあるを以て答へず。其後、兩三日を以て、丁は降る順序を終へ、自刃して死すと聞く。我是を聞て、彼の心裏を思ひ、歎息數時。憶記す、彼が我邦に來りし時、我家を尋ね話次懇々。其後、軍艦に招き、我に對するに軍艦總督の格を以てす。今、其話次の一二、憶に存するものを記し、窃に彼の待遇に答ふ。海外一知己を失ひしを歎じ、數章を記す。

丁氏は、軀幹巨大、面皮淺黒く、相見る所、毫を威嚴なし。且つ舉止活潑、邊幅を修めず、言調眞率、一僮夫に類す。彼云、君を訪問する者、君昔海軍を創始し、頗る艱難を経たりと。我は昔邦民の動亂せし時、李氏の部下に屬し、難危を経たる殆七ヶ年其登庸を蒙り始めて海軍に入る、其子弟二百名と共に英國に到る、歸り來り一二軍艦に將たり、然れども海軍の困難なる、得たる所なくして其任に不堪ものあり。且有司は其用を察せず、やゝもすれば無用の長物として百事故障を成す。君が昔時の困苦可々察なりと、彼一見舊知の想をなし、臆を聞く。其談甚聞く可く敬す可きものあり。

此處まで書いた所が、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛がし出したものだから、止むを得ずそれなりにした。今、その續を口で話さうワイ。あの時、丁が支那當時の海軍に就いていふには、今日我國の海軍は、如何にも見所がなく、お耻かしき次第だが、拙者はたゞ將來に期する所があつて、聊か自から奮勵して居るばかりだ。拙者は會て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて英國へ留學し、同國の士官に就いて、少しく海軍のことを學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やうく今日の海軍を創設したけれども、これはたゞ兒戯に過ぎない、その事は李氏も承氏と見へて、今日の海軍は、何の役にも立たない。たゞ今後十年を期して大成すべきのだが、今日あるのは、その時の基礎にするにも足りない、常々われわれに云て居る。拙者は、會て貴著『海軍歴史』を讀んで、君が幕末から王政維新の際にかけて、海軍を經營せられたる閱歷と偉勳とを承知し、拙者が今日の境遇にくらべて、うたた同情の感に堪へず、切に敬慕致し居るといつた。丁のいふ所は、その語は甚だ謙遜で、その望は、甚だ遠大であるから、おれも感心して、海外に一知己を得た



のを喜び、いろ／＼おれの考へをも話した。その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せられ、色々丁寧な饗應を受ければ、おれは一片の氷心を表はす爲めに、一首の和歌を一口の寶劍に添へて彼に贈つた。そして艦内残る隈なく見物したが一體の事もなかく整頓して、日用用ひる品などは、一つも外國製を用ひず、支那製ばかり用ひて居た所などは、實に感心したよ。軍服なども、西洋服と支那服とを折衷したのだといつて、丁は自分の着けて居るのを指し示した。

丁は殉死した劉步蟾の如きも、この時面會した襟に覺えるが、確か沈黙がちな性質で小男ながら膽氣がありさうだつた。

おれと丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戦争の時分には、思ひは始終北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が氣に掛かつた。またあのときの聯合艦隊の司令官であつた伊東中將も、昔し神戸でおれの熟にいた縁故から、一生一度ともいふべき晴れの舞臺に上つたからは、どうか日本海軍の名譽と、一身の手柄とを立てさせたいとおもつて、當時おれの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど千々に碎けたよ。

に碎けたよ。

然るに、威海衛の海戦は、敵味方ともこの上なき名譽を輝かし、世界の海戦史上に、一と花咲かせたと聞いて、おれは實に嬉しかつた。かくあつてこそ、おれの心配も甲斐があるといふものだ。丁がああの時の處置は、實に一點の非難すべき所もなく、海戦上に一個の新事例を教へたといつてよい。陸戦のさき、あの様な場合に處する例は、これまで幾らもあつたけれど、世界に海戦といふほどの海戦が昔しからなく、従つてあんな場合も少ないものだから、之れに處する方法の如きと、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に戰鬥力を失つた艦長が取るべき模範を示したばかりでなく蕭條たる海戦史の秋の野に、一點の紅花を點じたのだ。

凡そ人間が何事にか激した時には、死ぬるのは譯もない事だらう。併しよく／＼事務局の前後を達觀して、十分に善後の策を立て、然る後、從容として死に就くのは、決して容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には數年來苦心養成した所の他日支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には色々面倒な事をいひ



出す雇外人があり、これ等の處置をつけねばならぬ。寧ろ斃れるまで奮戦せうかといふと、十年素養の二百名を殺さなければならず、それでは降参せうかといふと、自分の良心はどうしても許さない。そこで丁は沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、且つは雇外人との義理から、一身と軍艦を犠牲にして顧みなかつたのだ。その心の中は、實に憫むべきではないか。

大院君も、とうとう死んでしまつたノ。この人については、種々の批評もあるが兎に角一世の偉人だ。君は曾ておれを、東海の英傑だといつて、朝廷には誠忠を以て支へ、徳川氏の宗廟を経たないやうに處置した功績は、千載不朽だと賞めてくれたが固より過賞ではあるけれど、おれは、大院君を以て知己の一人だと思ふて居るのだ。先年君から二枚の紗に、自から懸崖の蘭を畫いて、八十老石道人と落款したのを寄贈せられたから、おれも、先年(明治三十年)七月頃であつたか、返禮に此の詩を贈つた。

世事半兒戲 豈堪作盲評

長白山頭月 獨照綠江清

明治三十年奉呈

大韓大院君閣下

所が、その子息の李戴冕、孫の李竣鎔との二人から、こんな返事が來た。

謹拜啓、暑氣方熾、起居健康、奉賀千萬。小生一依舊様、是爲私幸耳。曩賜水晶及錦勒、寄送干本國矣。家祖父感喜交戰、不知所謝。而高著書常々鹽讀、以破老境之昏惰云。小生聞此不勝喜悅也。且家祖爵俱呈刺紙干閣下故謹奉上矣。小生今日午前七時二十五分、自新橋抵橫濱、乘土佐丸、而向歐洲矣。將於歸時奉清範。只祝循時安享。

八月二十五日

李戴冕  
李竣鎔

海舟老大人閣下

手紙の中にある洋行(向歐洲矣)の句を指すといふのも、おれが大院君に忠告したから思ひ立つたのだんヨ。それは兎に角、大院君の死んだのは、朝鮮の爲に一大不幸であ



る。  
 埃鎔も、たびくおれの處へ來たよ。餘りくどくしく朝鮮の事をいふから、おれは朝鮮の様な小さい國は、誰も取りはせぬから、安心して露西亞に依頼して居るがよい日本も、支那も、たよりにはならないといつて遣つた。あれは、餘程疑深い男だ。とても賢い奴ではないよ。

陸奥宗光は、おれが神戸の塾で育てた腕白者であつた。あれが、おれの塾へ來た原因は、紀州の殿様から、我が藩には、猪武者のあばれ者が澤山居るから、之をお前の塾で薰陶してはくれまいかとの御沙汰があつたから、おれはわざく紀州へ行って殿様や家老に面會し、都合二十五名の腕白者を神戸の塾へ連れて歸るとになつたが、陸奥もこの内に居つたのだ。併し、陸奥だけは外の二十四名とは少し違つた事情があつたそれは、おれが紀州へ下つた時に、藩の世話人の伊達五郎といふものが、拙者の弟に小次郎(即ち宗光のこだ)と申す腕白者があるから、これをも一緒に連れて歸つて一かどの人物に仕上げて下され、と頼んだから、それで二十四名と共に陸奥をも連れて來

たのだ。當時小次郎の父は、伊達利徳といふ隠居であつたが、兄の五郎は、紀州藩でなかく評判が良かったさうだ。  
 かういふ譯で、小次郎は、おれの塾にはいつたが、おれは、小次郎に、塾内では亂暴を働いてはいけないと嚴禁して置いたから、あれも塾内ではおとなしかつた。あれもこの時分には、まだ十六七の若衆であつたが、身の丈にも似合はぬ腰の物を伊達に差して、如何にも小才子らしい風をして、夜などは壁の庭前で同窓の伊東などと角力を取つて腕をためして居たよ。伊東といふのは海軍中將の伊東祐亨のことだ。塾中では小次郎の評判は、甚だわるかつた。皆のものはあれを『噓つきの小次郎』と云つて居た。全體、塾生には、薩州人が多くつて、専心に學問をするといふよりは、寧ろ膽力を鍊つて、功名を仕遂げるといふことを重んじて居たから、小次郎の様な小伶俐な小才子は誰にでも爪弾きせられて居たのだ。  
 その後、薩摩では、軍艦を買入れ、引續いて紀州でも買入れたについては、おれの塾のものは、皆軍艦乗組を命ぜられたから、おれも塾を閉ぢたが、それからは一度も小



次郎とは遇はなかつた。維新後は、おれの塾生も大抵それ／＼に出世したが、伊東祐亨でも、堀基でも、昔好みを忘れないで、時々おれを見舞ふてくれるのに、獨り小次郎の陸奥ばかりは、死ぬるまで大きな顔をして、ちつともおれの處へ來なかつたよ。陸奥は元來才子だから、中々仕事は遣る。あれも一世の人豪だ。巳世治(伊東)などは始めから比較せられない。併し陸奥は、人の部下について、その幕僚となるに適した人物で、幕僚に長とした之を統率するには不適當であつた。あの男は、統頭若しその人を得たら、十分才を揮ふけれども、その人を得なければ、不平の親玉になつて、眼下に統頭を踏み落す人物だ。あれが若し大久保(利通)の下に屬したら、十分才を揮ひ得たであらうよ。

あれの死んだ時に、おれの詠んだ哀歌はかうだ。

愚なる女もたけきもののふも

つひにくさむす屍なりけり

桐の葉の一葉散りにし夕より

落るこの葉の數をますらん

今の處で長州出身の人物といつたら、まづ伊藏、井上、山縣だらうよ。おれが長州へ談判に行つた時、井上は顔へ膏藥を貼つて出て來たが、これは反對黨に斬られたのだといふ事だつた。其の膽力に至つては、伊藤などはとても及ばない。伊藤は騒ぎの當時外國へ逃げて行つた程の利口者さ。山縣に至つては、あれは正直一方の男サ。中尾捨吉といふ男があつた、があれは寄傑だよ。陽明派の學問をして、大鹽中齋のひと爲りを慕ひ、平生大に中齋に私淑して居つたが、さうさ、もう廿年になるだらうか、あれがまだ年少氣鋭の時には、屢々おれの處へ議論に來ては困らせた事があつたつけ。その頃あの男は、松男正久や、大井憲太郎や、河野廣中などの連中と一緒に政社を組織して、盛んに時の政府に反對して居たが、それ等の爲めに一時獄屋へ繋かれた事もあつた。その後出獄して暫く何處かの裁判所長を勤めて居るといふことは聞いたが、今はどうしたか知らん。……何、まだ壯健で、近頃廣島で辯護士を始めて、傍ら憲政黨の爲めに奔走して居ると。それは相變らず元氣だなあ。併し原來が廉潔な男



だから、今に依然貧乏であらうよ。

伊東巳代治は利口者サ。おれは、あの親を知つて居るが、何でも長崎の大人(官名)の組下ぐらゐであつたよ。その倅にしては能く出世したものサ。だが、仕方のない事にはまだ巾がない。

利口ばかりでは國は治らない、信玄が生きて居る間は、流石の信長でも給つて居たのに、一朝信玄が死んで勝頼の代になると、ぢきにあの始末サ。併し勝頼は決して馬鹿ではないよ。それに左右には元老も澤山居ただけれど、國は矢ッ張り亡びたよ。巳代治もまだく政治家にはなれないのサ。

江州の塚本定次と云ふ男は、實に珍らしい人物だ。數萬の財産を持つて居りながら自分の身に奉ずるとは極めて薄く、何時も二夕子の羽織と同じ着物で居て、一寸見た處では、只田舎の文盲な親父としか思はれない。始終おれの所へいろくの話聞きに来るが、昨年もやつて来て、「私も近頃圖らず四萬圓はかり積立金ができましたが、折角でけたものですから、何とか有益な事に遣はうと存じますけれど、自分ではどう

もよい判断がつき兼ねますから、態々その御相談に參りました。先づ私の考へる所では、その一半を學校の資本に寄附して、其の一半は番頭等に分配してやる積りです。もとく私の利得は、決して私の力でなく、其の實皆な番頭や、手代等が眞實に働いて呉れました結果ですから、それく其の年功の順序多少に従うて、分けてやるが至當だらうと思ひます」と云つたので、おれもその考への尋常でないのに感心して賛成してやつた。

この男の考への非凡なるとは、決してその時に始まつた事ではない。確か一昨年の事であつた。例の如くやつて来て「私の所有に荒地が五六反御座りますので、平生から何か近邊の貧民のためになるやうにつかひませうと存じて、いろくと考へましたがこの荒地へ櫻、楓等を植ゑ付けました。全體この邊の貧民等は、春が來ても吉野の花見にも行けません、秋が來たとて桐の尾の紅葉を觀られる境界でもなく、年中汗を垂らして苦勞するばかりで、一寸も慰みといふものがありませんから、實は彼等の春の樂みにもと存じまして、櫻を植ゑました譯ですが、今はその櫻も、楓も餘程大きくな



りまして、村中の快樂の場所となりまして、一ツの公園が出来ました。一體人間にはこんな無形な快樂といふものも、是非何かなくてはなりませんから、そこで、斯う云ふ風に考へを起しました譯で、少しばかりの地所を無代で貸してやるよりは、結局この方が餘程のためになりませうと存じます。』と云つた。どうだ、中々面白い考へつきではないか。

曾ておれのために、芭蕉翁に就いてよい解釋を與へてくれたのも矢張この男だ。全體おれは平生から蕉芭と云ふ人はどうしても尋常のものでない。その餘徳が深く人間に入つて居ることは、たゞ發句の高妙なる故のみではあるまい、きつと外に何かその譯があるだらうと思つて居た所が、その塚本と云ふ男の云ふには所謂近江商人なるものは、實に夫の芭蕉の教導訓示によりて出来たものださうな。この事を聞いて、おれは積年の疑團がこゝに始めて氷解して、大いに氣が清々とした。

（參看）「追賛話俳」——俳師松尾芭蕉。其志操、往時の西行法師の亞流なり。其の句作超凡、滿腹の禪味、後世の企て及ばざる處。近江の人某云ふ、「近江の豪商其

の交易賣買法の如き、昔し芭蕉の指示する區劃を遵守して今に變ぜず、近年近江の商人の商法を以て、殆んど英國商人の法ありといふに到る」と、果して知る、翁が凡人にあらざる事を、その前後下津に下河邊長流、釋契仲、賣茶翁深草の里に元政師あり。皆絶倫の才を蘊蓄し、自主の志操、當世に卓絶す。或は歌に隠れ禪に悟入す。超然たる見識、其の奥底を顯さずとかへども、其人羨むべき哉。

又この男と、其弟正之は山林熱心家で、わが縣下の山林のためにといつて、二萬圓ばかりを縣廳に預けて居るそうだ。あれが云ふには、「この二萬圓がなくなる時分には山林も大分繁植して参りませう。だが、私は迎もそれを見ることは出来ませう。併しながら、天下の公益でさへあつたら、たとへ自分が一生の内に見ることが出来ないといつても、その邊は少しも構ひません。私は今から五十年先の仕事をして置く積りです」と云つた。中々大きな考へではないか。斯様な人が、今日の世の中に幾人あらうか。日本人も今少し公共心といふものを養成しなければ、東洋の英國などと氣取つて居た所で、その實はなか／＼見ることは出来まいよ。



大東義徹と云ふ男は、世間で近江西郷などと評判し、又自分でも、さう任じて居るさうだが、なに體の大きい所だけか西郷に似て居るくらゐのものさ。世の中は、皆な天狗ばかりで困るよ。本尊の西郷などは、決してさういふ風に、自から英雄豪傑を氣取る様な、けちな人間ではなかつたよ。手下の人にこそ、彼是小言も云つたが、外の人に何事も知らないくつとばかり云つて、大變謙遜な人であつたよ。大東もそれは黨人仲間こそ、相應の人物でもあらうが、併し西郷とは、迎も比べものにはならな

いよ。

外山正一も學者としては兎に角やり手だよ。何時ぞやあれが文部大臣になつた時におれの處へやつて来て、『今度伊東さんなどから是非やれと云はれるから文部大臣になりました。其の爲め御披露に参りました』と云ふから、おれは『それは目出たい。折角勉強して御やりなさい。併し餘り永いこともあるまいから、其の積りで居るがよい』と云つた。『左様です、私もその覺悟で居ますが、併し任に在る間に、十分やる決心です』と云つたよ。所が果してほんの僅かな間に、元の僧正坊となつてしまつたから、

最初計畫して居た百分一の仕事も出来なかつただらうよ。彼れは、幼少の時からなかなか賢いもので、おれは、彼れに見所があつたから、拔擢して外國へ學問をさせにやつたよ。それで、彼れは流石に永く米國に居て、文明流の學問をしたゞけあつて、決して外形を張るやうな無益なとはしない、あの位の位置に居るのに、内には下女一人に、老僕一人位しか使はないで、極く質素に生活して居るさうだよ。それにしてもあんな小僧が、大臣になるやうになつたのだから、己れも老衰した筈さ。

八百松の婆も非常な遣り手であつたが、松源の婆は、彼れに比べると、今一層の手腕家であつた。昔しは、此種の人間に、餘程傑物があつた。青柳のお神なども矢張り其一人だ。勿論高尚の教育のあらう筈はないが、實地に世間の甘い辛いを嘗め盡して來た丈けあつて、なかく面白所がある。あの婆などが世間に中をきかせた時分には、おれはあれ等の顧問官で、よく其の人物を知つて居るが、彼等が人を鑑識する眼力といひ、其の交際の工合といひ、迎も今の政治家などの及ぶ所でない。昔しおれが田安家へ往來して居た頃に、青柳(料理屋)は、近所だつたからいつも彼處で晝飯を食



つた。ところが、十二月二十九日であつた。例の通り晝仕度に行つた處が、若い者どもは揃ひの半纏で、女中どもと掃除するやら、餅を運ぶやら、所謂越年の準備で、中々の景氣に見えた。晝食の給仕には、いつも必ず御神さんか、娘が出たが、この日は、神さんは多忙であつたものだから、娘が出て来て給仕をした。そこで、おれが娘に『家も中々景氣が宜いと見えるな』といつたら、其言を娘が帳場へいつて傳へたと見えて、暫らくすると神さんが出て来ていろくこ挨拶の末『殿様、只今娘に宅の様子を御話しがあつたさうですが、殿様には、私どもの暮し向は、迎もお解りになりますまい。殿様には、一寸景氣がよいやうに見えませうが、實の處を申せば、只今金といつて一文もありません。其れが爲めに亭主は、折角才覚に出かけて居るので御座います。けれども大晦日のとですから、何處へ參つても、到底間に合ふ氣遣ひはありません。御見かけの處は、ほんの世間に對する體裁を繕ふ義理ばかりでよし金がなくて苦しくても、するだけのとは、致して置かないと、自然と人氣が落ちて參りまして、終には御客さんが、このものは肴までが腐つて居ると思召す様にな

つてしまひまで、全體、人氣の呼吸と申しますものは、中々六ヶしいもので、いかほど心の中では苦しくても、御客様方には勿論、家の内の傭人へでもその奥底を見せるといけなくなります。この苦痛を顔色にも出さず、ぢつと辛抱して居りますると、世の中は不思議なもので、いつか景氣を恢復するものでございます。』と云つたが、その胸にある苦痛を少しも顔色に形はさず、如何にも平氣らしい様子を見て、おれもその時は、ひどく感心した。全體、外交のかけひきといへば、中々六ヶ敷くつて、迎も尋常の人では出来ないやうに思つて居る人もあるが、つまりこの御神さんの呼吸の外に何もあるものでない、たゞ外交ばかりでなく、凡そ人間窮達の情報も、つまりこの呼吸の中に存すると思ふよ。おれは御神さんの話しに感心した餘り、『御前金が入用ならおれがあげやう』と云つた。すると神さんは、大變喜んで『どうか成りますとなら暫く拜借を願ひたい』と云つた。そこで、おれは紙入の底を拂ふて、三十兩抛ふり出して遣つた。さうすると御神さんは『この三十兩は、只今の私には確かに、三百兩の價値がござりまする』といつて、頂いて收めた。その後暫らく經つて、又田安家からの



歸途に、かの青柳に立寄つた處が、此度は眞實に一陽來復で、中々の好成績であつた  
 そこで、神さんもいたく前日の禮を述べて、「春になりましてから、二三回も多人數の  
 送別會などが續きまして、景氣も大に恢復いたし、御蔭で三四百兩も利益を得ました  
 これはまことに難有う御座りました」といつて、前日貸した三十兩の金を返へした。  
 おれはその金を突き戻して、「この金を御前に上げる。實は、この間の御前の話して、  
 おれも大變によい學問をした。御前は、中々感心な奴だ。ちやんと胸の中に孫吳の奧  
 議を諳んじ、人間窮達の大哲理を了解して居るのだ。この金は、斯様な結構な學問を  
 した其の月謝を思うて進上するから、取つて置け」といつて、三十兩を呉れて歸つた  
 ことがあつた。どうだ、有益な話だらうね。

おれも是れまで色々な人と近付きになつたが、新門の辰、藥罐の八、幫間の君太夫  
 八百松の松、松源の婆、かういふ連中はおれの一番の友達になつた。踊りの師匠の花  
 柳なども、其頃知つたのだ。おれの顔も一時はなか／＼賣れたもので、こゝの料理屋  
 あすこのお茶屋と始終出入りをした。或る時おれが地獄屋へはいるのを見たものがあ

るとかで、三條公から忠告を承けたから、おれは平氣で、あれは私の昔からの友達で  
 すといつたら、三條公はびつくりして、幾ら何でも參議の身分でそんな處に出入する  
 のはいけないといはれたけれど、なあに、向ふでは地獄屋をしてるか知らないけれど  
 おれの目には唯だ昔の友達と見えるのだから。

八百松の松などはえらいものであつた。度々おれの家へも來たが、幾ら高貴な人が  
 大勢居る中でも平氣なもので、隣にはどんな人が坐つて居るか、一向氣にも留めぬふ  
 りで話をして居る。松、あぐらでもおかきといふと、へい、御免なさいといふ風で、  
 上を向いて煙草でも吹かして居つたよ。

料理屋について思ひ出したのは、この頃珍しい人に行き會つたことだ。先日奈良原  
 繁の家へ御馳走に呼ばれて行つたら、湖月(料理屋)の亭主だとかいつて、色々立ち働  
 いて周旋するものがある。能く／＼見ると、この男は案外にも、昔しおれに砲術を習  
 つて居る多賀右金次といふ男だ。そこでおれはいきなり、貴様は右金次ではないかと  
 聲をかけた所が、誠に落ちぶれまして面目も御座いませんといふから、何、貴様より



はおれの方が落ちぶれて居る。貴様は自分の腕で飯を食つて居るけれど、おれは漸くお上のお蔭で食つて居る。おれよりも貴様の方がずつとえらいといった。それからいろく昔話などしたが、随分面白いこともあつたよ。

茲におれの感服した人間が三人ある。それは何れも囚徒で、維新の際におれが放免してやつた奴だ。その一人は、馬丁の家の食客をしながら強盗をやるので、江戸で大金を盗み溜めて、それを何處かへ隠して置いては上方へ飛んで行き、上方でもまた盗んだ金を何處かへ隠して置き、一年も経つた頃に江戸へ歸つて前の金を使ひ、それが盡きた頃には、また盗み溜めて隠して置いて、此度は上方へ行つて先きに隠して置いた金を使ふ。而かもそのやり方が實に甘いので、表向は一寸も金のない風をして、まめくしく馬丁の手傳をして居る。その大膽と小心には、おれも感心した。そしてその男白晝堂々と破獄をして、青い衣服を看たまふ、暴れに暴れて上州まで逃げて行つたには、いよく驚いた。今一人は、それも強盗だが、興力や何やの訊問に遇ふて大抵の奴は青くなるのに、この男は平氣で、一々答辯する。そこで、皆のものは多分

冤罪だらうと思つて居たら、豈圖らんや、辯疏が濟んだら、彼奴上衣を脱ぎ捨てながら、傲然胡坐をかいていふには、さあ縛れ、今から落ち延びても仕方がない、こゝで捕へらるゝのも運だらう、これから仔細を白状するといつて、從容として罪に服した。それから、おれは明治になつて、どうせ五十や六十の囚徒を斬つたからとて、盜賊の種が盡きるといふ譯ではないと思つたから、皆一思ひに放免してしまつたが、その時多くの囚徒は安房守様の御蔭で命を拾うたなど、嬉し泣をしたりするのに、この男ばかりは、おれが放免を云ひ渡した時に、へいさうですかといつたきりで、顔色も變へなかつた。又、今一人は、三十歳餘まりの女囚だが、おれはその罪狀を聞かうと思つて、わざく人を拂つて、その女と差向ひになつて訊問した。所が、その女は、此れ迄誰れにも話さなかつたけれど、安房守様だけには、お話しませうと前置をして、さていふには、私の顔の奇麗なのを慕ふてか、多くの浮れ男が寄りついて參るので、その中、金のありさうな奴には、心を許した風を見せ、〇〇の時に〇〇を捻つて之を殺し、金だけ奪ひ取つて素知らぬ顔をして居る。すると、醫師が見ても屍體に傷





がないから何とも致し方がない。この方法で以て、これまでに丁度五人殺しましたと白状した。實に大膽極まるではないか、すべて、こんな奴は、皆生れ附きなので、適宜に教育でもしたなら、それはえらいものになつたのであらうに、惜しいことには卑賤の身分に生れ、生涯衣食に追はれて十分に腕を伸ばすことが出来なかつたのだ。併しそれが爲め國家とか政治とかいふ小理屈を並べながら、大層な悪事をやらなかつたのは、世間の爲めには却つて幸だつたかも知れないよ。兎に角おれも彼等にはかはない。

今いつた牢拂の折に青木彌太郎といふ奴などは、三千五百兩盗んだために石十枚を抱かせられてまだ白状しなかつたといふことを、大層鼻にかけて、おれに、えらいでせうといつたから、おれは、それがえらい所か、けちんぼめ、どうせ盗をする位なら三千や五千の端た金を盗まないで、何故一國の半分だけでも盗まなかつたか。それに僅か石十枚で白状しなかつたと威張るとは貴様も案外つまらない奴だといつたことがある。併し世間にはこんなけちな奴が随分あるよ。

時勢は、人を造るものだ。今日いろくの學問や、智恵のある人だちが、これから種々の困難に出會つて、實際にその學問を試したり、その心膽を錬つたりなどすると將來に起るべき、東洋の大禍亂をも、切り開くだけの人物になれるだらうよ。今日は實に不權衡の時代だから、萬事思ふ通りにならぬのだ。經驗もあり、信用もある人物は年を取らない内に、はや老朽してしまい、若年の敏腕家は、まだ經驗と信用とがないと云ふ風で、當分はどちらも仕様がないうよ。

三

政治家の秘訣は、何もない。只々正心誠意の四字ばかりだ。此の四字に據りて遣りさへすれば縦令如何なる人民でも、之れに心服しないものはない筈だ。又、縦令如何なる無法の國でも、故なく亂暴するものはない筈だ。所で見なさい、今の政治家は、僅か四千萬や、五千萬足らずの人心を收攬することの出来ないのは勿論、何時も列國の爲めに、耻辱を受けて、獨立國の體面をさへ全うすることが出来ないとは、如何に



も齒痒いではないか、つまり彼等は、此の政治家の秘訣を知らないからだ。よし知つて居ても行はないのだから、矢張り知らないのも同じことだ。何事でも凡て知行合一でなければいけないよ。

そこで、先づ内政の事にしろ、畢竟此の秘訣を知らないから、何事でも杓子定規の法律萬能主義でやらうとする。それは理屈は中々つんでも居やうが、どうも法律以外理屈以上に、云ふに云はれぬ一種の呼吸があつて、知らず識らず民心を纏めると云ふ風な妙味がない。徳川氏などは、深く此の邊に意を用ゐたものだ。譬へば、久能山だとか、日光だとかいふものを、世の中の人は、たゞ單に徳川氏の祖廟とばかり思つて居るだらうが、あれは決してさうでない。彼所には、ちやんと信長、秀吉、家康、三人の靈を合祀してあるのだ、一方では天下に嚴命を下して、豊國の廟を毀たしめるかと思へば、他の一方には、又こんなに深く意を用ゐた所がある。これで織田豊臣の遺臣等も、自然に心を徳川氏に寄せて來たものだ、この邊の深味は、迎も當世の政治家には解らなう。

全體、徳川氏の遣り方は、今云つた四字の秘訣を體認して、能く民を親しみ、其の實情に適應する政治を布くに在つたのだ。そして其の重んずる所は、其の人にあるので法律規則などには、餘り重きを置かなかつた。八代將軍に至りて、始めて諸法度の類も出來上つた位だが、是れとても總べて北條時代の式目が土臺になつて居る。それは彼の貞永式目といふものは、深く人心に染み込んで、久しく世に行はれて來たものだから、新に土臺から作りかへるよりは、此の舊慣に依る方が、却つて人心を治め易いといふ深い慮から出たのだ。中々注意したものではないか。

夫れで、此の民を親むについて、民間の實情を探ぐる爲めには、餘程骨を折つたものだ。東照宮の如きも、駿府に隱居せられた後は、只々ちつと城中に引き籠つても居られたかと思ふと、どうして／＼なかく／＼さうでない。常に駿府近傍の庄屋さか、故老とか云ふ人々を集めて、圍碁會といふものを催ほし、輪番に其の人々の家へ碁を打ちに行かれたさうだ。今に静岡近邊の舊家には東照宮が來て碁を打たれた、と云ふ座敷がだん／＼存して居る。なに、ほんとに道樂で碁を打たれるものか、只々かゝる席



上の事として、互に無遠慮に成り、出放題の世間話なども出て来て、果ては賓主相忘れるといふやうな佳境に入ることが、取りも直さず、東照宮の深慮の存する所であつたのさ。

三代將軍の如きも、此の點には深く意を用ゐられた、舊御城内に大玄關の外に、別に一つ小さな玄關があつた。何の爲めの玄關かと思つて、よく調べて見ると、これぞ三代將軍が、市中を微戸せられる時分に入出せられた玄關といふことだ。大玄關から出入すると、色々の面倒があるから是れを避ける爲めに、態々此の玄關を作つて置いて何時も近習三三人を具して、其所から出て市内を歩きまはり、民間の景況を視察せられたことだ。その時分、今の番所々々には壯年血氣の番士共が集まつて、擊劍をするやら、相撲を取るやら、元氣の事ばかりして居たさうだが、將軍には、特に此れが氣に入つて居られたと云ふことだ。

これに付いては某いふ重臣だ、今一寸其人の名を忘れたが、其の人の如きは、或日將軍の御前へ出て、將軍が市内を微行せられるのは如何にも危険だといふことを諫言

したが、併し將軍のことだから、毫もそれを顧み給はなかつた。そこで、其の人も致し方なく、其の儘御前を罷り出でた。然るに、其の夜將軍は、例の通り近習を従へて日本橋邊を微行せられ、此所彼所の模様などを打ち眺めつゝ歩いて居られた、所が向ふから、雲突くばかりの大の男がやつて来て、いきなり將軍に突き當つた。將軍は、あの通りのきかぬ氣のお方であつたから、勃然として直ぐに其の男に組み付いて、取つて投げやうとせられた。けれども其の男大變な腕力家で、却つて將軍を放り投げて一目散に逃げて仕舞つた。

翌日になると、彼の某は再び御前に出て、「只今御近習より承はりますれば、昨夜も亦御微行なされました趣きですが、何ぞ面白いことでもありましたか」と御尋ね申した所が、將軍は「いやまだ世間もなか／＼油斷が出来ぬ哩。昨夜は斯く／＼のことでひどい目に遇つた」と件の顛末を話された。然る處某は何喰はぬ顔して、「それは誠に御危険のことで」と云つたまゝで、御前を罷り出でた。そこで、將軍も扱ては彼奴めがと、思召されたけれども、流石は將軍のことであつたから其の儘お許しになつた



さうだ。どうだ、創業勵治の元氣が、躍然として此の話の内から窺ひ見られるではないか。

其の後、漸く治世になるにつれて、徳川氏も次第に文弱の風に感染して來たが、それでも八代將軍の時代には、まだ鷹林簡易、創業の元氣を認められるやうな話がある。或る時八代將軍が、目黒へ鷹野に行かれた。然るに其の鷹野の最中に、一人の馬子が悠々と馬を引いてその場へ遣つて來た。近習の人々は、之れを見て、馬子の無禮を怒り、ひどく叱責を加へた。處が馬子め、平氣で『なに笠棒め、鷹野がなんだい。』と罵り乍ら行き過ぎやうとした。將軍は、何と思はれたか『誰れかあの馬子を投げて見よ』と言はれたから、近習の人々二三人、馬子を中心に取り圍んで組みついた。所が馬子め頗る剛の者で、却つて近習の人々を取つて投げて、又悠々として行つて仕舞つた。將軍は、此の有様を見て、莞爾として『馬子でも中々侮られないよ。』と一言せられたのみで、何の御尤めもなかつたと云ふことだ。どうだい面白い話だらう。それはまあ閑話休題として置いて、内政のことを今少し話さう。日本國中で、古來

民政の能く行き届いた處は、まづ甲州と、尾州と、小田原との三ヶ所だらうよ。信玄や、信長や、早雲の遺徳は未だこの三ヶ所の人民に慕はれて居るらしい。信長といふ男は、流石に天下に大望を持つて居たゞけあつて、民政の事には、深く意を用ゐて、租税な輕うし、民力を養ひ、大いに武を天下に用うるの實力を蓄へたと見える。今日尾州に行つて、よく吟味して見なさい。當時の善政良法が、今尙ほ歷々として残つて居ることを見出すだらう。

信玄か、たゞの武將でなかつたことは、一たび甲州に行けば直ぐに解る。見なさい、かの地の人は、今でも信玄を神として信仰して居るのだ、これは當時民政がよく行き届いて、人民が心服して居た證據ではないか。その兵法の如きも、規則あり節制ある當今の西洋流と少しも違はない。近頃まで八王子に、信玄當時の槍法が遺つて居て、毎年二度その槍法の訓練をすることになつて居たが、その槍を使ふのを見ると、近頃のやうに、御面御胴といふ風な、個人的勝負ではなくつて、大勢の人が、一様に槍先きを揃へて、えい／＼と聲をかけながら、初めは緩やかに、次第々々に急にな



り、漸く敵に近づくと、一齊に槍先きを揃へて敵陣に突貫するのだ。一寸見た所では甚だ迂濶のやうだつたが、おれは後で西洋の操練を習つたから、始めて此の法の頗る實用に叶つて居ることを知つた。又揃ひの赤具足を其の將士に着せて、敵の目を奪ひ兼ねて味方の士氣を鼓舞したのなどは、大いに今日の西洋風に叶つて居る所がある。之れが實に信玄の遺法であつて、後世井伊家の特色となつたものだ。

早雲と云ふ男も、中々の傑物であつたに相違ない。赤手右拳で以て關八州を横領し、甘く人心を收攬したのは、中々の手腕家だ。當時關八州は、管領の所領であつて、萬事京都風で、小六ヶ敷ことばかりであつた。目度方今流行の繁文縟禮であつたのだ。其處へ、早雲が來て、此の繁分縟禮の弊風を一掃してしまひ、又苛税を免じて、民力の休養を計つた、つまりこれで甘く治めたのだ。徳川時代には、小田原附近から、關八州へかけてが、全國中で一番地租の安い所であつたがこれは全く早雲の餘澤だ。それで、北條氏が亡んだ後に、徳川氏が駿遠參の故土から、この關八州へ轉封させられたのだが、もと／＼租税の安い所であつたから徳川氏の方では、その實、非常の迷惑

であつたのだ。太閤と云ふ男は、中々の狡猾者で、よくこの事情を承知して居りながら、所謂その名を與へて、其の實を奪ふの政策に出でたのだ。併し、其處は流石に徳川氏だ。少しも早雲の遺法を頼さず、從來の爲來りに従つて、これを治めたのである。併し如何に治氏の術を呑み込んで居ても、今も昔も人間萬事金といふ者が其土臺であるから、若し之れが無かつた日には、如何なる大政治家が出て、到底其の手腕を施すことは出来ない。見なさい、如何に仲のよい夫婦でも、金が無くなつて、家政が左り前になると、犬も喰はない喧嘩を遣るではないか。國家の事だつて、夫れに異ることは無い。財政が困難になると、議論ばかり八釜しくなつて、何の仕事も出来ない。其處へ附け込んで、種々の魔がさすものだ。

所でおれも此の財政の事では、是れ迄心配したの、しないの、と云ふ段ではないよ。まゝお聴き幕府の末年は、何のことはない、まるで今の朝鮮さ、金はない、力は弱い、そして人心は離反して居る、其隙を見込んで外國の奴等が附け込んで來るといふ風で中にもオロシヤは、前々から錢を貸さう貸さうと云つて、己れが局に立つた時にも、



函館に居た公使が、實に五月蠅く言つて來た、尤も此時己れが局に立つて居たのも、決して自分から進んでやつたのではない、幕府の内輪は傾いて來る。官軍は攻めて來る、さあ其の用意をしなければならぬと言つて、皆が箱根邊りまで詰めかけて往くと、官軍が最早や眼の前まで來て居たと云ふ騒ぎで、上も下も狼狽してしまつた。そんな間際であるから、誰れも好んで局に當る人はない、そこで止むなく己れが出ると例のオロシヤなどが、一時の間に合はせの爲めに、是非金を貸さうから、それで存分戦争をして内國の始末をお付けなさい、その間は、われ／＼も黙つて、函館で見て居ませうといつて、頻りに迫つて來る。己れも其の時、戦争はしたし、金はないし、力は弱いし、實に途方に暮れてしまつて、此の難局を所置するよりは、寧ろ打死でもする方が幾ら易いか知れないと思つた位であつたけれど、併しながら一時凌ぎに外國から金を借りるといふとは、たとへ死んでも遣るまいと決心した。と云ふものは、まあ嫌なのさ、不面目なのは、耐へるにした處で、借金のために、抵當を外國人に取られるのが、實に堪らない、よし又それをも耐へるとした處で、借金を返へす見込がな

いから仕方がない、これが一家や、一個人のとなら、どうなつても大したことはないが、何にしる一國のさだから、もし一步誤れば、何千萬人といふものが、子々孫々までも大變な事になつてしまふのだ。それで己れが局に立つて居る間は、手の届く限りは何處までも借金政略を拒み通した。併し其の後慶喜様の時になつては、到底幕府も往生して、遙々佛蘭西まで金借りに行くことになつた。使者は、あの向山黄村で、隨行員は、田邊などの連中であつた。處が却つて佛蘭西自身が彼のやうな革命騒ぎになつたものだから、他國へ金を貸すどころの話でない。そこで、向山等は仕方が無いから、和蘭まで廻はつて來たが、さてそれから日本へ歸る旅費がない、それは最初向山等は、佛蘭西へ着きさへすれば、金は確かに借られるものと、餘り大丈夫に當て込んだから、行く時に歸國の旅費を持たなかつたのだ。併し、まあ、やつとのとで、和蘭で旅費だけを工面して、漸やく歸つたが、随分つらがつたであらうよ。そこで御覽よ、朝鮮でも支那でも、今が丁度我邦幕末の通りに、貧乏で弱り切つて、



金を外國から借りると云ふ段になつたのだが、さあ是れがらがほんとうに禍が襲つて来るのだ。今日の日本は、支那や朝鮮とは、固より少し場合が違ふけれど、矢張り金には愈々切迫して来る。而かも軍備はどしどしやらなければならぬので、遂に外國へまで借金をするやうになつたが、己れは之れを三十年も前からちやんと見て居て、當路の人達には豫ねて注意して置いたよ。大藏も今度は、松田の役目だが、彼れも始めてのとだから中々困難だらう。罷り違へば、飛んだことになるからね。その局に當つたものでなければ、到底その苦心は解らない。

それから軍備擴張ののだが、それは固より出来るのなら、擴張もしなければならぬまいが、併し方外な擴張をして貰つては人民が困るよ。能く考へて御覽、軍艦が一才一哩歩くと、もうざつと千兩の金がかゝるのだからなあ。日本でも人民が裕福になりさへすれば、一外國に就いて二艘位はよいが今の様な貧乏の時は、一外國一艘位の割合で澤山だよ。軍艦といふものは、縦令運轉せずに港へ繋いで置いても、只だ捨て置く譯には往かないから、相應の金がかゝるよ。それに艦數を増せば、それに乗せ

る人間も増すし、少しの金では仲々間に合ひはしないよ。一個人にしても其の通りだ紳士紳商とか、學者政治家など、威張つて、車の二臺や三臺も置いて御覽、随つて挽子も二三人は雇はなければならぬまい、さうすると、迎も五十圓や、百圓の收入では支へるとは出来まい、そんな仕方のないと無理にして居ると、遂には、その紳士や、學者や、政治家などが、自身で一臺の車を引張つて歩かなければならぬやうになる。丁度それと同じだよ。英國などでも成るべく始末をして、軍艦の多い外國の方へは、善い軍艦を向け、少ない外國へは、悪い軍艦を向けて置くよ。大抵皆さう云ふ風にすゝめるのさ。己れは嘗て海軍のとを書いて御上へあげて置いたが、此れに就いて面白い警へ話がある。序に御聞き、昔し天龍川の渡しは、平生ならば、東西の兩岸に繋いで在る四五艘つつの渡船で、十分事が足つて居たが、もし紀州様のやうな大諸侯の御通行となると、是れだけでは迎も足りないから、川上川下の船を總上げにして通行せられた。今の日本だつて左様だよ、すわ鎌倉と云ふ場合に、國民全體が一生懸命になりさへすれば、平生軍艦の數は少いといつても、如何なる強國だつて、毫も恐れるに足ら



ない。併し今一步進んで、それより二番早いのは、今の開けた世の中だから、紀州様のやうな大名に、東海道を通らせない様な工夫さへすれば、それが一番よいのだ。それをやるには、外交の衝に當つて居る人が、素敵な敏腕家であるか、さもなければ、無類飛切の臆病者で居さへすれば、何のともない話だ。何にしる廿七八年の役で疲れて居る日本に、今又急に莫大の金を出させずとも善いではないか。

何を云つたつて、先づ金を作つて、國本を培養するところが今日の急務だ。そこで、彼の一時金貨本位がどうだの、銀貨本位がどうだの、やれ單本位、複本位杯と、随分やましい議論もあつたが、詰る所は、何とかして金を作りたいと云ふ精神から來たのだ全體、我國で金貨の始まりは、足利時代だが、夫の義滿と云ふ英主と、細川頼之と云ふ豪傑と、兩人でうまく明を抱き込んで、表面は日本國王といふ封冊を受けておいてさうして金貨の右手を取り込んだのだ。後世義滿を彼是評する奴等は、必竟讀書眼の紙背に徹せない野暮の骨頂さ。此の時分取り込んで來た金と、太閤が朝鮮征伐の時取り込んだ金と、此の二つが是迄日本金貨の本になつて居たものだ。全體、日本の貨幣

といふものに對して、支那の功のあつたとは非常なもので、昔から向ふの貨幣を吸收して、日本の流通を助けやうとといくら骨折つたか知れない、遣唐使を出すやら、唐の坊主を招聘するやら、皆此の間の消息を窺ふに足るのだは、甚しき一時永樂錢幾何と云つて、明の永樂錢が武士の家祿や物價の標準となつて居たことがあつた程である。此の時分は、金貨本位ではなく、永樂錢本位と云つても宜しい程だ。鎌倉などでも常に支那との關係を親密にして、向ふの制度文物を輸入するに骨折つたものだ。譬へば實朝が宋船を造らせたと云ふとがある。すれば當時向ふの船大工までが、日本へ來て居たところが解る。それから今でも、地中から金や銀を掘り出すところが澤山あるが、昔しは皆金や銀は地中に貯蓄したものだ。是れは今日でも支那に於て見る所の金錢貯蓄法で、昔は經濟上とは、皆支那が御師匠様であつたところが解る。

徳川の末から、經濟のことについては、死ぬる程苦しい目に遇つたので、随分經驗を積んで、今ではこればかりはおれの得意だ。併しおれは經濟は大變長くかゝるよ、全體田地から上る小作米は、毎年何俵といふ風に貯蓄して置かなくては可けないよ。



先刻も東北の人が来て、米が高くて困るから外國米の安いのを買つて食つて居るといつたが、實に氣のきかない話ではないか、瑞穂國ともいつて、これ程澤山米の出来る國に生れながら、外國米を食ふなどは以ての外の事だ。おれが世話をして居る家に二三十町ばかり田地を持つてゐるがあるが、おれは小作米の中から毎年五十俵づつ貯蓄させるのだ。それには乾しをよくしなければならぬから、升目は非常に減るし倉へ入れて置く間には鼠も喰ふし、随分面當臭い上に、一寸考へると大層損なやうだから、家の人はこんな舊弊な事は止さうといふけれども、おれが決して承知しないのだ既に田地を持つ以上はまさかの場合には大勢の小作人にだつて、唯の五升づつでも施してやらなければならぬからの。今日紳商などいふ奴は、株券とか公債とか、紙幣とかいつて紙切ればかり持つて威張つて居るのだ。昔し徳川では、家臣に黄金二三千兩貯へさせて、これだけではどうしても遣はせなかつたものだ。それを一時黄金の價が馬鹿に騰貴した折に、或る家では賣り拂つてしまつて、札に代へて同じく二三千兩ぐらゐ貯へて置いたとがある。それで大層儲かつたなどいつて得意がつて居たが、實

に始末にならない話サ。おれは安倍川の先の方に山林を一つ持つて居るが、それも求めて買ひ入れた譯ではなくて、止むなく手に入れたのだ。おれは未だ行て見もしないで、近傍の人に一切任せてあるのだが、もう二十何年も経つので、木も随分大きくなつたさうだ。すると近傍の人が皆大切にしてくれて、もし濫伐でもするものがあつたら、それはひどい目にあはされるさういふことだ。その傍に小さい家が一軒立てゝあるので、おれは此頃、學校にでも使つてくれと云つてやつて置いた。實はこの山林でおれは山の處置法を學んだのだ。

儉約々と八釜數いふことはおれは大嫌ひだ。幕府の末でも、あまり儉約々といふものだから、大奥では毎日箒が折れる、茶碗がわれる、蒲團が破れる、それは實に亂暴ばかりして係りの役人に當つた。何時か細工物をなさるといふので、役人に切れの注文があつたら、役人が寄せ切れか何かを買つて上げたさうだ。すると皆が怒つて、こんな粗末なものを持て來るとは人を馬鹿にして居る。こんなものが何になるかといつて、大騒ぎになつた。そこで役人は眞青な顔をして、おれの處へ相談に來たから、



おれは酷く叱つて、直ぐ呉服屋に紅白の縮緬を十匹ほど持て来させておれが自分に之を抱へて大奥へ行つて、あなた方には實にお氣の毒です。小役人といふものは仕方がありません。あれは今日限り免職に致しますから、どうぞ御勘辨なさつて之をお用ゐ下さい。お倉にはまだ何反でもありますから、御入用の時は何時でもさう仰せて下さい。あなた方のお世話は、今日から私が致しますといつた。所がみんな顔を見合せて、こんな結構なものはない。またこんなに澤山は入りませぬ。役人を免職するのもどうか止して下さいと、今度は向ふから頼んで出た。それからといふものは、亂暴がふつと止んで、大層儉約になつたよ。それでおれは度々大奥へ行つて、あなた方は何故そんな吝な事をなさいますか、私は御馳走が戴きたう御座います、といふ風におれの方から催促するのだ。天祥院さまもこの頃は一つ飯臺で大勢の女中と一緒に上がんなさつて居たが、後にはおれなども同じ御部屋で御馳走になることもあつた。する酒でも三升徳利か何かに入れて、あゝいふ風な處へ置いて、少しづつ出してお飲みになるから、それ何といふ吝臭いとです、三つ割でもお取寄せなさるがよろしい。

といつて、おれが自分に立つて行つて誂へるのサ。さうすると、お附きのものは、勝さま氣が大きいといつて驚くし天祥院さまでも、矢張り三升徳利の方が甘いとい仰せられたさうだ。それからは、お菓子などでも箱を一々あけて紙に包んで天井へ吊るして置くといふやうな風に、萬事儉約主義になつて、大奥が六かしいなどいふことは決してなくなつたよ。

洗足村の別荘は津田が勧めたから、二百五十兩か幾らかで、安かつたから言ひ値のまま買求めて、そのまゝ元の持主を住ませて留守番をさせてあるのだ。持主はそれ自分の顔も立つし、臨時の収入もあつたので、大層喜んで大切に手入れをして呉れるよ。おれはまだ一度も行ては見ないが、だん／＼四方の土地を賣り込まれて、今では随分大きい屋敷になつて居る筈だ。門も拵へないで置いたら、或る人がいろ／＼周旋して呉れて、此頃は家も頗る立派になつて、景色はよし、空氣も清潔だといふことだ。この頃は家敷へ百合と馬鈴薯を植ゑさせて、萬一の時の用意に、その收穫したのを丁寧に貯蓄させて居るのだ。



おれの家へ一圓二圓の金を貰ひに来るものは、昔から今に毎日絶えないが、その来るものは大抵男だ。女は餘程辛棒づよいと見えて、なか／＼来ない。静岡で多くの家の始末を付けてやる折におれは、亭主一人ではいけないからといって、何時も細君二人を召し寄せた。世間の奴は、勝は女好きだなど、笑つたが、併し細君の前で家の仕舞方を話して置かないと、容易に行はれないのだ。そこになると女といふものは實に守りの固いものだからね。

子供を教育するには、餘程氣を付けないといかん。餘り學問々々といつて居ると、口ばかり達者になつてぢきに親爺をやりこめる様になるよ。今の若い連中にはおれは迎も叶はない。併しさういふ息子のある家の庫には遠からず蜘蛛が巢を張るよ。これは一家の事ばかりではない、一國も亦その通りで、人民が理窟ばかりいつて居つては、おつつけ貧乏してしまふだらう。日本の只今不景氣なもの、別に怪むことはないのだ。兎に角、經濟の事は經濟學者には分らない、それは理窟一方から見故だ。世の中はそう理窟通り行くものではない、人氣といふものがあつて、何事も勢ひだからね。

世間では不景氣だなど、嘆じて居るが、これは上に立つ人の心掛け一つで随分救済の方法もあるのだ。おれが江戸城引渡し後の始末を附けた時は、なか／＼今日位のことではなかつた。何時かも談した通り、江戸は大阪などは違つて、その繁昌は何も商業が盛んだとか、物産が豊かだとかいふのではなくて、たゞ諸大名や旗本が大勢住んで居たからだ。それ故に幕府が一朝瓦解すれば江戸は忽ち衰微して、百萬の人民は明日から喰ふものがないといふ騒ぎだ。併し幸に遷都の議も行はれて、土地も餘り衰微せず、横濱も開港場になつたから、其處へ移つて商賣を始めるものも出来、どうかかうか餓死は免がれたが、しかしその當時はおれも随分困つたよ。その中でも殊更に困つたのは、所謂ならずもの、連中で、彼等は窮すれば、何な事でも遣りかねないのだから早く何とかしてやらなくてはいけない。そこでおれは兼ねてこの社會の親分を調べて置いたから自分でそれを尋ねて行つて、子分を動かさない様に頼み込んだ。然諾を重んずる點においては、流石にあの社會はえらいもので、宜しい受合ましたといつたら、それは最早大丈夫のものだ。併し幾らならずものだといつても、食はない



では居られぬから、それ／＼手當の金は上からくれて遣つたのだ、それから待合とか料理屋とか、踊りの師匠とか、三味線の教師とか、一番世間の景氣に關係する所へはまたそれ／＼金を呉れて、今日に困るといふことのない様にしてやつた。かういふ風にして、兎に角世間を不景氣に陥らせないやうに防いで、さて一方では銘々相當な職業にありつかせる様に奔走して遣つたから、江戸も衰へる所ではない、段々に繁昌して來たのだ。その骨折といふものは、とても一通りの事ではなかつた。例へば貧乏人に金を呉れてやるのでも、下手をするに却つて弊害を増すばかりだから、一寸人の氣が附かないやうな風に甘く呉れるのだ。その呼吸はなかく／＼六ヶしいが、まあ旗本のお歴々が零落して古道具屋でも始めて居るに、夜分などに知らないふりで其れを冷やかしに行つて、一品か二品か言ひ値で高く買つてやるといふ工合だ。そうするに、この人は自然商賣に面白味が出来て何時となく立派な商人になるのだ。金もかういふ風に甘く遣へばよい。おれは經濟法はまあこんな有様だ。おれは經濟學も何もやらないけれど、實地經驗の上こんな法を發明したのだ。

政府が財政困難で苦心するのは、當然の事さ。物價が騰貴して、白米は一圓で五升より多くは呉れず。澤庵一本が五六錢もする時には、僅が一軒の家を維持するにも、なかく／＼困難ではないか、然るや況んや一國を治めやういふのものを、困難は固より覺悟の前でなくてはならぬ。丁度維新の始であつたが、萬事改革の際として、財政の如きも非常な困難を極めた。中にも一番その處置に憂慮したのは、彼の舊諸大名が藩政の彌縫策として質銀を發行したのが、海外にも流れ出で居つたものだから、此際横濱居留の外國人は、各その公使に依つて、公然と引換を我が當局者に迫つた事だ。流石英斷明識の大久保内務卿も、その引換金額の多寡が分らないのみならず、當時國庫の準備金も僅少であつたから、これには少々當惑して、遂に伊知地幸介を立會人として、おれの處へ相談に來た。その時、おれは禪宗坊主の一棒に擬して『皆引換へろ』と一喝した。所が流石は大久保だ。大に覺る所があつたと見えて、斷然引換執行の旨を、各國公使に通知したが、その額は案外にも少なく、僅かに數十萬圓に過ぎなかつたさうだ。畢竟、おれは如何に諸大名が質銀をしても、大抵高が知れて居ると考へた



から、皆引換へるといつたのさ。なに、熟考の上で決行すれば、遣れない事は天下にないサ。

天下の富を以てして、天下の經濟に困るといふ理窟は無い筈だ。古への英雄は、皆な經濟の爲に苦心したヨ。織田信長は、經濟上の着眼が周密であつたから、六雄八將に頭となり得たのサ。武田信玄も甲州の妙金を密かに掘り出して、いろ／＼の經濟制度を立てた。また南朝の正統も、北朝の細川頼之の經濟の爲めに倒れた。あの芭蕉の如きも、非常の經濟家だつたよ、近江商人は、皆芭蕉の遺法に則つてやるのサ。

一番感心するのは北條氏の政治だ、元寇が三年續いても、軍事公債は募らず、總理大臣自から奔走するとはなく、九州の探題に防禦させて置いて、それで綽々として餘裕があるのだから。又承久の亂の時には、泰時が單騎西に馳せ向へば、行くところ日で十萬騎が集まつた。これは、當時の兵站や募兵の事は、羨ましい程整つて居たらしい。これは平生經濟の事に注意して居たからの事サ。陪臣であつて九代も續ぎ、而かも國富み、民服したのは、尤もの次第だ。北條氏の榮えたのは、つまり儉の爲で、その亡

びたのは、奢の爲だよ。

北條氏の佛法に歸依したのを見て、單に禪に凝つたと思ふのは間違ひだよ。これもその大目的は經濟の爲めサ。當時宋が亡んで、元が起るときだつたから、北條氏は宋の明僧智識を多く招いて五山を開き、盛に佛法を信じた。そこでかの『電光影裏截春風』の無覺禪師を始めとして、宋の人民が引きもきらず、續々と日本へ遣つて來るにつれて、錢の輸入は實に驚く程であつた。この事は、宋元通寶の我國に存することが現に夥しいのを見ても分る。つまり佛教を信じたのも、經濟に利用する爲さ。

併し、利用といつても、眞正の信仰がなくては、宗教の利用は出來ないよ。北條氏の憂ふる所は、まづ天下の子民といふとばかりだつた。それ故に、梶尾の明慧が、あるとき、泰時に向つて、北條氏が帝室に對する處行につきて忠告した際にも、泰時は、如何にも恐れ多いことだけれども、民百姓の事を思ふに、止むなく斯くぞざるを得ないと、先父も常々申されたと答へたさうだ。その決心は、實に驚服すべしだ。おれも幕末の時に、果して北條氏の決心を倣ひ得るか得ないかと、自から顧みて考へ



たら、とても自分は做ひ得ないと悟つたよ。

北條氏は、この通り善良なる政治家であつたけれども、何れも無學文盲で、後醍醐天皇の勅文をさへ讀むことが出来なかつた。併し、實際の手腕は、あの通りサ。おれは學者が役に立たないといふとを、維新前からよく、實驗したよ。學者の學問は、容易だけれども、おれ等がやる無學の學問は、實に六つかしい。

北條時代には、宋元通寶を用ひ、足利時代には、永樂通寶を用ひて、知行高までを永樂錢で算用する程だつた。黄金の輸入は、足利時代が最も盛で、泉州境浦は、當時貿易の中心であつた。即ち天下の富はこゝにあつたのだ。信長が上國の形勢を察する爲に、京都へ行つた時に、經ちに道を轉じて堺に立寄つたが、これは堺の富に目をつけただからだ。その後、秀吉に至りては、堺の富豪を大坂に移して、その金を大坂城へ收めたが、大坂城に澤山の金があつたことは、秀吉が諸將に頒つて賞金の高でも知れる。昔しの日本は、豪族の力で維持せられて居たのだ。それは、歴史を讀むと直ぐ分るが、國家の爲に骨を折つて戦などした人は、皆この種族だよ。あの畠山重忠の如き

も、秩父の庄司だ。豪族割據などいつて、恐れるものもあるけれど、決して恐るべきものでない、舊幕の頃にも、おれは豪族保護の議論を提出したことかあつたよ。外國へ對する時などには、なか／＼必要な勢力になるものだよ。今頃でも地方からこんな種類の人があると、おれはよく教へて歸すが、併し、今は眞は豪族といはれる程の人は少ないよ。まあ東奥の本間ぐらゐのものだらうよ。

おれは是迄随分外交の難局に當つたが、併し幸ひ一度も失敗はしなかつたよ。外交に就いては一つの秘訣があるのだ。

心は明鏡止水の如し、といふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にもこの極意を、應用して、少しも誤らなかつた。かういふ風に應接して、かういふ風に切り抜けるなど、豫め見込を立て、置くのが、世間の風だけれども、これが一番わるいよ。おれなどは、何にも考へたり目論見たりすることはせぬ。たゞ／＼一分の思慮を捨ててしまつて、妄想や雅念が、靈智を曇らすものないやうにしておくばかりだ。即ち所謂明鏡止水のやうに、心を磨き澄ましておくばかりだ。かうして置くと、機に臨み、



變に應じて事に處する方策の浮び出ること、恰も影の形に従ひ、響の聲に應ずるが如くなるものだ。それだから、外交に臨んで、他人の意見を聞くなどは、たゞく迷ひの種になる計りだ。甲の人の説を聞くと、それも暴すやうに思はれ、また乙の人の説を聞くと、それも暴すやうに思はれ。かういふ風になつて、遂には自分の定見がなくなつてしまふ。畢竟、自分の意見があればこそ、自分の腕を運用して力があるが、人の智慧で働かうとすれば、喰ひ違の出来るのは當り前サ。

外交の極意は、誠心正意にあるのだ。胡麻化などをやりかけると、却つて向ふから、こちらの弱點を見抜かれるものだ。維新前に岩瀬、川淡の諸氏が、米國と條約を結ぶ時などは、五州の形勢が、諸氏の胸中によく別つて居たといふ譯ではなく、ただ知つた事を知つたとして、知らぬ事を知らぬとし、誠心正意で以て、國家の爲に譲られないことは一步も譲らず、折れ合ふべきことは、成るべく圓滑に折れ合つたものだから、米國公使もつまり、その誠意に感じて、後には向ふから氣の毒になり、相欺くに忍びないやうになつたのサ。

維新前のある年に、幕府が海軍制度を定める序に、制服をも定めやうといふ議が出た。おれは兵式さへ知らぬ中から、制服などは、まだ不要だとは思つたけれども、おれの上には上役もあつて、さなきだにおれを嫌つて居る處だから、おれも強ひて反對せず、ともかくも海軍總裁や軍艦奉行などと共に、その頃來て居た米國のアドミラルキツペルに、制服のことを相談に行つた。このキツペルは、英國海軍の中でも、なかなか出来る男で、顔付きから、話し合ひまで、頗るやかましい男だつたが、まづわれれくに向つて、日本海のことを種々聞き始めた。しかし、こちらには、一人も完全に答への出来るものがなくて、上役の人も、頗る窮した様子だつたから、おれも見兼ねて問に應じて進んで答をして、やうやく日本人の顔を立て、やつた。併し、之が爲に彼等に輕侮せられて、いよく制服のことを談すに、内海のことさへ知らぬ人の多い貴國の海軍に、制服を定めて何にするかと、一本やられて、制服のことは、一まづ廢止になつた。

その時におれは、キツペル等の高慢が氣に喰はなかつたから、一つ敵を取つてくれや



うと思つて、突然彼に向ひ、貴國の武鑑を見るに、アドミラルが八十人もあるが、あれは實際かと尋ねたら、彼は得意になつて、實際だと答へた。そこで、おれは笑ひながら、その八十人は、何れも年功で陞進せられた御老人たちで、實地に軍艦を指揮し得られるのではあるまい。實地軍艦を指揮し得られるのは、何人あるか、と推しかへして尋ねたら、彼もまさか八十人揃つて指揮し得るともいひかねて、いや、その段に至つては、拙者と今一人とあるばかりだと答へた。厳しく威しつけられたり、馬鹿にせられたりなどする中に立つて、時々力味を見せるのも、中々苦しかつたよ。この制服の事を始めとして、海軍の事は、何もかも外國人が相手だから、おれもこの頃は、随分苦心したよ。何年だつたか、幕府に伊豆の下田と相摸の觀音崎と、その外二ヶ所ばかりへ、燈明臺を設けやうといふ議があつた、幕府は役人を英、米、佛三國の軍艦へ派遣して、この事に關する相談をさせやうとしたけれども、役人共が、饗應の費用を吝みなどして、三國の軍人をうまく待遇せぬから、彼等も不平で、カブテンは一人も相談に來ない。役人も餘儀なく歸つて來たが、また、他の一人を派遣しても

同様であつた。そこで、幕府にも協議の上、とうとうおれを出すことになつて、夜中に使者を、おれの宿へおこして、この談判を命ぜられた。おれは直ぐに出て行つて、まづ費用を少しも惜まず、第一等の御馳走を出し、その上に、自分はわざ／＼彼等の船へ挨拶に行つたものだから、彼等も頗る満足して、早速おれの船へ來て答禮をしたそれから、約束通り彼等とおれの船に會して、燈臺設置の商議を遂げたが、さて、茲に困つたのは、彼等がその夜、おれの船へ泊るといふのに、三人の處へ、上等の寢室が、二つより無かつた一條だ。當時英國のカブテンは、テシピヨルドとかいつて、年は若い、セバズトホルの戦に功があつたから、この身分になつたといふ人だ。米國のはコルドヅバラといつて、六十餘りの老入で、佛國のも之と同じ年輩の某だつた。さて、前にいつた通り上等の寢室は、僅に二つで、其の他は、下士官の寢るべき階下の室ばかりだから、おれが若し飽くまで威厳を保つて、上等室に寢るとすれば、三人の中の一人は、是非共下士の室に寢させねばならぬ。米國の三佛國のとは老人で英國のが、若いからといつても、彼も英國政府から、わざ／＼東洋に派遣せられて、



とにかくに英國を代表して居る人だから、他の老人たちと優劣をつける譯には行かない。且つは不公平な事でもすると、彼等の感情を害して、この商議が破れるかも知れないものだから、おれも斷然決心して、三人の者に向ひ、拙者は腹藏なく申上げるが、實はこの船の寢室、かくくの次第なれども、君等の中一人を下士の室に導くといふことも出来ぬにより、主人たる拙者は、下士官室に寝るゆゑ、賓客たる君等は、上室二つの中に寝られよといつたら、彼等もおれに腹藏のないのを感じて、その御心配には及ばぬものといつて、おれの厚意を謝した。これで燈臺に關する商議も濟んだが、當時の英國公使パークスも、此始末を聞いて、極て満足に思つたか、其後は、何事もおれを指名して、談判する様になつた。此時分の外交についての苦心は、平生とは随分違つたものサ。

今日外交の方針だとか聞とかいつて、騒いで居るけれども、全體、何をしるのかおれには分らない。飯の上の蠅を逐ふやうな事ばかりやるのに、方針も何も入るものか、世間の人も人だ、西洋に行つて少しばかり洋書が讀め、英語で談判でも出来れば

早今第一の外交家と仰いで居る。上も下も似たり寄ツたりのものサ。かういふ風では矢張り幕府の末路と同じやうになるかも知れないから、しつかりやつて貰ひたいものだ。おれなどは、昔からずるい奴だによつて、この六疊の室に寝てばかり居るけれども……

前にもいつた通り、國民が今少し根氣強くならなくつては、とても大事業は出来ないよ。隣の奥さんをいぢめる位を、外交の上乗と心得るやうでは困るよ。今少し遠大に、而して沈着に願ひたいものだ。なに事も根氣が本だ、今の人は牛肉だとか、滋養品だとか騒ぐ癖に、根氣は却つて弱いが妙だ。人間の體は、憲法政治ではいけない。睡眠時間が何時間で、働く時間が何時間、食物は朝は何、晩は何と、さう法律づくめにやられては體も困るワイ。人間は活物だから、氣を養ふのが第一だ。氣さへ餓えなければ、食物などはなんでも構はないよ。今時の人にはこの邊の工夫が必要だ。

要するに、外交上の事は、随分困難ではあるが、なに我れに一片の至誠と、斷乎



たる氣骨さへあるなら、國威を宣揚することも決して六ヶしくは無い。夫れを、この頃の人達は、公法學杯を拵ね操つて、朝鮮とか、支那とか、オロシヤとか、英國とか云つて、之れを各別に見て、其の貧富強弱に因つて、種々手加減をするから、遣り損ないが多いばかりではない、經綸も亦極めて小さくなるのだ。それだから、百年の長計など云つても、迎も駄目だ、彼の人達のする仕事は、十年は愚か、たつた一年先きのことさへも、見透しが付かないではないか、おれなどは、貧富強弱に因つて、國々を別々に見るといふことはしないで、公平無私の眼を以て、世界の太勢上から觀察を下して、其の映つて来る儘に之れを斷ずるのだ。それだから、今の外交家のする仕事は、己れの目には、丸で小人島の豆人間が動いて居るやうに見えるのだ。

そこで、さう云ふ小さい量見であるから、やれ外交が面倒だとか、これ程困難な仕事はないさかいつて、箸の上げ下げにまで泣面をするが、己れには一切この人達の氣が知れない。まあ聞きなさい、御維新前には斯う云ふことがあつたよ。幕府から回陽丸と云ふ軍艦を、和蘭に注文した時に、榎本や赤松などを、海軍傳習生として、和蘭に

派遣したよ。處が丁度それが出來上つて、愈々日本へ回航して来る時分には、此の傳習生等も、少しは海軍の様子が解つて來たものだから、自分で回陽を乗り回はして、日本へ歸つて來た。さあ、此時のことだが、回陽には、幕府から雇入れた和蘭の海軍士官十三名といふものが、日本の海軍御備教師として便乗して來たのだ。處が、これが圖らずも外交上の一悶着の種となつたのだ。それを何故と云ふに此れより先き、英吉利の海軍士官を、日本の御備教師として、兼ねて頼んで置いたので、和蘭の士官の方が、まだく到着しないずっと以前に、早や日本へ來て居たのだ。そこへ重ねて和蘭からも此度備ひ入れたと云ふのだから、和蘭の士官も、英吉利の士官も、双方ながら大怒りに怒つたのさ。まづ、和蘭の海軍士官は、斯ういふことを云つて怒り出した。『全體我々は、和蘭國王からの勅命を以て、幕府に備はれて來たのだ。その備はれて來るのにも、無條件ではない。日本の海軍を、我々和蘭士官の一手で、教育して貰ひたいと云ふ御申出によつて來たものである。それを何ぞや、われ／＼を差し置いて英吉利からも教師を頼むなどは、實に以ての外の事である。』と云ふ。それから又英



吉利の方で見ると、『全體幕府は、我々英吉利海軍士官に、日本の海軍を一手に教育して呉れとあるからして、遙々此の極東までやつて来たものだ。然るに、今更無斷で和蘭の士官を備ひ入れ、而かも其れに、海軍教育の全部を一任するなど云ふ約束をするは、われ々の顔へ泥を塗るものだ。かうなつた上は、我々に對してお結びになつた約束は、何うせられるお考であるかと。』理窟をいふ。さう大變なことが持ち上つたと云ふもので、幕府の外國奉行達は、彼の三國干渉當時の伊藤さんや、陸奥さんと同じく、大狼狽に狼狽へて、やれ今日も相談で御座る、やれ又明日も相談で御座ると、毎日々々相談ばかりに日を暮したけれども、どうして始末を付けて善いやら、さんと纏まりが付かなかつた。そこで、奉行達から、己れの處へ此の始末を着けて呉れと頼みに来た。己れは、此の時分には、最早や外國語も使つて居るし、外國人にも幾らか名前が知れて居るし、外國の事情にも相應には通じて居たから、それで是非に御頼み申すと泣き付いて来たのだ。それで、己れは直ぐに、外國奉行等が額を集めての相談最中の席へ罷り出て、皆様方に於て、此度の一件の善後策を、勝に御頼みなさる

と云ふ御事ならば、私は豫め一應申上げておかなければならぬことが御座ります。それは、別儀ではない。若し此の事件に關する一切の全權を私に御任せに相成らば、私は萬御事引き請け申して、幕府には少しも御迷惑を相かけない様御取り計らい致しませうが、併しながら左様でなくて、たゞ一部分のみを御任せになつて、談判の進行中に、私しを制肘せられるやうなとならば、私は眞平御免を蒙ります。』と、斯う申出たさうした處が奉行達も此際困り切つて居る最中だつたから、何條異存を申すべき、全權を任せて勝さんに御頼み申します。』と云つたから、それではと、己れは直ちに回陽丸へ舟を漕ぎつけて、まづ和蘭の方から談判に着手した。和蘭公使にも無論立會はせておいて、さて、おれは、『幕府は色々の入り組んだ事情が御座いまして、折角皆様が萬里の波濤を破つて、遙々此處まで来て下さいましたけれども、到底今の處では、此の折り重つて居る事情の爲めに、皆様を御頼み申して置く譯には参りません。其の代りに、皆様方の約束の俸酬三年分は、只今一時に差上げますから、一先づ歸國して下さい。』と言ひ出した、全體此場合では、兎に角理由がなくつて約束を破るのだから、



中々八釜しいのは、始から覺悟して居たのだが、併し向ふも己れの顔に免じて、思つた程は八釜しい理窟も言はずに、とう／＼おれの申出の通り承知してくれて、和蘭士官は、一同折りかへして歸國することゝなつた。こそで、己れは氣轉を利かして、一同を築地のホテルへ連れて来て、酒肴料として金を千兩呉れて遣つた。さうした處が大層己れに禮を云つて歸へつた。それからまづ一方の談判が落着いたから、今度は、英吉利の方は掛合をして、この方はもう譯もなく甘く遣り付けたが、此の事件を片付けるために、己れはあの時、早馬で三日の間横濱へ通つたよ。

此頃の英吉利公使いへば、夫の有名なパークスだが、今のサトウなどは、其の頃の書記生で、たしか廿四歳位で、年の若いのに似合はない遣り手であつたよ。此の時分にはね、己れを暗殺しようと企て、居る連中がいくらもあつたから、パークスなども『貴下は是非私の公使館へ来て居て下さらなければ危険だ。』云つて呉れた。けれど己れは、苟も天下の難局に當る以上は、暗殺位の事を恐れては、何事も出来るものではない、國事に斃れるのは、志士の本分だと考へて居つたから、外國の公使館へ逃

げ込むやうな、そんな卑屈未練の心は、露程も起さなかつた。それだから、サトウには『御親切は有がたいが、兎も角一國の大事に身を投げ出したからには、命が惜しいやうなことでは、何事も出来ないから、公使館へ逃げ込む様なことは御斷り申す。』と云つたら、サトウが云ふには、『それならば、何時如何なる事變が貴下の身邊に起るかも知れないから、寫眞を一枚撮つて置きなさい。』といつて勧めるから、それもさうかと思つて、即ち其の時撮つた寫眞は是だ。(とて示されたるは、即ち本書の巻頭に挿入せる翁の肖像これなり)

そこで、話が前に戻るが、さう云ふ風に、當時外交問題といへば、大抵己れが擔任して居つたから、己れの姓名は外國人には古くから知られて居る。それだから、多少名のある外客が、日本へ來る時は、大抵其の子供等迄も、勝さんの處へ寄つて見やうといつて、己れを尋ねて來るよ。己れは、日本では餘り名前が知れないけれども、勝安房といへば、西洋には随分鳴り響いて居るのだ。今の先生たちが、幾ら生意氣なことを云つても、それはいけない。まあ近い話が、あの遼東半島の態はどうだ。あんなこ



とは疾く知れて居つたから、早くから己れはちやんと注意してやつておいたのに、生意氣に己れの云ふことを聞かないものだから、あの通り切れ切つた馬鹿な目に遇ふのだ。外交が六ヶしいまどは、呆れ返るよ。己れは、是迄外交上の事に就ては、色々の目に出會つて見たが、遼東半島の三國干渉位のこと、朝飯前の仕事であつたよ。己れも此頃になつて、身體が益々丈夫になるのに就けて、世間のことが兎角癪に障つてならない。

こゝに又、外交家の秘訣は、彼を以て彼を制すると云ふことがある。是れも文久の昔の話のだが或る時露西亞の軍艦が對馬にやつて来て、軍艦の修繕がしたいと云ふ口實で、其の實速方もないことをするではないか、海岸を測量したり、地圖を拵へたり、山道を切り開いたり、畑地を作つたり、粗末ながらも兎に角兵舎様のものを建てたりそれは實に傍若無人の舉動をしたのだ。それが始めは、對馬の尾崎浦と云ふ處へ投錨したのであつたから、土地の役人は、開港場でない處へ軍艦を寄せることを詰問せうと思つて、小舟に乗つて軍艦の一二町手前まで遣いで行くと、軍艦からは、三艘の端

艇へ水兵を乗せて、この小舟を取り圍んで、水兵は矢庭に此方の舟に乗り移つて、一領と槍九條、其の外鐵砲脇差などを強奪して、本艦へ持つて行つて仕舞つた。此の時、土地の役人は、愈々彼等の無法を憤つて、軍艦に漕ぎつけて、色々談判に及んだが、彼等は少しも取り合はなかつた。そこで仕方がないから、其の日はまづ無事に引き上げて、翌日又々談判に行くと、今度は艦内で大層御馳走してからに、紙だの砂糖だの、日本の貨幣などを土産に贈つたが、併し肝腎な談判の方は、少しも要領を得なかつた。此の如く幾度掛合に行つても、何時も確とした返事をせず、ぐつぐつ日を送つて居る其の中に、南の方の要所々々は、悉皆端艇で測量してしまつて、悠々と錨を上げて北の方へ去つて仕舞つた。さうかうする内に、又外の魯艦がやつて来た。この魯艦からは、七十名ばかりの水兵を、小舟越と云ふ處へ上陸させて、松や杉などの立木を勝手に伐採して、何食はぬ顔で本艦へ運んで仕舞つた。此の體を見た番船は不屈者めと罵り合つて、本艦へ掛合に出かけると、軍艦からは啣筒を仕掛けて、海水をピユウ／＼雨のやうに注ぎかけて、さつさと何處へか行つて仕舞つた。まあ途方



もない亂暴な軍艦ではないか、それからと云ふものは、露西亞の軍艦は、幾回もやつて来たが、一番後に来たのなどは、軍艦を修繕すると云つて、今云つた通り粗末ながらも兵舎めいたものを建て、容易に引き上げる模様が無かつたから、そこでいよいよ八釜しい掛合になつた。處が今度は、向ふでも一層圖太い覺悟をして来たものと見えて、『私共は、上海に居りまする總督リハチヨフの差圖によつて、斯の如き事を致すものであるから、之に就いて若し御異存あれば、萬事上海の方へ御掛合なさるのがよい、私共の知る所では御座らぬ。』と澄まし込んで居て、何ともはや手の着けやうがなかつた。其の上彼等が云ふには、『佛蘭西は、今から一ケ年も経てば、地中海の方を掘り抜いて、支那への海路もそれから自由になるから、自然對馬最寄は、屢々航海する事となつて、結局此の地を占領するやうになるのは、心然の次第で御座る。然しながら我が露西亞においては、他國の領域を奪ひ取るなどの事は、誓つて致さないのみならず、貴國の御爲めに、大砲五十挺を對馬へ備へ付けて、それを獻納致したいからこの儀は他國へは一切秘密に願ひたい。』など、云つて居た。さあ此處だ、對馬は、此

時、事實上已に露西亞の爲めに占領せられたも同様であつたのだ。つまりかういふ場合こそ、外交家の手腕を要するこいふものだ。所でおれは、此の場合に處する一策を案じた。それは當時長崎に居つた英國公使こいふのは、至極おれが懇意にして居つた男だから、内密にこの話をして頼み込み、又長崎奉行からも頼み込みました。さうすると公使は、直に北京駐在英國公使に掛合ひ、其の公使は、また露國公使に掛合つて、堂々と露國の不條理を詰責して、譯もなく露西亞をして到頭對馬を引き拂はせて仕舞つたところがあつた。これが所謂彼に由りて彼を制するといふものだ。それを若もし當時の勢で、日本が正面から單獨で露西亞へ談判したものなら、露西亞はなかくうんと承知しなかつたであらうよ、假りに其の時談判が調はずに、對馬が今日露西亞の占領地になつて居ると思つて御覽、極東の海上權は、とても今のやうに日本の手で握るこゝは出来ないであらう。つまり外交上の事は、公法學も何も入つたものではない。只々一片の至誠、斷乎たる決心とを以て、上御一人を奉戴して、四千餘萬の同胞が一致協力してやれば、な



あに國際問題などは屁でもないのさ。

全體おれは幕末から明治の初年にかけて、自分に當局者でもなく、また成るべく避けて、居たけれども始終外交談判などを手傳はせられたことは右に云ふ通りの次第である。長州征伐の時にもあまり出過ぎた爲にお上から叱られ、オロシヤが来た時にも和蘭と交渉し、列國が下の關を砲撃した時にも長崎で談判を開き、薩長軋轢の時にも中に立ちなどして、長らくの間天下の安危を一身に引き負うたが、そのうちには色々人物に接した。そして日本人の間では憎まれ者になつたけれども、是でも大院君や李鴻章には、随分持てるのだ。先般薨去せられた島津公の如きも、三代以前から懇意である。おれはこれ程の古物だけれども、併し今日までにまだ西郷ほどの人物を二人と見たことがない。どうしても西郷は大きい。妙な處で隠れたりなどして、一向その奥行が知れない。厚顔しくも元勳など、濟まして居る奴とは、ミても較べものにならない。今年(明治卅年)の二月に鹿兒島へ南洲の碑が建つについて、徳川公も下向せられるといふから、おれは詩を書いて送つて置いた。

俯仰七十六

嘯吠大江東

知否九泉下

海内亦濛々

この知否と云ふのは、後から改めたのだ。

軍備縮少と云ふ議論が世間にあるやうだが、之れに就てはおれは、明治廿七年に政府へ建白した意見がある。昔の武士は、一本の刀を買ふ爲めに、家内中美しい着物を着ないで居たこともあつたが、正かこの筆法で今日の軍備を論ずる譯には行くまいけれど、まあ考へて御覽、歐洲列國の軍備は今日殖えるかと思ふか減ると思ふか、腹の中で無駄だとは思ひながら、馬鹿々々しいとは知りながら、公然と軍艦を縮小する國は何處にもあるまい。それに近年は彼等の勢ひが東洋に向いて来たから、この際、日本の取るべき方針は明らかではないか、たとへ貧乏したからといつて、軍艦縮小など吹聴する、は馬鹿げきつて居る。こゝが眞に呼吸ものだよ。

兵庫海軍練習所の事は、これ迄世間に秘して居たけれど、今となつては、最早公にしてよからうから、之を君に見せやう。(とて『海舟秘録』を示さる。中に曰く、) 文久の初、攘夷の論甚だ盛にして、攝海守備の説、亦囂々たり。(予建議して曰く



宜しく其規模を大にし、海軍を擴張し、營所を兵庫對馬に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三國合縱連衝して西洋諸國に抗すべしと。朝廷予の建議を賞美し

昭徳公亦之を嘉納す。三年癸亥、公蒸汽船に搭じて大坂より播州に至るの海濱を巡視し、兵庫より上陸し、神戸小野濱に到りて、海軍營所建築の地を自身に指畫せられたり。其床几跡の湮滅せん事をおそれ、予不文を顧みず、自ら記して一片の碑石を建てたり。其文左の如し。

文久三年歲次癸亥四月二十三日

大君駕火輪船、巡覽攝播海濱。至于神戸、相其地形、命臣義邦、使作海軍營之基。夫吾邦方今急務、莫落于海軍。將以此營爲始。

英旨振起士風、實在于是。可謂當時之偉圖、而千歲之鴻基也。願大君踞床指畫之處、恐其久而湮滅也、臣義邦謹勒于石、以貽永世云。

元治元年歲次甲子冬十月八日

軍艦奉行安房守勝物部義邦撰

おれも月日は忘れてしまつたが、何でもおれが大坂に居た時分であつた。京都では攘夷論が甚だ盛んで、佐久間も呼び出された頃だ。國防についての議論が種々に分れて八幡や山崎に臺場を築いて防ぐといふ論もあつたそうだが、いよく攝海の防禦が最も必要だといふことになつて、攘夷黨の公卿で有名な姉小路公知卿が大坂へ來た。當時攘夷黨が勢ひを振うた頃とて、何でも姉小路から召されて、その旅館本願寺に行たら、汝の意見を述べよといふことであつたから、おれは大に論じた。全體臺場を築くには莫大の費用が入るが、その出處はありますか、などと議論した。すると姉小路も初めて種々の事情が分つた様子で、頗る閉口したよ。そこでおれは、先づ私の汽船に乗つて攝海を巡視なされ、その上で見込を立てられよ。と勧めた所が、姉小路も早速承知して、順動丸に乗つて一晝夜間播磨攝津の海岸を巡視した。おれはまた、到底小さい臺場では役に立たないから、寧ろ海軍で以て國防の備をするに知かずといつたら、姉小路もいよく感服したよ。そこでは姉小路は京都へ歸つて朝廷へ説きつけた爲に、朝



廷でもおれの意見を容れるやうになり、また將軍の方も勿論おれの意見を採用した。この上は、將軍家も一應實地を巡視して置かなくてはいけないといふとで、おれが案内して巡視があつた。かういふ始末で兵庫に海軍が出来ることになつたのサ。海軍練習所は、今の神戸税關のある所にあつた。おれは生田の森の方に宅を構へて、澤山の塾生を置き、また少し見込があつたから地所をも段々買入れた。今兵庫縣廳が建つて居る邊も、當時おれの所有地だつたよ。もと神戸は七百石の天領で、路の兩側に百姓家があつて、街も一通りになつて居たが、庄屋を生島四郎太夫といつて、最初おれはその家を旅宿にした。その時生島に、この土地も今はつまらない百姓家ばかりだけれども早晚必ず繁華の場所になるから、地所などはしつかり買つて置けと、いつた所が、生島も半信半疑ながらにおれがいつた通り地所を買入れて置いたら、果して維新後には一坪何十圓といふ高價になつて、非常に儲けたさうだ。その後何かで少し損をしたといふとだけれど、今でもなかくの財産家だよ。おれは成るべくは土地の者を使つて遣らうといふ考で、百姓などを澤山用ゐたから、彼等も大に喜んで働い

たが、中にはその爲に財産家になつたものも随分あるよ。明治六年におれが神戸へ行たら、元おれの家の門番であつた飴賣の娘が、立派なお茶屋の主婦になつて居たよ。かういふ風だから、おれも神戸へ行くと中々もてるのサ。この時の將軍(昭徳公)は、歳はまだ若かつたが、なかく、聰明のお方で、巡視のこと、練習所のこと、おれが直接に申上げたのだ。塾生の中には、諸藩の浪人が多くて、薩摩のあばれものも澤山居たが、坂本龍馬がその塾頭であつた。當時のあばれもので、今は海軍の軍人になつて居るものが随分あるよ。然るに、幕府の役人からは、勝は海軍を起し、地所を買入れ、薩州のあばれものや、諸藩の浪人を集めて、そして彼等も亦喜んで勝に服しているといふのは何か仔細があるのであらうなどと、ひどく悪まれて、とう／＼しまひには江戸の氷川へ閉門を命ぜられ、地所なども一切取揚げられてしまつたよ。おれもあの地所が残つて居るとこんな貧乏でもあるまいにノー、ア、ア、。全體幕府の時に役人を譴責するには、前にも云ふ通りまづ謹慎を命じて置いて、次に書類取調といふ順序であつたが、おれ



の閉門中に大久保（一翁）などが書面を贈つて、此度はむづかしい取調べがある模様だから役人の前へ出てあまり種々の事はいはないがよからうと忠告して呉れた、然るに役人どもも當時世間の騒動の爲に、おれの方は忘れてしまつたと見えて、その後何の沙汰も無かつたが、慶應二年の五月頃になつて、俄に老中から召し出された。何れもくはな事ではあるまいと思つたけれども、兎も角も出頭した所が、至急上京せよといふことなので、おれも少しく意外に感じたが、命令に従うて再び大坂へ出たよ。

當事の事はかういふ次第で、海軍營所も駄目になつてしまつた。併しおれも最初から到底永續はすまい。必ず何か故障が起るであらうとは思つて居たけれども、將來の爲に先鞭を付けて置く考で遣りかけたのだ。それゆゑ前に見せた碑文を石に刻んで、土中へ埋めて置く考で居たところへ例の譴責を喰つたから、生島に何處へでも埋めて置けといひつけたまふで江戸へ歸つたが、その後生島は、山手にある自分の別荘の庭へ建てたさうだ。大方今でも其處にあるだらうよ。

文久三年の十二月に十四代將軍（家茂）が上洛せられる時は、幕府では例の通り陸路

東海道を御通過になるといふ豫定であつたけれども、おれは、日本は海國であるから國防の爲には海軍を起さねばならぬ。而して海軍を起すには將軍などが率先して之を奨勵して下さらなくてはいけない、それ故この度の御上洛も、諸藩の軍艦を従へて、海路より御出發あるがよろしからうと、老中などに建議した。所が老中なども、至極尤もの事ではあるが、諸藩から各その船を出させるのがなか／＼困難だと心配するから、それは私が屹度引受けます。併しながら一旦私にお任せある以上は、種々些細の事まで貴下がたより御指圖があつては困ります、といつたら、それは承知だから一切お前に任せるといふことになつた。そこでおれは直に諸藩に命じて、今度は將軍が海路より御上洛になるから、各々その船艦を出してお供をせよと達した。所が西洋形の船を所有する藩は、皆一艘づゝを出したが、また中には幕府の船を借りて、乗縣員だけは、その藩から出して來たものもあつた。その時集まつた船と船將とはこの表の通りだつた。



翔鶴丸

朝陽丸

幕府千秋艦

第一長崎丸

播龍丸

越前黒龍丸

薩摩安行丸

佐賀觀光丸

加州發起丸

南部廣運丸

筑前大鵬丸

雲州八雲丸

頭取 肥田濱五郎

伴 鐵太郎

荒井藤次郎

定役 鈴木卓太郎

長崎奉行所屬 頭取 濱口卓右衛門

不 明

セーラ鐵船 船將 大山彦介

幕府よ 番頭並 濱野源六

軍艦奉行 岡田雄次郎

長岡安之助

松本主殿

奉行 杉原奎

乗組員は皆 私共は船のことは誠に未熟であるから、萬事指圖を頼むといふから、よ

し〜おれが引受けた、心配するには及ばないといつて、おれの部下から堪能の者を三人ほどづゝ各藩の船に乗込ました所が、彼等も大に喜んだよ。その上彼等は藩から相當の手當をもらつて居る上に、幕府からも幕船同様に給料を與へたから、丁度二重に給料をもらふ都合で、ます〜喜んだよ。將軍が多數の軍艦を率ゐて上洛するといふことは、前古未曾有の事で、實に壯觀であつたよ。

併し前古未曾有の事であるだけ、おれは責任は重く、且つは諸藩の船もあることだから、おれは始線橋の上に登つて、艦體の全部を見渡して居たが、大阪へ着くまで一週間といふものは、殆ど眠らなかつたよ。

併し兎も角無事に大阪へ着いて、それから將軍は上洛せられたか、随分骨が折れたとはいへ、これも日本は海軍を盛んにせねばいけないといふ考から、幕府や諸藩の海軍を奨励する積りなのサ。

兵站部に關することが昔の歴史などに見えないのは、そんな事は書かなくても、



分りきつとるからだ。何時かおれの家で六七人の米國人に、日本料理を饗應した所が日本料理といふものを初めて食ふ米國婦人等は、奢の持ちやうから、何を一番に喰つてその次ぎに何を喰ふこいふことまで、珍しさに聞き糺し手帳に附けて歸つたが、今、日本人にはそんな事をわざ／＼記録して置くものもあるまい。兵站部に關する記録のないのは恰も之と同じだ。

維新の際、舊旗本の人々を静岡に移したのは凡そ八萬人もあつたが、政府では十日の間に移してしまへと注文したけれども、それは到底出来ないから二十日、猶豫を願つて、汽船二艘で以て運搬した。併しその困難は非常のもので、一萬二千戸より外になへ静岡へ、一時に八萬人も入り込むのだから、おれは自分で農家の間を奔走して、とにかく一まづ皆のものに尻を据ゑさせた。

この時、沼津の山間で家作も随分大きい舊家があつたが、そこへ五十年ばかり宿らせ、おれも共に一泊した。その家の主人は、今一寸名を忘れたが、七十あまりの老人で、おれに挨拶していふには、拙者の家は當地での舊家だが、貴人を宿させたのはこ

れで二度目だといふから、二度とは何時々だと問ふたら。昔し本多佐渡守様を泊めたのと、今夜勝安房守様を泊めるのだといふ。本多佐渡守を泊めたことについては何か記録でもあるかと尋ねたら、記録はないけれども、口碑に傳はつて居るといふ。然らば、その仔細を聞かせよといつたら、老人が話すには、それは太閤様小田原征伐の一年前で、明年こゝへ十萬の兵が来るから、豫め糧粉や馬糶を用意をする爲に小吏では事の運ばぬを恐れてか、本多様は自分でこゝへ御出になつたのだといふ。然らば明年になつて糧米馬糶は如何したかと問ふたら、答へるには十萬の兵が来た爲に米は却つて安くなつた。これは去年から皆の人が澤山貯へて置いたからだ。且つ又上様（家康）の御仕合には、沼津の海岸は常に浪が荒くつて、糧米などを大船みら陸揚げすることはむづかしいのに、この當時には丁度天氣がよくつて浪も穏やかであつた爲に、他國からも糧米を容易に輸入することが出来たからだ。それからといふものは、此地方では風波の平穩なのを『上様日和』と稱すると答へた。古人の意を用ゐたのは皆この通りだ。



さて、彼の八萬人を静岡へ移してから、三四日経つと澤庵漬はなくなり、四五日経つと塵紙が無くなりおれも實に狼狽したよ。

一個人の百年は、ちやうど國家の一年位に當るものだ。それ故に、個人の短い見を以て、餘り國家の事を急ぎ立てるのはよくないよ。徳川幕府でも、もうとても駄目だと諦めてから、まだ十年も續いたではないか。

時に古今の差なく、國に東西の別はない、觀じ來れば、人間は始終同じ事を繰り返して居るばかりだ。生麥、東禪寺、御殿山。これ等の事件は、皆な維新前の蠻風だと云ふけれども、明治の代になつても、矢張り、湖南事件や、馬關騷動や、京城事變があつたではないか。今から古を見るのは、古から今を見るのと少しも變りはないサ。此頃元勳とか何とか、自分でえらがる人達に、かういふ歌を詠んで遣つたよ。

時ぞとて咲きいでそめしかへり咲

咲くこ見しまにはやも散りなん

あれ等に分るか知らん、自分で豪傑がるのは、實に見られないよ、おれ等はもう年が

寄つた。

たをやめの王手さしかへ一夜ねん

夢の中なる夢を見んとて

政治家も、理窟ばかり云ふやうになつては、いけない、徳川家康公は、理窟はいけなかつたが、それでも三百年續いたよ。それに、今の内閣は、僅か卅年の間に幾度代つたやら。

全體、今の大臣等は、維新の風雲に養成せられたなど、大きな事をいふけれども實際劍光砲火の下を潜つて、死生の間に出入して、心膽を練り上げた人は少ない、だから、一國の危機に處して惑はず、外交の難局に當つて恐れない、といふほどの大人物がないのだ。先輩の尻馬に乗つて、そして先輩も及ばないほどの實貴榮華を極めて、獨りで天狗になるとは恐れ入つた次第だ。先輩が命がけで成就した仕事を譲り受けてやれ伯爵だとか、候爵だとかいふ様な事は、仕方がない。

世間の人には、もすこし大膽であつて貰ひたいものだ。政治家とか、何とかいつて



も、實際骨のあるものは幾らもありはしない。大きく見積つても六百位のものサ。然るに、今の大臣などは、この六百人ばかりを相手にわい／＼騒いで居るではないか。この弱虫のおれでさへ、昔は三百諸候を相手に、角力を取つたこともある位だのにナ。

政治をするには、學問や智識は、二番目で、至誠奉公の精神が、一番肝腎だ。と云ふことは、屢々話す通りであるが、舊幕時代でも、田沼といふ人は、世間では彼是いふけれども、矢張り人物サ。兎に角政治の方針が一定して居つたよ。

この時分にいつて、面白い話があるが、この頃、聖堂がひどく壞たて居たから、林大學頭から修理の事を申し出たが、その書面の中に『文宣公の廟云々』といふことがあつた。すると右筆等は集まつて、文宣公とは、どんな神様であらうかと色々評議をしたけれども、時の智者を集めた右筆仲間で、文宣公を言つて居るものがなかつた、そこで、文宣公とは何所の神だ、と附箋をして書面を返却した、大學守は直ぐに文宣公とは、唐土の仲尼の事だといつてやつたけれども、それでもまだ分らない。そこで、

大學領もたならず、仲尼とは、子曰はくの孔夫子の事だといつた、それで右筆もやうやく令點が行たといふことだ。

この話は舊平戸藩の明君と聞えた靜山公が、儒者を集めて、種々の話をさせて、それを筆記した『甲申夜話』といふ隨筆で見たが、なか／＼面白い。全體その時分の眞面目は、正史よりも、却つてこんな飾り氣のない隨筆などで分るものだ。

この話は、實に面白いではないか、右筆といへば、今の秘書官だか、宰相の片腕ともなるべきこの右筆が、孔子の名さへ知らないといへば、その人の學問も大抵は知れる。之に較べると、今の秘書官などは、外國の語も二つや三つは讀めるし、やれ法律とかやれ經濟とか、何一つとして知らないものはない。然るに、不思議のとは、孔子の名さへ知らない右筆を使つた時の政治より、萬能膏の秘最官を使ふ時の政治が、格別優つても居ないといふ事だ。畢竟、これも政治の根本たる至誤奉公といふ精神の關係だらうよ。

昔し扇谷と北條との戰に、扇谷の兵が負けて、武州八王子の城を引き擧げて、北の



方へ逃げた。その時、扇谷の家來に難波田彈正といふ勇者があつたが、北條の兵に追撃せられて、一生懸命に逃げる途中で、馬が斃れた。彈正は、徒歩で逃げやうとした所を、北條の兵が、難波田とも呼ばはる勇士が、敵に後ろを見せるとは、見苦しいと呼ばはつた、さうすると、難波田は少しも動ぜず聲高らかに、

君をおきてあだし心をわが持たば

末の松山浪もこゑなん

こいふ古歌を詠じた。ところが、追手の兵もさる者だ、この歌を聞いて、我々は勇士の忠膽を知らなかつた。死は易く、生は難し。難波田は、我が身の恥を忍んで、主君扇谷の跡を追ふのだ。かゝる忠臣を迫窮するのは、決して武士道ではないといつて、そのまま見のがしたといふ話がある。志士身を以て國に許すには、たゞ一身を以て、國家に奉ずるの外はない。難波田の如きは、實に皆の者の手本だよ。

又凡べて世の中を治めるには、大量寛宏でなくては駄目サ。八方美人主義では、その主義の奏効にばかり氣を取られて、國家の爲に大事業をやることは出来ない、戊

辰の事だつてさうだ。若しあの時、各藩に紛起した議論を一々氣に懸けて、何れへも當り障りのないやうにせうとでも思つたなら、とても今日の如き結果は、見られなかつたらうよ。自分に一定の見識がありさへすれば、如何なる事が起らうとも、一向構ふことはない。天下國家をして、正當な針路を進ませうといふ、大きな割出しがあるなら、區區たる小人の議論などは、聞かなくてもよいのだ。

又政治は、理窟ばかりで行くものではない。實地に就いて、人情や世態をよくよく觀察し、その事情に精通しなければ駄目だ、下手な政論を聞くよりも、無學文盲の徒を相手に話す方が大いにしました。文盲の徒の話は、純粹無垢で、而かもその中に人生の一大道理がこもつて居るよ。

日外も話した通りおれも維新前には、種々の仲間と交際したよ。新門の辰などは、隨分物の分つた男で、金や威光にはびくともせず、ただ意氣づくで交際するのだから、同じ交際するには力があつたよ。官軍が江戸城へ押し寄せて來た頃には、おれも大に考へる所があつて、所謂破落漢の糾合に取掛かつた。それは隨分骨が折れたよ。毎日



役所から下ると、直ぐに四つ手籠に乗つて、あの仲間で親分といはれる奴どもを尋ねてまはつたが、骨が折れるとはいふものゝ、なか／＼面白かつたよ。貴様等の顔を見込んで頼むことがある。併し貴様等は、金の力やお上の威光で動く人ではないから、この勝が自分でわざ／＼やつて来たと言ひふと、へー分りました。この顔が御入用なら、何時でも御生に立てますといふ風で、その胸のさばけて居る所などは、實に感心なものだ。官軍が江戸へはいつて、暫時無政府の有様であつた時にも、火付けや盗賊が割合に少なかつたのは、おれが豫めこんな仲間の奴を取り入れておいたからだよ。茶屋の女將にも澤山知り合ひがあつたよ。この仲間もなか／＼譯が分つたもので、人間の相場や人と人の關係などは、ちやんと飲み込んでしまつて居るよ。それ故こちらから頼まなくつても、向ふからこちらの腹を見抜いて、何時でもおれが行く直ぐに、こなひだは何藩の誰と何藩の誰とが見えて、こんな話やこんな議論がありましたなどゝ、頼みもしない前から話して呉れる所など、その氣轉には實に感心するよ。こんなものには、おれの方から氣を利かして、歸る時などは五十兩も投り出して、これ

がおれの名刺だ、よく讀めるだらう位のしやれをいつて歸るのサ。世間では、茶屋などをば、人間情落の場所といつて擯斥するけれども、こまかに觀察すると、その中にはなか／＼面白味があるものだ。畢竟、その人の見やうによつて、善もなり悪ともなり、利もなり害ともなるのだ。其處がまた世の中の面白い所サ。

併し、今の政治家には、こんな瑣細の處ろまでに注意する人はあるまい。行政學を一冊讀んで、天下の機關がうまく廻轉すれば、世の中は樂なものだ。御前とか閣下とかそんな追従ばかり聞いて居らずに、大臣なども少しは飾り氣のない卷舌でも聞いて見るが藥だよ。

尊王心と愛國心とが一致しないと、尊王の實は擧がらないよ。常世の尊王家たちには、ちと規模を大きくして貰いたいものだ。陪臣國命を執れば亡ぶと、聖人はいはれたけれども、北條は、九代も續いたのではないか、そして北條は、天下の執權でも、その頃は、わづかに從四位下で、かく申すおれよりも下ではないか、おれは、從二位勳一等の伯爵様だからノ………。人民を離れて尊王を説くのは、そも／＼末だワ



イ。  
文臣は、才智があつても勇斷がなく、武臣は、勇斷があつても才智がないのは、實に古今同一の嘆だ。大事に當つて、國家の安危と、萬民の休戚とを一身に引き受け、そして斷々乎として、事を處理するやうな大人物は、今の世に何人あるか。當今の時勢、うたゝこの嘆を深うするものがある。

國是とか何とか世間の人は喧しくいふが、口にいふばかりが國是ではない。十年も百年も、確然として動かない所のもので、何人からも認識せられてこそ、始めて國是といふことが出来るのだ。

人はよく方針々々といふが、方針を定めて何うするのだ凡そ天下の事は、豫め測り知ることが出来ないものだ。綱を張つて鳥を待つて居ても、鳥がその上を飛んだらどうするか。我に四角な箱を造つて置いて、天下の物を悉く之に入れようとしても、天下には圓いものもあり、三角のものもある。圓いものや、三角のものを捕へて、四角な箱に之れうといふのは、さてく御苦勞千萬の事だ、己れに執一の定見を懷き、これ

を以て夫下を律せんとするのは、決して王者の道でない、鳧の足は短く、鶴の脛は長いけれども、皆それく用があるのだ。反對者には、どしく反對させて置くがよい我が行ふ處は是であるから、彼等も何時か悟る時があるだらう。窮窟逼促は、天地の常道ではないよ。

幕府の路艦が、函館へ脱走した時にも、おれは棄てゝ置けば、彼等は軍費に窮して、直に降参するだらうといつたけれど、朝議は聽かないで、之れを征伐したものだからあの通り澤山の生命と費用とを、徒らに消耗してしまつた。

マ一世間の方針々々いふ先生たちを見なさい。事が一たび豫定の方針通りに行かないと、周章狼狽して、そのさまは見られたものではないよ。

行政改革といふことは、よく氣を付けないと弱い者いぢめになるよ。おれの知つてゐる小役人の中にも、これ迄随分ひどい目に遭つたものもある。全體、改革といふことは、公常でなくてはいけない。そして大きい者から始めて、小さいものを後にするがよいよ。言ひ換へれば、改革者が一番に自分を改革するのサ、松平越中守が、田沼